

神戸大学 文学部・大学院人文学研究科

2018 年度（平成 30 年）度

# 年次報告書

神戸大学文学部・大学院人文学研究科 評価委員会編

2019 年（平成 31 年）

# 目次

はじめに	1
第1部	
Ⅰ. 教育（文学部）	3
Ⅰ-1. 文学部の教育目的と特徴	3
Ⅰ-2. 教育の実施体制	6
Ⅰ-3. 教育内容・方法	10
Ⅰ-4. 教育方法	20
Ⅰ-5. 学業の成果	25
Ⅰ-6. 進路・就職の状況	30
Ⅱ. 教育（人文学研究科）	31
Ⅱ-1. 人文学研究科の教育目的と特徴	31
Ⅱ-2. 教育の実施体制	34
Ⅱ-3. 教育内容・方法	40
Ⅱ-4. 教育方法	50
Ⅱ-5. 学業の成果	57
Ⅱ-6. 進路・就職の状況	63
Ⅲ. 研究（文学部・人文学研究科）	66
Ⅲ-1. 文学部・人文学研究科の研究目的と特徴	66
Ⅲ-2. 研究活動の状況	68
Ⅲ-3. 競争的外部資金の獲得状況	72
第2部	
Ⅰ. 外部資金による教育研究プログラム等の活動	80
Ⅰ-1. 運営費交付金機能強化経費：実践型グローバル人材育成事業「日本語教育・ 日本研究を中心とした実践型グローバル人材育成事業」	80
Ⅰ-2. 科学研究費補助金基盤研究（S）（研究代表者：奥村弘、課題番号：26220403） 「災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立—東日本大震災を踏まえて—」	84

II. 部局内センター等の活動	86
II-1. 海港都市研究センター	86
II-2. 地域連携センター	88
II-3. 倫理創成プロジェクト	92
II-4. 日本文化社会インスティテュート	98
II-5. ESD コース (持続可能な開発のための教育コース)	98
III. 社会貢献	103
III-1. 公開講座	103
III-2. 高大連携	105
第3部	
I. 外部評価	106
I-1. 外部評価委員会	106
I-2. 外部評価報告書	107

# はじめに

大学院人文学研究科長・文学部長  
奥村 弘

この報告書は3部構成になっています。第1部は人文学研究科および文学部の教育と研究、第2部は外部資金による教育研究プログラム等の活動と、部局内センターおよびインスティテュートの活動、第3部は外部評価委員による評価です。さらに加えて、各教員の教育・研究・社会貢献等に関わるプロフィールを附しています。

第3期中期目標・中期計画期間（平成28年度～令和3年度）中も、基本的には第2期の6年間に毎年出してきた年次報告書の体裁を大きく変えることはせず、人文学研究科および文学部の教育研究活動に関する基礎資料を収集して自己評価を行っています。ただし、毎年実施している外部評価でのさまざまなご指摘に基づいて、正確なデータを掲載することと、学外者にもわかりやすい記述にすることに努めました。

文学部は、その前身である文理学部成立以来、2019年度で70周年を迎えました。その創設にあたっては、敗戦後、新たな市民社会形成が求められる中で、基礎的な学問の探求とそれを通じて養われる科学的精神の育成を通して、日本社会が世界的な文化水準に達することが必要であるとの理念が掲げられました。

現代社会の中で、この理念は更に深められ、その重要性を増しています。国連は、2015年に持続可能な開発目標（SDGs）を具体的な行動指針として設定し、その中で、「人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の推進、グローバル・シチズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して、全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする」ことを2030年までの具体的な目標として設定しています。このような文化に関わる課題への対応は、まさに人文学が社会に対して担う本質的な役割であり、SDGsの設定は、それが国際的に共有されていることを示すものでもあります。

このような現代社会の動向を踏まえ、70周年を契機に、人文学の教育研究のための新たな視座を得るため、70周年記念の連続企画を進めています。「表現手段としてのマンガ」の持つ多様な役割をテーマとした3月のキックオフ国際シンポジウム「『MANGA』—人文学研究の新展開—」を皮切りに、7月6日7日に、神戸大学・北京外国語大学との共同シンポ「中国・日本・東アジア1989～2019 —〈平成〉の内と外—」を開催、11月9日10日には、北京大学・復旦大学との国際シンポジウム、来年ははじめにかけては阪神・淡路大震災25年を迎える中で、災害と文化に関わる多様な企画を予定しています。また各研究領域においても全国レベルの研究集会を次々と展開しております。さらに、8月から神戸新聞紙上で、本学部の教員による大型連載「21世紀の人文学」を開始いたしました。またそのための物的基盤を豊かにするために「神戸大学文学部・大学院人文学研究科創立70周年記念事業募金」を進めています。学生により良い学びの場を提供するために、人文学の基礎

となる図書・資料等の充実をはかることと、本学部・研究科で培われた人文学の知を社会に発信していくための書籍出版助成を進めることを目的としたものです。

あらたな教育・研究の展開の一方で、文学部・人文学研究科の教育研究環境は厳しさを増しています。神戸大学では平成28年10月から教員組織と教育研究組織が分離され、29年4月からはポイント制が導入されて、人事のあり方が大きく変わりました。ポイント制が導入される際に、それまで保有していたポストをポイントに換算した数に一定の係数をかけて削減したものが部局に配分され、そこからさらに5%分のポイントを学長裁量枠ポイントとして供出しなければならず、合計で569ポイント減となりました。これは教授5名と講師1名分にあたり、実質的に6名の定員削減となったことを意味します。このような事態に対処するために、平成30年度から、新規採用教員については、退職後2年半をあけて講師・助教として採用することと基本方針と致しました。

人的にも経済的にも余裕がないにもかかわらず、これまで以上に質の高い教育と研究の成果が求められる状況において、本報告書から人文学研究科・文学部が1年間奮闘してきた軌跡を読み取っていただければと思います。

# 第1部

## I. 教育（文学部）

### I-1. 文学部の教育目的と特徴

文学部は、人類の長い歴史の中で培われてきた豊かな知的遺産に学びつつ、現代世界で生起するさまざまな現象にも新鮮な関心を持ち、両者の相互参照を通じて新しい世界認識の基盤を構築することを目指す「場」である。以下に本学部の教育目的、組織構成、教育上の特徴について述べる。

#### I-1-1. 教育目的

- 1 文学部は、広い知識を授けると共に、言葉と文化、人間の行動、歴史や社会に関する教育研究を行い、人間文化および現代社会に対する深い教養、専門的知識、柔軟な思考能力、豊かな表現能力を有する人材の育成を目的とする。そして、こうした人材が、磨かれ鍛えられた能力を十分に生かして、積極的に社会に貢献することを目指している。
- 2 このような教育目的を達成するために、現行の中期目標では、「教育憲章」に掲げた、「人間性」、「創造性」、「国際性」及び「専門性」を身に付けた個性輝く人材を養成し、「豊富な研究成果を活かして、社会の変化を先導し、個人と国際社会が進むべき道を切り拓く高度な知識・能力を有する、次世代の研究者をはじめとした多様な人材の養成に努め、教育の更なる高みを目指す」ことを定めている。
- 3 神戸大学全学のディプロマ・ポリシー（DP）を踏まえ、人材育成の基本となる文学部 DP およびカリキュラム・ポリシー（CP）を平成27年度に作成し、公開した《資料1》。

#### 《資料1：神戸大学文学部ディプロマ・ポリシー（DP）》

##### 神戸大学文学部ディプロマ・ポリシー

神戸大学文学部は、人類の文化的営みの蓄積としての人文学を、古典をとおして深く理解するとともに、社会的対話によりそれを実践していくことのできる人材を育成することを教育上の目的としている。また、徹底した少人数教育により、個々の学生の好奇心に応え、自ら問題を設定し、解決するスキルを学生に伝授することを目指している。

この目標達成に向け、文学部では、以下に示した方針に従って学位を授与する。

##### ○ 学位授与に関する方針

文学部の学生は、所定の単位（卒業論文を含む）を修得しなければならない。卒業論文の単位修得のためには、指定の期日までに卒業論文を提出し、卒業論文試験に合格することを要する。

##### ○ 達成目標

- ・各自の好奇心を学問的に問題化し検証する訓練を積むことで、人文学の幅広い知識と深い洞察力を身につける。
- ・人文学共通の問題・課題を、人類の知的営みの蓄積である古典を通じて理解する。
- ・文化・言葉・学域の壁を越えた意思疎通および連携を可能にする社会的対話力を身につける。

#### I-1-2. 組織構成

上記の教育目的を実現するために、文学部は《資料2》のような組織構成をとっている。人文学の古典的な学問領域である哲学、文学、史学を学ぶ3講座と人間的知識と感性をシステムとして捉える知識システム講座、社会文化に関わる問題をフィールドワークを通して深めていくことを目指す社会文化講座を置き、徹底した少人数教育によって専門的能力を陶冶することに重点を置いた教育課程を編成している。

《資料2：組織構成》

学 科	講 座	専 修
人文学科	哲学	哲学
	文学	国文学、中国文学、英米文学、ドイツ文学、フランス文学
	史学	日本史学、東洋史学、西洋史学
	知識システム	心理学、言語学、芸術学
	社会文化	社会学、美術史学、地理学

I-1-3. 教育上の特徴

- 1 文学部では、① 初年次に大学における人文学の基礎を学び、② それを踏まえて《資料2》の15専修から1つを選び、2年次からその専修において少人数教育により専門的能力を鍛え、③ 各専修内の複数の専門分野で自身の関心を絞り込み、卒業論文を書きあげる。文学部では特に、学部教育の集大成として卒業論文の作成を重視し、1～2年間の指導期間を設定している。
- 2 文学部は、少人数教育による課題探究能力の開発を重視している。具体的には、個別の主題を掘り下げる「特殊講義」などのほか、数人から十数人で行う「演習」が専修ごとに豊富に用意されている。「実験」や、フィールドワークを含む「実習」も同じく少人数で実施される。これらの授業において共通の文献や資料を精読し、さらに自分で選択したテーマについて研究報告を行い、互いに議論を戦わせ深め合うことで、学生は各専門の研究姿勢・基礎知識・研究方法および研究倫理等を習得する。それと同時に、自ら課題を発見し、解決する能力を磨く。
- 3 文学部は、平成23年3月にオックスフォード大学東洋学部と学術交流協定を締結し、「神戸オックスフォード日本学プログラム」（略称 KOJSP=Kobe-Oxford Japanese Studies Program）として、平成24年10月からオックスフォード大学東洋学部日文学科2年生全員を受入れている《資料3》（<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/graduate/kojsp.html>）。これはユニット受入れ型のプログラムであり、文学部とオックスフォード大学東洋学部との間の綿密な連絡・連携のもとに実施されており、派遣元から高い評価を受けるとともに、その交流は全学の取り組みに寄与している《資料4》。オックスフォード大生は午前中に日本語の授業を受講し、午後は文学部の様々な授業を他の学生と受けている。全員が参加する「KOJSP 演習」では、各自が自由に課題を選び、指導教員や学生チューターとともに日本の諸相についての研究を進め、その成果をプログラム修了時の発表会で披露することになっている。「KOJSP 演習」で選んだ課題をオックスフォード大学での卒業論文とする学生も少なくない。彼らの学習・生活面でのサポートを文学部の学生チューターが担うなど、世界最高レベルの学生とともに勉学し、学生生活を送ることで、文学部の日本人学生に対しても大きな影響を与えており、勉学に対する意識を高め、国際的な視野を獲得することに貢献している《資料5》。平成25年度からはハートフォード・カレッジにて夏季英語講習が神戸大学文学部と共同で実施されており、毎回20名前後の神戸大学生がオックスフォード大学で学んでいる。また、平成24年度からはじまった文部科学省グローバル人材育成推進事業「問題発見型リーダーシップを発揮できるグローバル人材の育成」の一環として「グローバル人文学プログラム」を実施している（<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/global/index.html>）。これらの事業を中心に、文学部ではグローバル教育の一層の活性化を図っている。

《資料3：神戸オックスフォード日本学プログラム留学生数》

年 度	所属大学名	出身国	奨学金	期 間
平成 25～30 年度	オックスフォード 大学 (10名)	連合王国 (6名) 連合王国・タイ (1名) 日本・連合王国 (1名) タイ (1名) ハンガリー (1名)	JASSO 及び 神戸大学 基金	26年10月1日～27年7月31日
	オックスフォード 大学 (10名)	連合王国 (6名) 連合王国・ギリシャ (1名) 連合王国・カナダ (1名) スペイン (1名) ベルギー・ロシア (1名)	JASSO	27年10月1日～28年7月31日
	オックスフォード 大学 (7名)	連合王国 (6名) 中国 (1名)	JASSO( 連 合王国5名、 中国1名)	28年10月1日～29年7月31日
	オックスフォード 大学 (10名)	連合王国 (7名) 日本・アメリカ (1名) 中国 (1名) スロバキア (1名)	JASSO	29年10月1日～30年7月31日
	オックスフォード 大学 (10名)	連合王国 (8名) フィンランド (1名) ポーランド (1名)	JASSO 及び 神戸大学 基金	30年10月1日～31年8月6日

《資料4：文学部のリードによって進むオックスフォード大学との交流》

<p>神戸大学 HP に掲載されたニュースから抜粋：</p> <p>○このプログラム (KOJSP) は、オックスフォード大学東洋学部日本語専攻の2年生全員が1年間を神戸大学文学部で学習するという、ユニット受け入れ型のプログラムです。</p> <p>○(武田廣学長一行) はオックスフォード大学副学長 Louise Richardson 教授を訪問し、オックスフォード大学側から東洋学部長 Ulrike Roesler 教授、日本学科長・元東洋学部長 Bjarke Frellesvig 教授と国際戦略室の Craig Morley 氏が懇談に参加しました。リチャードソン副学長が神戸オックスフォード日本学プログラムによる学生の受入に対して感謝を表明するとともに、オックスフォードと日本の交流事例を紹介しました。また、留学の重要性、日本の学生に留学を勧める方法等、活発な議論が行われました。</p> <p>○「一行はフレズビッグ教授とレイネル博士によるハートフォードカレッジのキャンパスツアーに参加しました。フレズビッグ教授主催のランチミーティングでは神戸オックスフォード博士研究員フェロースhipという神戸大学の人文科学研究科がオックスフォード大学の若手研究者を受け入れる新しい取組について活発な協議が行われました。この訪問は両機関の強力な関係を再確認する有意義な契機になりました。今後オックスフォード大学との更なる連携が期待されます。」</p> <p>(参照：<a href="http://www.kobe-u.ac.jp/NEWS/info/2018_11_09_02.html">http://www.kobe-u.ac.jp/NEWS/info/2018_11_09_02.html</a>)</p>
--



《資料5：KOJSPに関するオックスフォード大学生及び本学部チューターの声》

神戸大学文学部 HP から抜粋 (<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/let2016/report.html>) :

○オックスフォード大学生：「私が日本に来たのはこれが初めてだったので、留学生活がいったいどんなものになるのか、全くわかりませんでした。初めは緊張していましたが、神戸大学に来てから、いろいろと援助してもらったおかげで、本当に楽しく過ごせています。特にスーパーバイザー（同じ学部の先生）とチューター（同じ学部の方々）にはお世話になりました。」

○ KOJSP チューター：「同世代で共通点も多いですが、やはり文化差は存在します。特に差別に対する感覚や考え方については日本とイギリスではかなり違うので、私たち日本人が意図せずに彼らを傷つけてしまうこともあります。そういう時は親身になって彼らの話を聞き、相互理解を深めるのがチューターの役目です。」

I-2. 教育の実施体制

I-2-1. 基本的組織の編成

文学部では、学生1人1人の好奇心を、現代の人文科学の学問的状況に即して問題化し検証する訓練を積むことで、人間文化に対する幅広い知識と深い洞察力を身につけた社会人及び研究者を育成するという目的を達成するために、1学科（人文学科）を設け、その下に学問分野の観点から5大講座を置いている《資料2（2頁）》。教育組織の編成については、社会動向及び学問動向を勘案した上で専門性に応じた適切な教育を実施するために適宜見直しており、現行の1学科制は平成13年度に3学科（哲学科、史学科、文学科）から再編統合して新たに設置したものである。

教員の配置状況は、《資料6》及び《資料7》のとおりである。教育の単位となる15の専修にはそれぞれ2名以上の専任教員が配属され、演習・特殊講義・概論・入門・人文学基礎といった主要な科目を担当している。非常勤講師に担当を依頼している授業は、各専修の専任教員でカバーしきれない分野と、学芸員・教員などの免許・資格に関するものに限定されている。100名（平成28年度以前の入学生は115名）の入学定員に対し専任教員は50名であり、大学設置基準が要求する専任教員数を十分に確保している。

《資料6：教員の配置状況：平成30年5月1日現在》

学科	収容定員	専任教員数（現員）											助手		非常勤教員数	
		教授		准教授		講師		助教		計						
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	総計	男	女	男	女
人文学科	430	21	2	19	7	0	1	0	0	40	10	50	0	0	18	14

《資料7：専修別教員数》

専修	教授	准教授	講師	専修	教授	准教授	講師	専修	教授	准教授	講師
哲学	2	3	0	フランス文学	1	1	0	言語学	1	1	0
国文学	3	2	0	日本史学	2	2	0	芸術学	1	1	0
中国文学	2	1	0	東洋史学	1	3	0	社会学	3	2	0
英米文学	2	2	1	西洋史学	1	2	1	美術史学	1	1	0
ドイツ文学	1	1	0	心理学	2	2	0	地理学	1	2	0

入学者の選抜については、全学的な理念を踏まえながら文学部として求める学生像（アドミッション・ポリシー）を定め《資料8》、大学入試センター試験利用による基礎学力判断の後、個別学力試験では「国語」「外国語」「数学」（前期）、「外国語」「小論文」（後期）を課すことにより、理解力、読解力、語学力、問題解決能力、論理的思考力、表現能力などを総合的に判定することとしている。

学生定員と現員の状況については《資料9》、専修別の学生数（平成26～30年度）は《資料10》の通りである。在籍学生数は毎年学生定員を若干超過しているが、その数は、標準卒業年限を超える学生を含めて学生定員の15%以下であり、適正範囲であると考えられる。

《資料8：求める学生像（アドミッション・ポリシー）》

<p><b>神戸大学が求める学生像</b></p> <p>神戸大学は、世界に開かれた国際都市神戸に立地する大学として、国際的で先端的な研究・教育の拠点になることを目指しています。</p> <p>これまで人類が築いてきた学問を継承するとともに、不断の努力を傾注して新しい知を創造し、人類社会の発展に貢献しようとする次のような学生を求めています。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 進取の気性に富み、人間と自然を愛する学生</li> <li>2. 旺盛な学習意欲をもち、新しい課題に積極的に取り組もうとする学生</li> <li>3. 常に視野を広め、主体的に考える姿勢をもった学生</li> <li>4. コミュニケーション能力を高め、異なる考え方や文化を尊重する学生</li> </ol>
<p><b>文学部が求める学生像</b></p> <p>文学部では、人間がつくり上げてきた文化に対する好奇心を高め、多様な角度から人間存在の深みに光をあてる教育研究を行っています。各自の好奇心を学問的に問題化し検証する訓練を積むことで、人文学の幅広い知識と深い洞察力を身につけた人材を育成することを目標にしています。そのために、次のような学生を求めています。</p> <p>文学部の求める学生像</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. みずみずしい感受性と想像力を持っている学生</li> <li>2. 言葉や文化、人間の行動、歴史や社会に対する幅広い関心と好奇心を持っている学生</li> <li>3. 基礎学力、とりわけ論理的思考力、日本語および外国語の読解力・表現力、情報リテラシーを備えている学生</li> <li>4. 既成の価値観にとらわれることなく、自分で問題を発見し、探求していくことができる学生</li> </ol> <p>以上のような学生を選抜するために、文学部では、大学入試センター試験により総合的な基礎学力を測り、個別学力検査では「国語」「外国語」「数学」（後期日程にあつては、「外国語」「小論文」）を課すことにより、理解力、読解力、語学力、課題解決能力、論理的思考力、表現能力等を測ります。</p>

《資料9：学生定員（収容定員）と現員の現況：各年度12月1日現在》

学科	年度	収容定員	現員	定員充足率 (年)	定員充足率 (中期)
	平成26年度	460	514	112%	113%
	平成27年度	460	520	113%	
	平成28年度	460	518	113%	
	平成29年度	445	500	112%	
	平成30年度	430	457	106%	

《資料10：専修別の学生数（平成30年度）》

専修	2年	3年	4年	専修	2年	3年	4年	専修	2年	3年	4年
哲学	4	8	7	フランス文学	6	3	6	言語学	6	8	10
国文学	11	23	20	日本史学	9	7	6	芸術学	8	8	11
中国文学	0	4	2	東洋史学	3	1	5	社会学	18	18	17
英米文学	5	13	16	西洋史学	4	3	13	美術史学	8	8	10
ドイツ文学	5	6	7	心理学	12	12	14	地理学	6	3	4

I-2-2. 教育内容、教育方法の改善に向けた取組み

文学部では、1年次生を対象として、少人数ゼミ、オムニバス形式の講義、専門分野ごとの入門科目を開講しており、専門的知識の習得と共に、広い人文的な視座の獲得が可能となっている。

教育の実施体制を点検し改善していくため、評価委員会を置き、授業評価アンケートの実施など、教育に関わる評価作業を行うだけでなく、教員の教育方法及び技術の向上を図るためにファカルティ・ディベロップメント（以下、「FD」と略称）を開催している。文学部のFDは、平成23年度からは評価委員会が中心となり、教務・学生の2委員会の協力を得て行っている。また、学生による授業評価アンケート、教員相互の授業参観・評価（ピアレビュー）を定期的に行い、その結果は、FDにおいて評価委員長から報告され、今後のカリキュラム編成や授業方法の改善のために活用するとともに、中期目標の実現に向けた教育課程の改善が図られている《資料11》《資料12》。さらに、毎年度、評価報告書を作成し、独自に外部評価を受け、達成点と改善点を的確に把握し、それを教員・職員間で共有することに努めている《資料13》。

こうした活動を通して、個々の科目の授業内容を改善することはもちろん、カリキュラム構成や授業方法等の改善も頻繁になされており、たとえば、グローバル化に対応した授業として「グローバル人文学プログラム」に加えて、神戸オックスフォード日本学プログラムで受け入れているオックスフォード大学の学生が受講する授業等も展開されている。

《資料11：平成28～30年度のFD実施状況》

開催日	テーマ	参加者数
平成28年1月13日	教員評価について	41
平成28年1月27日	グローバルFD講演会「This, That, or the Other? On Japanese Studies in Romania」	49
平成28年2月2日	グローバルFD講演会「ヤゲウォ大学における国際化戦略」	41
平成28年2月17日	障害者差別解消法と来年度からの神戸大学の体制について	46
平成28年3月7日	平成27年度ピアレビュー結果の検討及び授業評価アンケートの結果について	53
平成28年6月8日	入試改革について	55
平成29年1月25日	平成27年度ピアレビュー結果の検討及び授業評価アンケート結果について	53
平成29年2月15日	Horizon 2020 セミナー	51
平成29年3月19日	"The Globalizing Strategy in the Education of the University of Hawaii" (「ハワイ大学における教育のグローバル化戦略」)	46
平成29年5月24日	「中国における日本語教育と北京日本学研究中心・神戸大学間のダブルディグリープログラムについて」	50
平成29年6月14日	「アカデミック・ライティング指導の意義 —早稲田大学の取り組みから—」	51
平成29年7月12日	「中東欧と日本：国際交流基金ブダペスト日本文化センターの活動報告」	45

平成29年9月6日	文部科学省事業「地(知)の拠点大学による地方創成推進事業(COC+)」について	41
平成29年12月20日	平成29年度ピアレビュー結果の検討について	48
平成30年7月25日	オックスフォード大学日本学における“神戸オックスフォード日本学プログラム”の役割と意義	43
平成30年9月19日	科学研究費助成事業説明会	46
平成30年9月28日	人文学研究科向け科研費若手研究への申請のポイント	32
平成30年11月14日	今後の入試のあり方について	50
平成30年12月19日	ピアレビュー・学修の記録および振り返りアンケートの実施結果および今後の検討について	53
平成31年3月6日	神戸大学出版会について	50

《資料12：平成30年度 ピアレビュー実施結果 抜粋》

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 実施期間 後期 平成30年11月12日(月)～16日(金)</li> <li>(2) 授業参観を行った教員数 29名 ※ 50%の参加率(休職中の教員を除く全教員数:57名)</li> <li>(3) 参観を受けた授業数 1名の参観者:18      2名の参観者:4      3名以上の参観者:1 ※ 講義科目のみを授業参観の対象科目としている。</li> <li>(4) 授業参観レポートの集計結果 <ul style="list-style-type: none"> <li>1. 授業改善上、参考になった項目(複数回答) <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 説明のしかた・・・・・・・・・・ 21</li> <li>○ 配布資料・板書などの視覚資料・・・・ 17</li> <li>○ 学生とのインタラクション・・・・ 10</li> <li>○ TAの使い方・・・・・・・・・・ 3</li> </ul> </li> <li>2. 自由な感想の主な内容(特に参考になった点)</li> </ul> </li> </ul> <p>○授業の内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 3分の2が外国人留学生であったが、多様な受講生に対して、板書と視覚資料をまじえてわかりやすく説明していた。</li> <li>・ 史料を学問的にどう扱うか伝える工夫がなされていた。</li> <li>・ はじめ理論的に、その後プロジェクターで実例を説明して見せるという段階を踏む丁寧な授業展開で理解が深まった。</li> <li>・ 奇をてらうことなく、多様な実例と教員の豊富な知識により、学生を退屈させずに重要な基礎知識を身につけさせていた。</li> <li>・ 難解なテキストを丁寧かつ分かりやすく解説し、しかもテキストに忠実に、楽しそうに進めていく点に学ぶべきところがあった。</li> <li>・ 難解な概念を平易な言葉で読み砕いて伝えようとする努力と話術に感心した。</li> <li>・ 学生の興味を引く話題を入れながら進めていくスタイルで参考になった。</li> <li>・ 前回の授業内容の要点を途中にはさみながら効果的に説明していた。</li> </ul>
--

《資料13：平成26～29年の外部評価実施状況》

実施日	外部評価委員
平成26年6月28日	深澤克巳（東京大学教授）
平成27年6月27日	立花政夫（東京大学名誉教授、元東京大学人文社会系研究科長）
平成28年7月3日	中島道男（奈良女子大学教授・奈良女子大学大学院人間文化研究科長） BONAVENTURA RUPERTI（ヴェネツィア大学教授・国際日本文化研究センター外国人研究員）
平成29年6月26日	中畑正志（京都大学大学院文学研究科・教授）
平成30年6月10日	佐々木徹（京都大学大学院文学研究科・教授）

### I-3. 教育内容・方法

#### I-3-1. 教育課程の編成

文学部では、ディプロマポリシーにおいて、学生が修了までに達成を目指す目標として、次の3点を挙げている。1) 各自の好奇心を学問的に問題化し検証する訓練を積むことで、人文学の幅広い知識と深い洞察力を身につける、2) 人文学共通の問題・課題を、人類の知的営みの蓄積である古典を通じて理解する、3) 文化・言葉・学域の壁を越えた意思疎通および連携を可能にする社会的対話力を身につける。これらを実現するために、以下のような教育課程を組んでいる。

教育課程は、「専門科目」及び「専門科目以外の科目」で構成されている。「専門科目以外の科目」は、「全学共通科目」である教養原論、外国語科目、情報科目、健康・スポーツ科目及び「資格免許のための科目」から成り、多様な授業科目を開講すると共に教育職員免許及び学芸員資格を取得するために必要な授業科目を提供している。「専門科目」は、演習と講義形式による概論、特殊講義を中心に構成され、多彩な研究領域に対応する多様な内容、形態の授業科目が置かれている。また、英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、中国語、韓国語、ラテン語、古典ギリシア語の外国語科目のほか、専門科目を学ぶにあたって必要となる語学力を涵養する授業も開講されている。以上の形で、幅広い知識と深い洞察力を身につけることができるようにしている。

文学部では、新入生全員を対象とした導入教育として、1年次前期に5つの講座がそれぞれ入門の講義を行うと共に、「人文学導入演習」を複数開講し、今後の教育に必要とされる基本的な視座や研究・学習方法の基礎を実践的に身につけさせている。また、平成28年度より「初年次セミナー」を実施し、神戸大学生・及び文学部生として身につけておくべき初歩的知識の修得をめざしている。さらに、1年次後期には15の専修がそれぞれ開講する「人文学基礎」においてより具体的かつ専門的な研究内容を学ぶ授業を提供している。文学部の学生は、このようにして人文学の基礎を学び、人文学共通の問題と課題を理解し、それを踏まえて15専修の中から1専修を自ら選び、その専修において、徹底した少人数教育をとおして専門的能力を陶冶し、さらに、各専修内に複数ある専門分野の中で自身の関心を絞り込んで卒業論文を作成することになっている。

「専門科目」の内容としては、例えば、「哲学演習」では、ドイツ語論文を精読することで文献読解力の向上をはかると共に学生間の議論をとおして問題探求能力を高めることを目指した。このような授業は古典理解をとおして人文学的課題を考える良い例である。

文学部の教育方針を明確化するため、平成18年度には履修モデルケースを専修毎に作成し提示した。また平成26年度から取り組んできた開講科目すべてに固有のナンバーを割当てる作業（ナンバリング）が完了し、それぞれの学年・専修において必要とされる科目が平成28年度から明確化されている。

### I-3-2. 学生や社会からの要請への対応

文学部では、グローバル化が進む現代社会における諸問題に対応し、また社会からの要請に応えるため、教育課程の編成やそれらに配慮した取組みを以下のとおり実践している。

#### 1. 他学部科目の履修

文学部では、他学部の専門科目を文学部開講専門科目の自由選択科目と同等に扱い、卒業要件単位として認めている。学生は、一定の要件のもとで、文学部の専門科目と他学部の専門科目から30単位を自由選択科目として修得し、卒業に必要な単位とすることができる。また、文学部、発達科学部、経済学部、農学部、国際文化学部、工学部及び医学部が共同で実施する「神戸大学ESDコース」(Education for Sustainable Development: 持続可能な開発のための教育)が設定されており、関係学部の授業を体系的に履修することができるようになった。ESDコースを修了しようとする学生は修了要件《資料14》の定めるところに従い、14単位以上を修得しなければならない。修了が認定された者には修了認定書が授与される。「神戸大学ESDコース」の授業科目として、文学部では「環境人文学」を開講し、広く環境問題に関わるアクションリサーチ型演習と講義を行っている。持続可能な社会のためには、特に市民・住民によるイニシアチブが重要であることを踏まえ、ボランティア活動やNPO活動といった事例を積極的に講義で扱っている。「ESDコース」については、「第2部 II-5. ESDコース」を参照。)

《資料14: ESDコース修了要件 授業科目名, 単位数, 開講時期及び開講学部等

授業科目区分等	授業科目名	単位数	必要修得単位数	配当年次	開講学部等	
基礎科目	実践農学入門	2	2	1年次	農学部	
	I ESD基礎(持続可能な社会づくり1) A	1		1年次	国際教養教育院	
	群 ESD基礎(持続可能な社会づくり1) B	1		2年次	国際教養教育院	
	ESDボランティア論	1		1年次	国際教養教育院	
	II 群	ESD論(持続可能な社会づくり2) A	1	2	1年次	国際教養教育院
		ESD論(持続可能な社会づくり2) B	1		1年次	国際教養教育院
		ESD生涯学習論A	1		1年次	国際教養教育院
		ESD生涯学習論B	1		1年次	国際教養教育院
関連科目	環境人文学講義 I (a)	1	6	2年次	文学部	
	環境人文学講義 I (b)	1		2年次	文学部	
	環境人文学講義 II (a)	1		2年次	文学部	
	環境人文学講義 II (b)	1		2年次	文学部	
	比較政治社会論A	1		2年次	国際人間科学部	
	比較政治社会論B	1		2年次	国際人間科学部	
	スポーツコミュニティ形成論1	1		3年次	国際人間科学部	
	スポーツコミュニティ形成論2	1		3年次	国際人間科学部	
	幼児心理学演習1	1		2年次	国際人間科学部	
	幼児心理学演習2	1		2年次	国際人間科学部	
	初等理科論1	1		2年次	国際人間科学部	
	初等理科論2	1		2年次	国際人間科学部	
	生活空間計画論	2		2年次	国際人間科学部	
	緑地環境論	2		2年次	国際人間科学部	
	知覚と行為1	1		2年次	国際人間科学部	
	知覚と行為2	1		2年次	国際人間科学部	
	グローバル開発政策論	2		2年次	国際人間科学部	
	生物多様性科学	2		2年次	国際人間科学部	
	環境社会学	2		2年次	国際人間科学部	
	コミュニティとメディア1	1		3年次	国際人間科学部	
コミュニティとメディア2	1	3年次	国際人間科学部			

	ライフコースの心理学1	1		3年次	国際人間科学部
	ライフコースの心理学2	1		3年次	国際人間科学部
	E S D実践論1	1		3年次	国際人間科学部
	E S D実践論2	1		3年次	国際人間科学部
	国際法I	2		2年次	法学部
	国際政治経済	2		2年次	法学部
	環境法	2		3年次	法学部
	社会保障法	2		3年次	法学部
	国際法II	2		2年次	法学部
	国際法III	2		3年次	法学部
	環境NPO実践論	2		2年次	経済学部
	社会コミュニケーション入門	2		2年次	経済学部
	社会環境会計	2		2年次	経営学部
	地域医療学	1		1~3年次	医学部医学科
	地域医療システム学	2		2年次	医学部医学科
	公衆衛生学	3		3年次	医学部医学科
	国際保健	1		2年次	医学部保健学科
	災害保健	1		3年次	医学部保健学科
	緩和ケア論	1		4年次	医学部保健学科
	リハビリテーション工学・福祉用具学	1		3年次	医学部保健学科
	現代医療と生命倫理	1		1年次	医学部保健学科
	I PW概論	1		1年次	医学部保健学科
	公衆衛生学	1		2年次	医学部保健学科
	環境・食品・産業衛生学	1		2年次	医学部保健学科
	小児疾病論	1		2年次	医学部保健学科
	地球環境論	1		1年次	工学部
	水文学	2		3年次	工学部
	国際関係論	1		3年次	工学部
	都市地域計画	2		3年次	工学部
	合意形成論	1		3年次	工学部
	農と植物医科学入門1	1		1年次	農学部
	農と植物医科学入門2	1		1年次	農学部
	熱帯有用植物学1	1		3年次	農学部
	熱帯有用植物学2	1		3年次	農学部
	森林環境学入門1	1		1年次	農学部
	森林環境学入門2	1		1年次	農学部
	食料生産管理学	2		2年次	農学部
	森林生態学	2		2年次	農学部
	土壌と環境	2		3年次	農学部
	森林保護学1	1		3年次	農学部
	森林保護学2	1		3年次	農学部
	海事社会学-1	1		1年次	海事科学部
	海事社会学-2	1		1年次	海事科学部
	阪神・淡路大震災A	1		2年次	国際教養教育院
	阪神・淡路大震災B	1		1年次	国際教養教育院
	ボランティアと社会貢献活動A	1		1年次	国際教養教育院
	ボランティアと社会貢献活動B	1		1年次	国際教養教育院
フィールド 演習科目	E S D演習 I (環境人文学) (a)	1	4	2年次	文学部
	E S D演習 I (環境人文学) (b)	1		2年次	文学部
	E S D演習 II (環境人文学) (a)	1		2年次	文学部
	E S D演習 II (環境人文学) (b)	1		2年次	文学部

E S D演習 I 1 (国際人間科学)	1	2年次	国際人間科学部
E S D演習 I 2 (国際人間科学)	1	2年次	国際人間科学部
E S D演習 II 1 (国際人間科学)	1	2年次	国際人間科学部
E S D演習 II 2 (国際人間科学)	1	2年次	国際人間科学部
環境法演習	2	3年次	法学部
国際法演習	2	3年次	法学部
国際関係論演習	2	3年次	法学部
E S D演習 I (環境経済学 I)	2	2年次	経済学部
E S D演習 II (環境経済学 II)	2	2年次	経済学部
初期体験臨床実習	1	1年次	医学部医学科
早期臨床実習 1	1	2年次	医学部医学科
早期臨床実習 2	1	3年次	医学部医学科
I P W	1	4年次	医学部医学科
初期体験実習	1	1年次	医学部保健学科
I P W統合演習	1	4年次	医学部保健学科
研究ゼミナール	1	2年次	医学部保健学科
看護研究方法論	1	3年次	医学部保健学科
寄生虫検査学実習	1	3年次	医学部保健学科
検査統合演習	1	3年次	医学部保健学科
日常生活活動学実習	1	2年次	医学部保健学科
理学療法地域医療実習	1	3年次	医学部保健学科
基礎作業学実習 I	1	2年次	医学部保健学科
基礎作業学実習 II	1	3年次	医学部保健学科
兵庫県農業環境論 A	1	2年次	農学部
兵庫県農業環境論 B	1	2年次	農学部
実践農学	2	2年次	農学部
必要修得単位数の合計	14 単位以上		

## 2. 海外協定校との単位互換

文学部は全学協定及び部局間協定に基づき海外の大学と単位互換協定を締結している《資料15》。この制度に基づく平成25～29年度の学生交換の実績は、受け入れ70名《資料16》、派遣34名である《資料17》。交換留学等によりこれら海外の協定校で取得した単位のうち60単位までを卒業に必要な単位として認定することで、より積極的な留学を支援している。

### 《資料15：単位互換協定を締結している海外の大学 平成30年3月現在》

協定校	国名	大学間協定	部局間協定
木浦大学校	大韓民国	○	
成均館大学校	大韓民国	○	
韓国海洋大学校	大韓民国	○	
ソウル国立大学校	大韓民国	○	
高麗大学校	大韓民国	○	
国立群山大学校	大韓民国	○	
木浦海洋大学校	大韓民国	○	
韓国外国語大学校	大韓民国		○
山東大学	中華人民共和国	○	



華東師範大学思勉人文高等研究院	中華人民共和国	○	
中山大学	中華人民共和国	○	
南京大学	中華人民共和国	○	
中国海洋大学	中華人民共和国	○	
復旦大学	中華人民共和国	○	
北京外国語大学	中華人民共和国	○	
武漢大学	中華人民共和国	○	
上海交通大学	中華人民共和国	○	
清華大学	中華人民共和国	○	
上海海事大学	中華人民共和国	○	
大連海事大学	中華人民共和国	○	
江南大学	中華人民共和国		○
鄭州大学	中華人民共和国		○
浙江大学	中華人民共和国		○
香港大学	中華人民共和国		○
東北大学	中華人民共和国		○
国立台湾大学	台湾	○	
国立政治大学	台湾	○	
国立台湾海洋大学	台湾	○	
スラバヤ工科大学	インドネシア	○	
南洋理工大學	シンガポール	○	
モンゴル国立大学	モンゴル	○	
イスタンブール工科大学	トルコ	○	
クイーンズランド大学	オーストラリア	○	
西オーストラリア大学	オーストラリア	○	
ウーロンゴン大学	オーストラリア	○	
オーストラリア商船大学	オーストラリア	○	
ピッツバーグ大学	アメリカ	○	
オタワ大学	カナダ	○	
グラーツ大学	オーストリア	○	
インスブルック大学	オーストリア		○
カレル大学	チェコ	○	
パリ第2大学	フランス	○	
パリ第10大学	フランス	○	
リヨン高等師範学校	フランス	○	
パリ第7大学	フランス	○	
リール大学	フランス	○	
バルセロナ大学	スペイン	○	

バーゼル大学	スイス	○	
バーミンガム大学	イギリス	○	
SOAS ロンドン大学東洋アフリカ研究学院	イギリス	○	
オックスフォード大学	イギリス	○	
エセックス大学	イギリス	○	
ライデン大学	オランダ	○	
ソフィア大学	ブルガリア	○	
ブリュッセル自由大学	ベルギー	○	
ヴェネツィア大学	イタリア	○	
ボローニャ大学	イタリア	○	
トリノ大学	イタリア	○	
ヤゲウォ大学	ポーランド		○
ニコラウス・コペルニクス大学	ポーランド	○	
キール大学	ドイツ	○	
マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク	ドイツ	○	
トリーア大学	ドイツ	○	
ハンブルク大学	ドイツ	○	
ダルムシュタット工科大学	ドイツ	○	
ブカレスト大学	ルーマニア	○	
ディミトリエ・カンテミルキリスト教大学	ルーマニア		○
サンクトペテルブルグ大学	ロシア	○	
エトヴェシュ・ローランド大学	ハンガリー	○	

《資料16：交換留学（受入）実績》

年度	所属大学名	出身国	奨学金	期 間
平成 25年度	上海交通大学	中華人民共和国		25年4月1日～26年3月31日
	成均館大学	大韓民国		25年4月1日～25年9月31日
	北京外国語大学	中華人民共和国		25年4月1日～26年3月31日
	パリ第7大学	フランス		25年10月1日～26年9月30日
平成 26年度	北京外国語大学	中華人民共和国	JASSO	26年4月1日～27年3月31日
	武漢大学	中華人民共和国	JASSO	26年4月1日～27年3月31日
	武漢大学	中華人民共和国	JASSO	26年10月1日～27年9月30日
	上海交通大学	中華人民共和国	JASSO	26年4月1日～27年3月31日
	パリ第7大学	フランス	JASSO	26年10月1日～27年9月30日
	国立台湾大学	台湾	JASSO	26年10月1日～27年3月31日
	山東大学	中華人民共和国	JASSO	26年10月1日～27年9月30日
	ロンドン大学 SOAS	連合王国	JASSO	26年10月1日～27年9月30日
	成均館大学	大韓民国	HUMAP	26年10月1日～27年3月31日
	カレル大学	チェコ	JASSO	26年10月1日～27年9月30日
	木浦大学校	大韓民国	HUMAP	26年10月1日～27年9月30日

	ワシントン大学	アメリカ合衆国	JASSO	26年10月1日～27年9月30日
	清華大学	中華人民共和国		26年10月1日～27年3月31日
平成 27年度	武漢大学	中国	JASSO	27年4月1日～28年3月31日
	グラーツ大学	オーストリア		27年4月1日～27年9月30日
	中山大學	中国	HUMAP	27年10月1日～28年3月31日
	ピッツバーグ大学	アメリカ		27年10月1日～28年9月30日
	西オーストラリア大学	オーストラリア		27年10月1日～28年3月31日
	グラーツ大学	オーストラリア	JASSO	27年10月1日～28年9月30日
	ロンドン大学 SOAS	連合王国	JASSO	27年10月1日～28年9月30日
	パリ第7大学	フランス	JASSO	27年10月1日～28年9月30日
	パリ第7大学	フランス	JASSO	27年10月1日～28年9月30日
	平成 28年度	西オーストラリア大学	オーストラリア	
西オーストラリア大学		オーストラリア		28年4月1日～28年9月30日
北京外国語大学		中国	神戸大学基金	28年4月1日～29年3月31日
武漢大学		中国		28年4月1日～28年9月30日
ピッツバーグ大学		アメリカ		28年10月1日～29年9月30日
トリーア大学		ルクセンブルク		28年10月1日～29年9月30日
トリーア大学		ドイツ		28年10月1日～29年9月30日
中山大學		中国	HUMAP	28年10月1日～29年9月30日
木浦大学校		韓国	HUMAP	28年10月1日～29年9月30日
復旦大学		中国	神戸大学基金	28年10月1日～29年3月31日
平成 29年度	ピッツバーグ大学	アメリカ		29年4月1日～29年9月30日
	ピッツバーグ大学	中国	JASSO	29年10月1日～30年3月31日
	ピッツバーグ大学	日本		29年10月1日～30年9月30日
	クイーンズランド大学	オーストラリア	JASSO	29年4月1日～30年3月31日
	北京外国語大学	中国	JASSO	29年4月1日～30年3月31日
	清華大学	インドネシア	JASSO	29年10月1日～30年3月31日
	清華大学	中国	JASSO	29年10月1日～30年3月31日
	清華大学	韓国	JASSO	29年10月1日～30年3月31日
	上海交通大学	中国	JASSO	29年10月1日～30年3月31日
	武漢大学	中国	JASSO	29年10月1日～30年9月30日
	中山大學	中国	HUMAP	29年10月1日～30年9月30日
	木浦大学	韓国	HUMAP	29年10月1日～30年9月30日
	木浦大学	韓国	HUMAP	29年10月1日～30年9月30日
	ロンドン大学 SOAS	イギリス	JASSO	29年10月1日～30年9月30日
	ロンドン大学 SOAS	イギリス	JASSO	29年10月1日～30年9月30日
	グラーツ大学	オーストリア	JASSO	29年10月1日～30年9月30日
	ボローニャ大学	イタリア		29年10月1日～30年9月30日
	上海交通大学	中国	JASSO	30年4月1日～30年9月30日
	ピッツバーグ大学	アメリカ	JASSO	30年4月1日～30年9月30日

平成 30年度	ピッツバーグ大学	アメリカ		30年4月1日～30年9月30日
	オタワ大学	カナダ	JASSO	30年4月1日～30年9月30日
	オタワ大学	カナダ	JASSO	30年4月1日～30年9月30日
	グラーツ大学	オーストラリア	JASSO	30年4月1日～30年9月30日
	カレル大学	チェコ	JASSO	30年4月1日～30年9月30日
	カレル大学	チェコ	神戸大学基金	30年4月1日～30年9月30日
	サンクトペテルブルク 大学	ロシア		30年4月1日～30年9月30日
	バーミンガム大学	イギリス		30年4月1日～30年9月30日
	北京外国語大学	中国	JASSO	30年4月1日～31年3月31日
	国立台湾大学	台湾	JASSO	30年10月1日～31年9月30日
	清華大学	中国	JASSO	30年10月1日～31年9月30日
	クイーンズランド大学	オーストラリア	JASSO	30年10月1日～31年3月31日
	西オーストラリア大学	オーストラリア	JASSO	30年10月1日～31年3月31日
	西オーストラリア大学	オーストラリア	JASSO	30年10月1日～31年3月31日
	ロンドン大学アジア・ アフリカ研究学院 (SOAS)	イギリス	JASSO	30年4月1日～30年9月30日
	ロンドン大学アジア・ アフリカ研究学院 (SOAS)	イギリス	JASSO	30年4月1日～30年9月30日
	ライデン大学	オランダ	JASSO	30年10月1日～31年3月31日
	カレル大学	チェコ		30年10月1日～31年3月31日
	トリーア大学	ドイツ	JASSO	30年4月1日～30年9月30日
	トリーア大学	ドイツ	JASSO	30年4月1日～30年9月30日
	トリーア大学	ドイツ		30年10月1日～31年3月31日
	リール大学	フランス	HUMAP	30年4月1日～30年9月30日
	リール大学	フランス	HUMAP	30年4月1日～30年9月30日
	リール大学	フランス	HUMAP	30年4月1日～30年9月30日
	パリ・ディドロ (パリ 第7) 大学	フランス	JASSO	30年4月1日～30年9月30日
	サンクトペテルブルク 大学	ロシア		30年10月1日～31年3月31日
	サンクトペテルブルク 大学	ロシア		30年10月1日～31年3月31日
	エセックス大学	イギリス	JASSO	30年4月1日～30年9月30日
	エセックス大学	イギリス	JASSO	30年4月1日～30年9月30日
	中山大学	中国	HUMAP	30年4月1日～30年9月30日
木浦大学	韓国	HUMAP	30年4月1日～30年9月30日	
復旦大学	中国	JASSO	30年10月1日～31年3月31日	

※HUMAP：兵庫・アジア太平洋大学間交流ネットワーク、JASSO：日本学生支援機構、JENESYS 日韓文化交流基金

《資料17：交換留学（派遣）実績》

年度	派遣大学名	派遣国	奨学金	期 間
平成 25年度	ハンブルク大学	ドイツ		25年8月1日～26年7月31日
	ワシントン大学	アメリカ合衆国	JASSO	25年9月25日～26年6月14日
	パリ第7大学	フランス	JASSO	25年9月1日～26年6月30日
	グラーツ大学	オーストリア	JASSO	25年9月5日～26年7月5日
平成 26年度	バーミンガム大学	連合王国	JASSO	26年9月22日～26年12月12日
	パリ第10大学	フランス	JASSO	26年9月4日～27年7月10日
	ワシントン大学	アメリカ合衆国	JASSO	26年9月24日～27年6月12日
	ロンドン大学 SOAS	連合王国	JASSO	26年7月28日～27年6月12日
	西オーストラリア大学	オーストラリア	JASSO	26年2月23日～27年11月21日
平成 27年度	ハンブルク大学	ドイツ	JASSO	27年10月1日～28年9月30日
	バーミンガム大学	連合王国	JASSO	27年9月21日～28年6月17日
	ヴェネツィア大学	イタリア	JASSO	27年9月7日～28年6月18日
	パリ第7大学	フランス	JASSO	27年9月1日～28年6月30日
	グラーツ大学	オーストリア	JASSO	27年10月1日～28年7月1日
	ピッツバーグ大学	アメリカ	JASSO	27年8月31日～28年12月19日
	ロンドン大学 SOAS	イギリス	JASSO	27年7月27日～28年6月10日
復旦大学	中国	JASSO	28年2月26日～29年1月13日	
平成 28年度	トリーア大学	ドイツ	JASSO	29年3月7日～30年2月10日
	ピッツバーグ大学	アメリカ	JASSO	29年1月4日～29年4月29日
	ボローニャ大学	イタリア	JASSO	28年11月16日～29年3月25日
	ハンブルク大学	ドイツ	JASSO	28年10月1日～29年7月15日
平成 29年度	上海交通大学	中国	JASSO	29年2月26日～30年1月14日
	上海交通大学	中国	JASSO	29年2月26日～30年1月14日
	国立台湾大学	台湾	JASSO	29年9月5日～30年6月29日
	国立台湾大学	台湾	JASSO	29年9月5日～30年6月29日
	オタワ大学	カナダ	JASSO	29年9月3日～29年12月31日
	ライデン大学	オランダ	JASSO	29年8月22日～30年7月20日
	パリ第7大学	フランス	JASSO	29年9月1日～30年6月30日
	ロンドン大学 SOAS	イギリス	JASSO	30年1月8日～30年7月6日
クイーンズランド大学	オーストラリア	JASSO	30年2月19日～30年11月18日	
平成 30年度	上海交通大学	中国	JASSO	30年9月10日～31年6月30日
	武漢大学	中国	JASSO	30年9月3日～31年7月31日
	バーミンガム大学	イギリス	JASSO	30年9月24日～31年6月21日
	復旦大学	中国	JASSO	30年9月10日～31年7月15日
	パリ・ディドロ（パリ第7）大学	フランス	JASSO	31年1月2日～31年6月29日

### 3. グローバル教育への取組み

平成20年度からは、語学科目以外に全てを英語で行なう授業科目を開講し、アカデミックかつ実践的な英語能力の涵養を目指している。具体的には、英米文学及び言語学関係の外国人教員による授業（「比較現代日本文化論特殊研究」「アカデミック・ライティング」等）を平成23年度から継続的に行なっている。また、社会学分野では平成24年度から、英語による専門授業を開講している。語学学習への多様な支援として、平成24年度から本学部の全学年に TOEFL itp の無料受験を実現し、海外留学や国際交流への意識向上を図っている。また、英語のスキル向上のために、希望者には「英語アフタースクール」を実施し、能力や志向に応じた細やかな語学学習が可能となっている。

文学部では、神戸オックスフォード日本学プログラムなどによって、国際的な場で活躍できる学生を育成してきたが、平成24年度文部科学省「グローバル人材育成推進事業（タイプ B 特色型）」に採択された「問題発見型リーダーシップを発揮できるグローバル人材の育成」プログラム（平成26年度より「スーパーグローバル大学等事業 経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」に名称変更）に基づき、「グローバル人文学プログラム」を実施してグローバル教育を積極的に推進している。人文学をグローバルな視点で学ぶことにより、高度な国際感覚を育成するための外国語授業科目群（グローバル人文学科目群）、そしてオックスフォード大学ハートフォード・カレッジにおける3週間の短期留学プログラムである「オックスフォード夏季プログラム」など、グローバル社会で活躍できる優れた外国語能力とコミュニケーション能力を育成するための授業科目群（グローバル対話力育成科目群）からなる「グローバル人文学プログラム」を実施している。このプログラムは、すべて外国語で授業が行われており、所定の単位を取得し、「外国語カスタンダード」（TOEFL 等の外国語試験における所定のスコア）を達成した者には、修了時に「グローバル人文学プログラム修了証」を授与している。その結果、本プログラムが目的として掲げる「人文学的課題をグローバルな視点から考察し、日本文化の深い理解を基に異文化との対話を重ねながら、現代社会における諸問題を解決に導いていくリーダーシップとコミュニケーション能力を持った人材」が育ちつつある。（「グローバル人材育成推進事業」については、「第2部 I-1. 運営費交付金機能強化経費：実践型グローバル人材育成事業」78-82頁を参照。）

### 4. 地域との連携による新たな教育研究の開発

地域歴史遺産の活用を図る地域リーダーの養成を目的とした「地域歴史遺産保全活用基礎論 A・B」「地域歴史遺産保全活用演習 A・B」を文学部専門科目として開講し、史料の保全と活用を通じて、地域との有機的な交流がなされている。

## I-4. 教育方法

### I-4-1. 授業形態の組合せと学習指導法上の工夫

授業形態は、主として講義・演習からなり、平成30年度の開講科目数は講義科目が420（約60%）、演習・実習科目等が275（約40%）となっており、やや講義の割合が増えている《資料18》。

講義科目の次に演習科目が多いのは、人文学の学問の根幹をなす文献読解能力、資料調査分析能力、表現力の鍛錬に重点を置き、研究の集大成として卒業論文を重視する、文学部の教育目的に沿う措置による。演習の質は学生の研究報告によって担保される。そのため、文学部では1年次生を対象とする各講座の入門講義によって人文学の全体像を俯瞰させるとともに、各専修が人文学導入演習や人文学基礎の少人数教育を開講することによって、人文学の研究手法や調査技法について丁寧に訓練を行い、専門教育への円滑な導入を図っている。演習の授業は同時に研究倫理教育の実践的な場でもあり、盗用などの研究不正について各専修で適切な指導が行われている。

平成30年度は、34の講義、57の演習、8の実習科目に対してティーチング・アシスタント（TA）を配置した。授業運営の補助や受講者のための事前学習・事後学習のフォローを適宜行わせ、少人数教育の一助としている《資料19》。TA に対しては各学期始めにガイダンスを行い、TA ハンドブック等による指導をしている。また業務終了後には実施報告書を提出してもらい、その分析・検討及びTA に対するフィードバックを行っている。

なお平成28年度より、神戸大学では一部の学部・研究科を除いて新たに「2学期クォーター制」を導入し、従来、前期・後期にそれぞれ2単位を付与してきた課程を改変し、1クォーターごとに1単位を付与することになり、文学部にもこれが導入された。従来のセメスター制に基づく学生の在学中は二つの制度が並走することになって負担が重くなり、混乱が生じていることは否めない。

#### 《資料18：平成30年度の授業形態》

授業形態	講義	演習	実習	実技	研究指導
授業数	420	261	8	4	2

#### 《資料19：平成25～30年度のTAの文学部への配置実績》

授業形態	TA 配置人数					
	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度
講義	32	34	25	37	34	34
演習	59	53	78	50	55	57
実習	9	13	10	10	11	8
実技	0	0	0	0	0	0

教育を展開する上での指導法の工夫として、本学部ではフィールド型授業も重視している。「地域歴史遺産保全活用演習 B」では、事前指導で古文書・絵図等の取扱いを学んだ後、実際の地域歴史遺産資料を用いた実習を行うことで、地域遺産の保全と活用に関する実践的な知識・技能を得ることを目指している《資料20》。

また、「グローバル・アクティブ・ラーニング」として、他大学の学生らと共に学外のワークショップに参加し、より開かれた場での討論に参加し、公開成果発表会でプレゼンテーションを行うことで、受講生にさらに積極的な学びの場を提供している《資料21》。

《資料20: 「地域歴史遺産保全活用演習 B (a)」 シラバス》

開講科目名	地域歴史遺産保全活用演習 B (a)			
担当教員	奥村 弘、河島 真		開講区分	単位数
			後期	1.0単位
ナンバリングコード		曜日・時限	他	時間割コード
				2L562
<p>授業のテーマ</p> <p>地域歴史遺産のうち、とくに古文書・絵図等の地域史料に直接触れ、その解説と整理、さらにその指導方法について学ぶ。これを通じて受講生が、今後、それぞれの職場や居住地などにおいて、地域遺産の保全と 活用に関する実践的・応用的な知識・技能を得られるよう努力する。</p> <p>授業の到達目標</p> <p>授業の概要と計画</p> <p>2月中下旬に、まず学内で事前指導をおこない、その後合宿形式で集中的に古文書の取り扱い方について実習する(学外。1泊2日予定)。 事前指導と合宿の日取り等の詳細については、後日掲示板にて発表するので注意しておくこと。なお、合宿経費・交通費等はすべて受講生負担となるので、受講を希望する学生はその旨を了解しておくこと。</p> <p>成績評価方法</p> <p>出席点と合宿後のレポートによる。事前指導と合宿日程すべてに参加しなければ、単位取得は認めないので注意すること。</p> <p>成績評価基準</p> <p>履修上の注意 (関連科目情報)</p> <p>受講生は、古文書の読解と整理についての基礎的な技能を身に付けていることが望ましく、その上に立ってそれらの指導方法を学ぶように努めてほしい。</p> <p>事前・事後学修</p> <p>オフィスアワー・連絡先</p> <p>人文学研究科A棟315研究室 月曜12:30-13:20</p> <p>学生へのメッセージ</p> <p>地域歴史遺産の専門的素養を身につけるべく努力して下さい。</p> <p>今年度の工夫</p> <p>教科書</p> <p>指定しません。</p> <p>参考書・参考資料等</p> <p>授業中に適宜紹介します。</p> <p>授業における使用言語</p> <p>日本語</p> <p>キーワード</p> <p>日本史 古文書 古地図 地域歴史遺産</p>				



《資料21：「グローバル・アクティブ・ラーニング」シラバス》

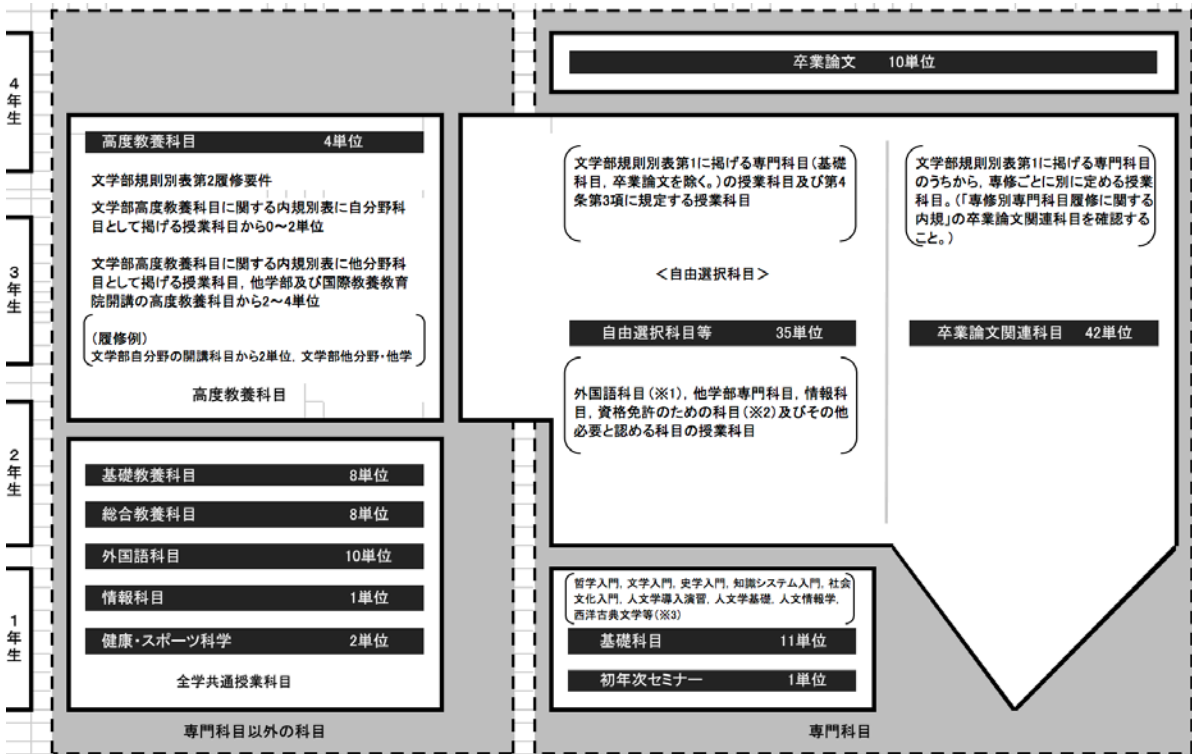
開講科目名	グローバル・アクティブ・ラーニング [GH]				
担当教員	嘉指 信雄、シギナシ ミハエラ		開講区分	単位数	
			後期	1.0単位	
ナンバリングコード		曜日・時限	他	時間割コード	2L219
<b>授業のテーマ</b> 					
<b>授業の到達目標</b> 広島で開かれるワークショップに、留学生や現地大学生とともに参加し、核問題を中心とした「戦争と平和」をめぐる諸問題に関する理解を深めるとともに、自らの考えを日本語と英語で表現し、議論する力を伸ばす。					
<b>授業の概要と計画</b> ・10月中旬：2コマ程度の事前学習を行い、「戦争と平和」、とりわけ核問題に関する基礎的な事項及び英語表現を学習する。開催日時は、10月19日（水）5限及び10月26日（水）5限、場所は、文学部A棟一階学生ホールを予定しているが、掲示情報などに注意すること。 ・広島での集中セッションは、10月28日（金）29（土）30日（日）に開催する。（高速バスで金曜日の午後出発し、日曜日の夜、神戸に戻る予定。） 21日は、広島でのワークショップに参加し、現地の大学生などと交流・意見交換する。 ・11月、事後学習を行う。					
<b>成績評価方法</b> 出席点の他、ワークショップや事前・事後学習などにおける参加を総合的に判断する。					
<b>成績評価基準</b> 出席および議論への貢献：10割					
<b>履修上の注意（関連科目情報）</b> ・人系6学部および人文科学研究科・経済学研究科博士前期課程の学生を対象とする。 交換留学生の場合は単位取得はできないが、広島ワークショップへの参加は歓迎。 交換留学生以外の外国人学生の場合は、単位取得可。 ・広島でのワークショップ参加に必要な費用（往復の高速バス8,000円、宿泊費用一泊約3,000円、食費など）は自己負担。					
<b>事前・事後学習</b> 					
<b>オフィスアワー・連絡先</b> By appointment. 連絡先/嘉指：nkazashi(at)gmail.com					
<b>学生へのメッセージ</b> 具体的な問題場面へのエクスポージャーを通じた「アクティブ・ラーニング」の貴重な機会を積極的に活かしてほしい。					
<b>今年度の工夫</b> 平和問題関連の英語表現を学ぶとともに、広島での自主的学習を目指す。					
<b>教科書</b> 特になし。参考テキストなど、適時指示する。					
<b>参考書・参考資料等</b> 『新・平和学の現在』（2009） / 岡本三夫・横山正樹編：，，ISBN： 『ヒロシマ』（増補新版、2014） / ジョン・ハーシー：，，ISBN： 『ヒロシマ・モナムール』（新訳、2014） / マルグリット・デュラス：，，ISBN：					
<b>授業における使用言語</b> 日本語及び英語					
<b>キーワード</b> 戦争、平和、核問題、ヒロシマ、ナガサキ					

シラバスは、すべてウェブサイト上に公開しており、学習の便宜を図っている《資料20、資料21》。

「履修要項」には履修モデルを提示しているが、平成29年度版の履修要項から、最新のモデルを提示している《資料22》。加えて、入学時、1年次の後期開始時、専修配属決定後の12月に合計3回のガイダンスを行うことによって、学生が適切な履修計画を立てられるように配慮している。単位が不足する学生等に対してはこれまでも各教員・各専修で適切に対応してきたが、教務学生係及び教務委員と連携してより手厚い就学指導を行うことのできる体制を平成27年度に整えている。(なお、ここに掲示する文学部履修モデルは平成30年に改訂されたものであり、適用は平成31年度からとなる)。

ハラスメント対策として、専修配属が決定した1年生に対して毎年、「初年次セミナー」の一環としてセミナーを開催している。

《資料22：文学部履修モデル》



※1 外国語科目：外国語第Ⅲは4単位まで修得できる。  
 ※2 資格免許のための科目は、平成27年度以降に入学した学生については卒業要件単位に含まれないので注意すること。  
 ※3 基礎科目のうち、西洋古典文学、英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、中国語、韓国語、西洋古典語は、1年生から2年生の期間に履修することが望ましい。

I-4-2. 主体的な学習を促す取組

自主学習を促すために、《資料23》のように制度面・環境面の整備を行ってきた。例えば、学生が授業時間以外にも教員から勉学上の指導を受けることができるように、オフィスアワーが各教員のシラバスに明記され、周知が図られている《20頁の資料20、21頁の資料21》。また、本学部同窓会がレポートコンテストにより「文窓賞」を授与し、勉学や課外活動に対する意欲の向上を図っている。平成25年には、人文科学図書館に神戸大学では初のラーニングコモンズが設置され、グループ学習、外国人教員との自由な英語会話、協働作業を中心とした新しいタイプの授業などで活用されている。

《資料23：制度面および環境面での整備項目》

項目	内容	
制度面	オフィスアワー	学生は授業時間以外にも教員から勉学上の指導を受けることが容易である。オフィスアワーは平成20年度からはシラバスに記入され、周知されている。また、外国人教員による英語を主としたオフィスアワーを週4日（月、火、水、金）ラーニングcommonsにおいて開催し、留学等について相談したり、外国語能力向上のためのアドバイスを気軽に受けたりすることができるようにしている。
	キャップ制の免除	単位の実質化を図るためにキャップ制（1年間に履修できる単位数の上限：文学部は54単位）を設けるとともに、さらに学生の学習意欲を高めるために、成績優秀な学生に対しては、キャップ制の適応を免除する優遇措置を与えている。
	表彰制度	平成19年度から本学部同窓会がレポートコンテストにより「文窓賞」を授与している。
環境面	図書館 （日本文化資料コーナー）	文学部の人文科学図書館は書籍約30万冊を有し、毎年確実に蔵書数を増やしている。授業期間中は、平日（8時45分～20時）および土曜日（10～18時）、試験期間中は、平日の夜間（21時まで）および日祝日も開館している（10～18時）。 「日本文化資料コーナー」を設けて資史料、貴重図書、レファランス類を集中的に配架し、複数の辞書類・資料を同時に縦覧する必要がある歴史・文学系等の学生の利便を図っている。可能な限り具体的な活用状況を入れる。
	学生用共同研究室	学生が個人あるいはグループで調査・研究するために使用できる「共同研究室」を教育研究分野ごとに設置し、学生の自主学習へ配慮している。共同研究室には辞書や専門書等も整備されており、学生はここで授業の予習や復習、研究発表のための資料作成などを行うことができる。
	コモンルーム	学生がグループ学習や研究会などのために自由に使用することのできる「コモンルーム」を3カ所設置し、学生の自主学習へ配慮している。ホワイトボードを使っての議論の場として活用したり、研究発表や面接の練習したりするなどさまざまな形で使われている。
	共同談話室	教員と学生が共同研究、読書会など行うために使用することができる「共同談話室」を5カ所設置し、自由な共同学習や演習等の授業に活用している。各種の読書会、研究会の会合などが活発に行われている。
	情報機器	学生が利用できるパーソナル・コンピューターを「情報処理室」（平成22年度 B 棟に移転・拡充）に48台、人文科学図書館に18台を設置するとともに、各専修の共同研究室や実験室などにも適宜配置している。可能な限り具体的な活用状況を入れる。
	教育機器	視聴覚機材を平成21～23年度 B 棟に、平成24年度 C 棟に設置し、ほぼ全ての教室で視聴覚機材（プロジェクター、スクリーン、DVD など）を使った授業ができるようになった。パワーポイントを用いた授業も多くなされている他、パソコン（インターネット）による具体的な資料検索・資料収集の方法を実践することも可能である。
	ラーニングcommons	自由に机と椅子を組み合わせ、図書館資料を自由に使用し、グループで話し合いながら学習を進めることができるスペースとして、「ラーニングcommons」が人文科学図書館に設置された。他学部にも広く開かれた文学部のラーニングcommonsは、平成25年度の運用開始以来、アクティブラーニングや演習、自主学習、グループ学習、留学報告会等、さまざまな形で活用され、大きな学習成果を挙げている。

## I-5. 学業の成果

### I-5-1. 学生が身に付けた学力や資質・能力

最近5年間の本学部学生の卒業状況は、《資料24》のとおりである。本学部学生の卒業率（入学者総数に対する既卒業者の比率）は平成22年度入学者以降、平均93.8%という良好な数字を保っている。また、標準修業年限で卒業した学生（4年間で卒業した学生）の比率も平成22年度入学者以降、平均83%以上の数字を維持し、大半の学部生が4年間で卒業している。なお、学部生の場合、卒業以前に留年・休学して海外留学を経験する者も多い。

また、文学部における学びの集大成となる卒業論文について、平成30年度卒業生が提出した論文題目一覧は《資料25》に掲げる通りである。

#### 《資料24：修業年限内の卒業率 平成30年3月現在》

入学年度 (標準修業年度)	入学者総数 (a)	既卒業者数 (b)	既卒業率 (b/a)	標準年限内 卒業者数 (c)	標準年限内 卒業率 (c/a)
平成23年(平成26年)	117	113	96.6%	99	84.6%
平成24年(平成27年)	119	107	89.9%	103	86.6%
平成25年(平成28年)	121	118	97.5%	100	82.6%
平成26年(平成29年)	118	116	98.3%	101	85.6%
平成27年(平成30年)	128	119	92.9%	109	85.1%

#### 《資料25：平成31年3月卒業生の卒業論文題目一覧表》

専修	論文題目
哲学	メルロ＝ポンティと臨床
哲学	深層学習は因果判断を消去しうるか
哲学	正義と幸福
哲学	スピノザの神と信仰について
哲学	永井均における〈私〉と〈今〉の哲学
哲学	単純性の原理としてのモデル選択規準
国文学	島崎藤村論
国文学	『宇治拾遺物語』における狐説話の考察
国文学	野間宏『真空地帯』と「俗情」
国文学	『源氏物語』論
国文学	松浦理英子『ナチュラル・ウーマン』論
国文学	円城塔論
国文学	『源氏物語』についての研究
国文学	中世説話における動物表象について
国文学	『源氏物語』論考
国文学	宮崎駿作品における女性キャラクターの言葉について
国文学	筒井康隆論
国文学	日本語彙研究
国文学	筒井道隆『パブリカ』論
国文学	『源氏物語』攷
国文学	『源氏物語』についての考察

国文学	綿矢りさ論
国文学	仮名遣いについて
国文学	日本語における二人称について
英米文学	『ロミオとジュリエット』における翻訳比較
英米文学	『不思議の国のアリス』ルイス・キャロル
英米文学	エミリー・ブロンテ『嵐が丘』研究
英米文学	シェイクスピア喜劇における異性装とジェンダー
英米文学	カズオ・イシグロ研究
英米文学	シェイクスピアの作品における道化の特徴と役割
英米文学	ポール・オースター『ガラスの街』論
英米文学	シェイクスピア『ヴェニスの商人』におけるシャイロック分析
英米文学	ジョージ・バーナード・ショー『ピグマリオン』と『マイ・フェア・レディ』の関係
英米文学	ヴァージニア・ウルフ『灯台へ』研究
英米文学	ソックスがディラン研究で扱う四篇の詩と“Envy”というテーマ
ドイツ文学	ビューヒナー『ダントンの死』における革命と民衆について
ドイツ文学	ゼーバルトの『アウステルリッツ』について
ドイツ文学	E. T. A. ホフマン『くるみ割り人形とねずみの王さま』における人形の非物体性
ドイツ文	ケールマン『僕とカミンスキー』におけるイロニーと自画像
ドイツ文学	ノヴァーリス『青い花』について
フランス文学	フィリップ・フォレスト研究
フランス文学	エミール・ゾラ研究
フランス文学	プルースト研究
フランス文学	フランス文学における女性の描かれ方について
フランス文学	パトリック・モディアノ研究
フランス文学	フランス文学における大戦の表象について
日本史学	登呂遺跡発掘に関する一考察
日本史学	『師守記』にみる盆行事の構造
日本史学	八世紀における東大寺の荘園経営と地域社会
日本史学	中世前期における多武峰・鎌足木像破裂の政治史的考察
日本史学	八世紀における郡司層の中央出仕をめぐる
東洋史学	中印国境問題におけるチベット要因
東洋史学	18世紀前半イランの行政便覧から見るサファヴィー朝
東洋史学	北魏末における関隴地域の反乱
西洋史学	エリザベス期のイングランド人による私掠活動
西洋史学	中世盛期のドイツにおける東方植民
西洋史学	近世ルーマニア地域における印刷文化の展開
西洋史学	18世紀におけるハンガリーとハプスブルクの関係
西洋史学	1930年代イタリア外交の展開
西洋史学	12世紀の南フランスにおけるトゥルバドゥール
西洋史学	ナチス政権における「国民車」構想の意義
心理学	視野狭窄者を対象とした足元知覚の計測

心理学	骨導音を用いた聴覚実験
心理学	国家と代表及びAIの道徳的判断に対する評価の差異
心理学	選択の方法による満足度への影響
心理学	視覚刺激に対する審美・情動評定に関わる認知メカニズム
心理学	幼児期の家庭環境と成人期の対人的心理傾向、遺伝的多型の関係について
心理学	歩行中の視覚機能
心理学	脳刺激による嘘つき能力の影響
心理学	歩きスマホ時の間隙通過
心理学	感情と注意の範囲の関係について
心理学	視覚障害者が自分で行う化粧が感情に及ぼす効果
心理学	聴覚刺激を用いた心理学実験
心理学	友人同士・恋人同士の絆の確認と嫌悪感の関係
言語学	キャラクター名付けによる音象徴分析
言語学	複合動詞における促音化/撥音化について
言語学	日本語の時間表現について
言語学	関西方言における複合語のアクセントについて
言語学	日本語母語話者の英語（限定詞＋名詞）の発音にみられる母語からの転移について
言語学	かくれキリシタンの祈祷文「おらしよ」についての音韻的分析
言語学	外来語の原語の綴りとカタカナ語表記の関係について
言語学	日本語のリズム定型における音節の役割について
言語学	付属語「ぐらい/くらい」のアクセントについて
芸術学	B Lマンガ表象分析
芸術学	北原白秋における童謡の誕生
芸術学	アニメーションにおける平面性の表現
芸術学	「かわいい」大きな目の揺らぎ
芸術学	映画『シャイニング』における「繰り返し」
芸術学	少女の抱える光と闇
芸術学	「足し算」としての無印良品
芸術学	読むマンガから見るマンガへ
芸術学	60年代のミュージカル映画におけるリアリズム
社会学	祭礼の変容と地域社会の様態
社会学	日本における少子化の現状と課題
社会学	現代の友達親子関係
社会学	阪神淡路大震災後のジェントリフィケーションに抗する地域社会
社会学	学習塾の果たす社会的機能
社会学	現代における若者の地元志向
社会学	地域連携型学生サークルの現状と課題
社会学	日本のインバウンドの現状に関する社会学的研究
社会学	モノに着目した「聖地巡礼」と文化振興
社会学	旅行行動をめぐる若者の現在
社会学	インスタグラムによる価値観・行動様式の変容

社会学	共働き夫婦における家事分担の意味
社会学	関西の新規店舗から見るこれからの書店変容
社会学	現代の都市祝祭に関する社会学的考察
社会学	「団地型」ニュータウンという生活領域
美術史学	レンブラントの裸体画について
美術史学	ジュリオ・ロマーノの建築について
美術史学	17世紀オランダ建築画について
美術史学	新薬師寺薬師如来坐像について
美術史学	尾形光琳「紅白梅図屏風」について
美術史学	ピーテル・ブリューゲル《足なえたち》について
美術史学	奈良国立博物館所蔵「日吉山王宮曼荼羅」の山容表現について
美術史学	東アジアの星宿美術について
美術史学	グイド・レーニ研究

在学中に教育職員免許（中学校教員一種・高等学校教員一種）、学芸員資格、社会調査士資格等を取得する者が多く、その内訳は《資料26》の通りである。これらのうち、高等学校教員一種の資格取得者が多いのは例年の傾向である。平成30年度は、中学校、高等学校ともに、資格取得者が上向きになった。就職に向けた解禁日も流動化する傾向にあり、教育実習期間に中小企業の面接が入るなどで実習辞退者が出るといった影響も見られ、今後の問題を残している。

《資料26：平成25～30年度資格取得者一覧》

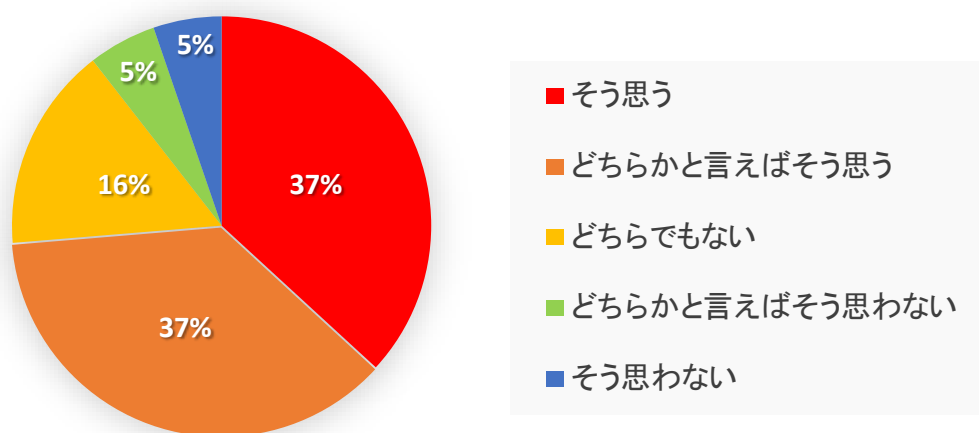
年 度	資格取得者数			
	教育職員免許		学芸員資格	社会調査士 資格
	中学校一種	高等学校一種		
平成25年度	22	30	6	1
平成26年度	26	40	16	5
平成27年度	15	28	14	0
平成28年度	16	28	15	2
平成29年度	7	20	13	1
平成30年度	12	24	13	3

### I-5-2. 学業の成果に関する学生の評価

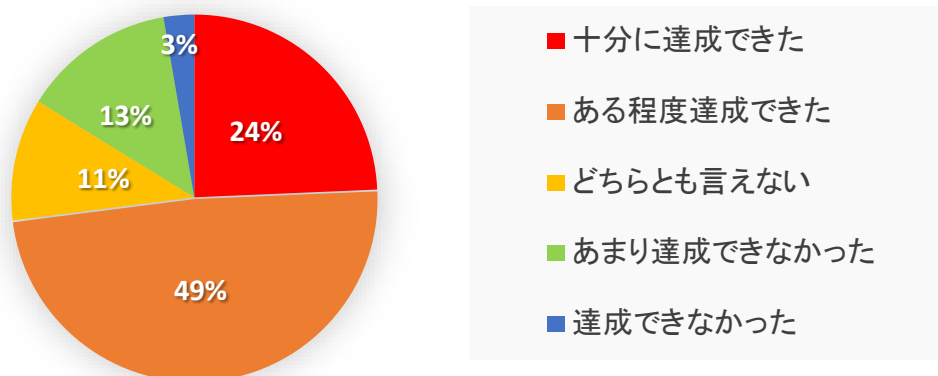
在学生を対象とした「授業振り返りアンケート」平成29年度後期の結果では、教育の成果や効果に関する質問項目の「2. この授業の内容はよく理解できましたか。」「3. シラバスに書かれている到達目標をあなたはどの程度達成できたと思いますか。」のうち、2については最上点及び次点の回答者が74%、3については最上点及び次点の回答者が71%といずれも良好な結果が得られており《資料27》、例年、同様の傾向となっている。

《資料27：「平成29年度後期授業振り返りアンケート」結果（抜粋）》

#### この授業の内容はよく理解できましたか



#### シラバスに書かれている到達目標をあなたはどの程度達成できたと思いますか





## I-6. 進路・就職の状況

### I-6-1. 卒業後の進路の状況

本学部卒業生の就職率及び進学率については《資料28》の通りであり、この状況はここ数年安定している。平成24～29年度の本学部における卒業生の進路は《資料29》の通りである。公務員・中・高教員その他教育関係・メディア関係など、本学部での教育成果を直接活用できる職種のみならず、金融・保険業、製造業、情報・通信業など、幅広い業種にわたっていることが分かる。

大学院進学者が10%台という状況は、「専門的知識」を有する人材の育成を目的の一つに掲げている本学部の教育方針に合致しており、同時に社会からの期待にも適ったものと判断できる。また、アンケート時期の関係から就職率が平均90パーセントを割っているが、この数値は卒業段階ではさらに上昇する可能性があり、就職状況は良好である。

《資料28：本学部卒業生の就職率及び進学率》

卒業年度	卒業生数	進学者	就職者	就職希望者	進学率	就職希望者の就職率
平成24年度	117	11	80	106	9.4%	75.5%
平成25年度	131	12	94	119	9.2%	79.0%
平成26年度	113	19	88	95	16.8%	92.6%
平成27年度	121	16	94	105	13.2%	89.5%
平成28年度	119	23	84	96	19.3%	87.5%
平成29年度	116	10	91	106	8.6%	85.8%

《資料29：本学部卒業生の進路状況》

卒業年度	製造業	情報・通信産業	卸売・小売業	金融・保険業	学校教育・その他教育	国家公務員・地方公務員	その他の業種
平成24年度	9	16	8	12	10	12	13
平成25年度	13	11	12	15	12	11	20
平成26年度	15	10	10	12	18	9	14
平成27年度	11	6	4	21	10	19	23
平成28年度	14	12	5	11	7	20	15
平成29年度	13	14	6	10	5	16	27

## Ⅱ. 教育（人文学研究科）

### Ⅱ-1. 人文学研究科の教育目的と特徴

人文学研究科は、大学院文学研究科（修士課程）及び文化学研究科（独立研究科：後期3年博士課程）の改組・統合により平成19年4月に新たに設置された研究科である。

本研究科は、人文学すなわち人間と文化に関わる学問を扱い、哲学・文学・史学・行動科学などの人文系諸科学の教育を包括している。以下に本研究科の教育目的、組織構成、教育上の特徴及び想定する関係者とその期待について述べる。

#### Ⅱ-1-1. 教育目的

- 1 人文学研究科は、人類がこれまで蓄積してきた人間及び社会に関する古典的な文献の原理論的研究に関する教育並びにフィールドワークを重視した社会文化の動的的分析に関する教育を行い、新たな社会的規範及び文化の形成に寄与する教育研究を行うことを目的としている。
- 2 このような教育目的を達成するため、現行の中期目標では「教育憲章」に掲げた、「人間性」、「創造性」、「国際性」及び「専門性」を身に付けた個性輝く人材を養成するため、国際的に魅力ある教育を学部・大学院において展開する。また、豊富な研究成果を活かして、社会の変化を先導し、個人と国際社会が進むべき道を切り拓く高度な知識・能力を有する、次世代の研究者をはじめとした多様な人材の養成に努め、教育の更なる高みを目指す」ことを定めている。
- 3 本研究科のディプロマ・ポリシー（DP）およびカリキュラム・ポリシー（CP）はそれぞれ《資料1》、《資料2》のとおりである。これら DP、CP に基づき、本研究科は専攻ごとに、以下のような人材の養成を目指している。文化構造専攻の前期課程では、人文学の基礎的な方法を継承しつつ、個々の文化現象の現代的意味を問うことのできる基礎的能力を備え、人文学を知識基盤社会に活かすことのできる人材を養成し、後期課程では、人文学の高度な研究方法を継承しつつ、個々の文化現象の現代的意味を問うことができる能力並びに共同研究を企画し、組織する能力を持つ人材を養成する。社会動態専攻の前期課程では、社会文化の動的的分析の基礎的な能力を備え、人文学を知識基盤社会に活かすことのできる人材を養成し、後期課程では、社会文化の高度な動的的分析能力を備え、新たな社会規範及び文化の形成に寄与できる能力並びに共同研究を企画し、組織する能力を持つ人材を養成する。この目的や人材養成は、現行の中期目標において、「高度な専門的知識を習得させ、個人と社会が進むべき道を切り拓く能力を涵養すること」とされている点を達成することと大いに対応している。

## 《資料1：人文学研究科ディプロマ・ポリシー (DP)》

### 博士課程前期課程ディプロマ・ポリシー

神戸大学人文学研究科博士課程前期課程は、人文学の高い専門性を追求すると同時に、総合性を高めることによって、人文学の古典的な役割を継承しながら、現代社会に対応する人材を養成することを目的としている。この目的を達成するため、以下に示した方針に従って修士の学位を授与する。

#### ○ 学位：修士（文学）

- ・ 学位授与に関する方針（ディプロマ・ポリシー）

神戸大学のディプロマ・ポリシーにもとづき、人文学研究科は以下に示した方針に従って当該学位を授与する。

- ・ 本研究科博士課程前期課程に2年以上在学し、研究科共通科目、選択科目、修士論文指導演習に関してそれぞれ所定の単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、修士論文または特定の課題についての研究の成果の審査及び最終試験に合格すること。
- ・ 神戸大学のディプロマ・ポリシーに定める能力に加え、修了までに、本研究科学生が、身につけるべき能力を次のとおりとする。

#### （文化構造専攻）

- ・ 人類がこれまで蓄積してきた人間と社会に関する古典的な文献の原理論的研究という人文学の基礎的な方法を継承しつつ、個々の文化現象の現代的意味を問うことができる能力。
- ・ 研究者としての基礎能力を具えるとともに、人文学を知識基盤社会に生かすことができる能力。

#### （社会動態専攻）

- ・ 古典研究を踏まえて、フィールドワークを重視した社会文化の動的的分析を行い、なおかつ新たな社会的規範や文化の形成に寄与できる能力。
- ・ 研究者としての基礎能力を具えるとともに、人文学を知識基盤社会に生かすことができる能力。

#### ○ 博士課程後期課程ディプロマ・ポリシー

神戸大学人文学研究科博士課程後期課程は、人文学の高い専門性を追求すると同時に、総合性を高めることによって、人文学の古典的な役割を継承しながら、現代社会に対応する人材を養成することを目的としている。この目的を達成するため、以下に示した方針に従って博士の学位を授与する。

### 学位：博士（文学・学術）

- ・ 学位授与に関する方針（ディプロマ・ポリシー）

神戸大学のディプロマ・ポリシーにもとづき、人文学研究科は以下に示した方針に従って当該学位を授与する。

- ・ 本研究科博士課程後期課程に3年以上在学し、研究科共通科目、博士論文指導演習に関してそれぞれ所定の単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査及び最終試験に合格すること。
- ・ 神戸大学のディプロマ・ポリシーに定める能力に加え、修了までに、本研究科学生が、身につけるべき能力を次のとおりとする。

#### （文化構造専攻）

- ・ 人文学の高い専門性を追求すると同時に、総合性を高めることによって、人文学の古典的な役割を継承しながら、現代社会に対応する能力。
- ・ 人類がこれまで蓄積してきた人間と社会に関する古典的な文献の原理論的研究という人文学の基礎的な方法を継承しつつ、個々の文化現象の現代的意味を問うことができる能力。
- ・ 自立した研究者として、研究を企画し、組織できる能力。

#### （社会動態専攻）

- ・ 人文学の高い専門性を追求すると同時に、総合性を高めることによって、人文学の古典的な役割を継承しながら、現代社会に対応する能力。
- ・ 古典研究を踏まえて、フィールドワークを重視した社会文化の動的的分析を行い、なおかつ新たな社会的規範や文化の形成に寄与できる能力。
- ・ 自立した研究者として、研究を企画し、組織できる能力。

## 《資料2：人文学研究科カリキュラム・ポリシー（CP）》

神戸大学のカリキュラム・ポリシーにもとづき、人文学研究科は以下の方針に則りカリキュラムを編成する。

1. 「人間性」「創造性」「国際性」を学生に身につけさせるため、研究科共通科目を開設する。
2. 人文学の「古典的な役割の継承」「現代社会への対応」を涵養し、「高い専門性」「総合性」を学生に身につけさせるため、以下の専門科目を開設する。
  - ・ 各分野の高度に専門的な知識を身につけることができるよう特殊研究科目を開設する。
  - ・ 各分野の研究に必要なスキルと語学の能力を身につけることができるよう少人数で展開される演習科目を開設する。
  - ・ 学位論文完成のため、指導教員による教育研究指導である論文指導演習科目を開設する。

なお、これらの科目は講義・実技・演習等の授業形態に応じて、アクティブラーニング、体験型学習などを適宜組み合わせで行う。

学修成果の評価は、学修目標に即して多面的、包括的な方法で行う。

## II-1-2. 組織構成

これらの目的を実現するため、本研究科では、《資料3》のような組織構成をとっている。

### 《資料3：組織構成》

専攻	コース	教育研究分野
文化構造	哲学	哲学、倫理学
	文学	国文学（国語学を含む）、中国・韓国文学、英米文学、ヨーロッパ文学
社会動態	史学	日本史学、東洋史学、西洋史学
	知識システム論	心理学、言語学（英語学を含む）、芸術学
	社会文化論	社会学、美術史学、地理学、文化資源論（連携講座：後期課程のみ）

## II-1-3. 教育上の特徴

- 1 人文学研究科は、学生が明確な目的意識をもって専門分野の研究を深めるようにするため、一貫性のある明確なプログラムに従って学修・指導を進めている。また、年次ごとのプログラムを明確に定めることにより、後期課程からの編入生も、他大学院の前期課程（修士課程）で学修した成果を本研究科での学修にスムーズに移行できるようにしている。
- 2 人文学研究科は、次のような指導体制を構築して、学生の研究教育を支援している。①教育研究分野ごとに、各年次で学修する内容を具体的に定め、その修得を学生に徹底している。②学生1名に対して3名からなる指導教員チームを編成している。また、このチームには必ず他専攻の教員が1名参加し、学生が高い専門性ととも幅広い学問的視野を獲得できるように配慮している。③学生ごとに履修カルテを作成し、これによって指導教員チームは学生の学修に関する情報を共有している。この履修カルテは、指導プロセスの透明化にも役立てられている。さらに、学修プロセス委員会を設置し、指導方法を常に検証・改善する仕組みをとっている。
- 3 学域全体における研究の位置付けを見失うことなく、研究の社会的意義に対する省察を行うため、本研究科は、教育プログラムとして研究科共通科目を設定し、これを必修としている。研究科共通科目は本研究科内の共同研究教育組織（海港都市研究センター、地域連携センター、倫理創成プロジェクト、日本文化社会インスティテュート）の支援のもとで実施されている。
- 4 本研究科は、《資料4》のような文部科学省等の推進する各種の教育改革プログラムに採択されており、これらとの連携のもとで教育改革を積極的に推進してきた。

《資料4：採択されたプログラム一覧》

プログラム名		採択課題名	期間
日本学術振興会	大学院教育改革プログラム	古典力と対話力を核とする人文学教育—学域横断的教育システムに基づくフュージョンプログラムの開発	平成20～22年度
日本学術振興会	若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム	東アジアの共生社会構築のための多極的教育研究プログラム	平成20～24年度
日本学術振興会	組織的な若手研究者等海外派遣プログラム	国際連携プラットフォームによる東アジアの未来を担う若手人文研究者等の育成	平成21～24年度
文部科学省	国際共同に基づく日本研究推進事業	日本サブカルチャー研究の世界的展開	平成22～24年度
文部科学省	グローバル人材育成推進事業（タイプB 特色型）※1	問題発見型リーダーシップを発揮できるグローバル人材の育成 ※2	平成24～28年度
日本学術振興会	頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム※3	国際共同による日本研究の革新—海外の日本研究機関との連携による若手研究者養成	平成25～27年度
文部科学省	運営費交付金機能強化経費「実践型グローバル人材育成事業」※4	日本語教育・日本研究を中心とした実践型グローバル人材育成事業	平成29～33年度

※1 平成26年度より、「スーパーグローバル大学等事業 経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」に改称。

※2 国際文化学部を代表部局とし、文学部・人文学研究科、発達科学部、法学部、経済学部・経済学研究科、経営学部の共同のプログラムを推進してきた。

※3 平成26年度より、「頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム」に改称。

※4 運営費交付金（機能強化経費）による「日本語教育・日本研究を中心とした実践型グローバル人材育成事業」に特化したプロジェクトである。

## II-2. 教育の実施体制

### II-2-1. 基本的組織の編成

本研究科は、上記（30-31頁）の教育目的を達成するため、前期課程（修士課程）、後期課程（博士課程）ともに一貫性のある明確なプログラムの下に文化構造専攻と社会動態専攻の2つの専攻を設けている。各専攻は哲学、文学（以上、文化構造専攻）、史学、知識システム論、社会文化論（以上、社会動態専攻）のコースに分かれている。後期課程社会動態専攻に奈良国立博物館及び大和文華館との連携講座（文化資源論）を置いている《32頁資料3》。

教員の配置状況は、《資料5》および《資料6》のとおりである。授業の根幹をなす演習と研究指導及び研究科共通科目の授業は、いずれも専任教員が担当している。専任教員の多くは博士号を有している。また、入学定員が前期課程50名（平成27年度より44名）、後期課程20名であるのに対し、専任教員は56名であり、質量ともに必要な教員が確保されている。

《資料5：教員の配置状況 平成30年5月1日現在》

専攻	課程	収容定員	専任教員数（現員）										助手		非常勤教員数		
			教授		准教授		講師		助教		計						
			男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	総計	男	女	男	女
文化構造	前期	34	13	1	6	4	0	1	0	0	19	6	25	0	0	2	2
	後期	24															
社会動態	前期	54	13	1	13	4	0	0	0	0	26	5	31	0	0	9	2
	後期	36															

《資料6：教育研究分野別教員現員数 平成30年5月1日現在》

教育研究分野	教授	准教授	講師	教育研究分野	教授	准教授	講師	教育研究分野	教授	准教授	講師
哲学	1	2	0	ヨーロッパ文学	3	2	0	言語学	2	1	0
倫理学	1	1	0	日本史学	2	2	0	芸術学	1	1	0
国文学	4	2	0	東洋史学	1	3	0	社会学	3	3	0
中国・韓国文学	3	1	0	西洋史学	1	2	0	美術史学	1	1	0
英米文学	2	2	1	心理学	2	2	0	地理学	1	2	0

※特任教員、兼務教員を含み、文化資源論 教授1名、准教授1名を除く。

入学者の選抜については、全学及び人文学研究科として求める学生像（アドミッション・ポリシー）を定め《資料7》、これに基づき、前期課程における一般学生、外国人特別学生を対象とするⅠ期およびⅡ期、並びに特別入試（平成26年度より導入）、後期課程における一般学生、外国人特別学生を対象とする入試など多様な選抜を実施している。

学生定員と現員の状況については《資料8》、及び教育研究分野別の学生数は《資料9》のとおりである。

《資料7：求める学生像（アドミッション・ポリシー）》

**神戸大学が求める学生像**

神戸大学は、世界に開かれた国際都市神戸に立地する大学として、国際的で先端的な研究・教育の拠点になることを目指しています。

これまで人類が築いてきた学問を継承するとともに、不断の努力を傾注して新しい知を創造し、人類社会の発展に貢献しようとする次のような学生を求めています。

1. 進取の気性に富み、人間と自然を愛する学生
2. 旺盛な学習意欲をもち、新しい課題に積極的に取り組もうとする学生
3. 常に視野を広め、主体的に考える姿勢をもった学生
4. コミュニケーション能力を高め、異なる考え方や文化を尊重する学生

**人文学研究科が求める学生像**

**大学院博士課程前期課程**

人文学研究科は博士課程前期課程に次のような学生を求めています。

- ・ 人文学諸分野に関心を持ち、既成の価値観にとらわれることなく、自分で問題を発見し、追究していく情熱を持っている人。
- ・ 自ら選んだ専門分野の研究を深め、その学術的展開を志す人。
- ・ 社会の一員としての自覚を持って、自らの学術研究を社会との係わりで展開していく意欲を持っている人。

**大学院博士課程後期課程**

人文学研究科は博士課程後期課程に次のような学生を求めています。

- ・ 人文学諸分野に関心を持ち、既成の価値観にとらわれることなく、自分で問題を発見し、追究していく情熱を持っている人。
- ・ 自ら選んだ専門分野の研究を深め、その学術的展開を行って研究者を志す人。
- ・ 研究者としての自覚をそなえ、自らの学術研究を学際的かつ国際的な幅広い視野のなかで展開していく意欲を持っている人。

《資料8：学生定員（収容定員）と現員の状況 各年5月1日現在》  
人文学研究科博士課程前期課程

専攻	年度	収容定員	現員	定員充足率（年）	定員充足率(8年間)
文化構造	平成23年度	40	55	138%	122%
	平成24年度	40	49	123%	
	平成25年度	40	41	103%	
	平成26年度	40	38	95%	
	平成27年度	37	44	119%	
	平成28年度	34	44	129%	
	平成29年度	34	52	153%	
	平成30年度	34	42	124%	
社会動態	平成23年度	60	64	107%	112%
	平成24年度	60	65	108%	
	平成25年度	60	67	112%	
	平成26年度	60	58	97%	
	平成27年度	57	72	126%	
	平成28年度	54	68	126%	
	平成29年度	54	62	115%	
	平成30年度	54	60	111%	

※平成27年度より、入学定員が、文化構造専攻は20名から17名、社会動態専攻は30名から27名に変更となった。

人文学研究科博士後期課程

専攻	年度	収容定員	現員		定員充足率（年）	定員充足率(8年間)
文化構造	平成23年度	24	33		138%	134%
	平成24年度	24	24		100%	
	平成25年度	24	24		100%	
	平成26年度	24	26		108%	
	平成27年度	24	30		125%	
	平成28年度	24	36		150%	
	平成29年度	24	41		171%	
	平成30年度	24	43		179%	
社会動態	平成23年度	36	60		167%	163%
	平成24年度	36	60		167%	

平成25年度	36	55		153%
平成26年度	36	56		156%
平成27年度	36	58		161%
平成28年度	36	59		164%
平成29年度	36	61		169%
平成30年度	36	61		169%

《資料9：教育研究分野別の学生数 平成30年4月1日現在》

人文学研究科

専攻	博士課程前期課程		博士課程後期課程	
	教育研究分野	学生数	教育研究分野	学生数
文化構造	哲学	6	哲学	3
	倫理学	6	倫理学	8
	国文学	17	国文学	13
	中国・韓国文学	8	中国・韓国文学	6
	英米文学	1	英米文学	6
	ヨーロッパ文学	4	ヨーロッパ文学	7
社会動態	日本史学	11	日本史学	16
	東洋史学	0	東洋史学	0
	西洋史学	4	西洋史学	3
	心理学	7	心理学	2
	言語学	4	言語学	5
	芸術学	5	芸術学	6
	社会学	10	社会学	7
	美術史学	15	美術史学	11
	地理学	4	地理学	5
				文化資源論
	合計	102	合計	104

II-2-2. 教育内容、教育方法の改善に向けた取組み

人文学研究科評価委員会は、授業評価アンケートの実施など、教育に関わる評価作業を行うとともに、教員の教育方法および技術の向上を図るためにファカルティ・ディベロップメント (FD) を開催している。人文学研究科のFDは、評価委員会が中心となり実施している。学生による授業評価アンケート、教員相互の授業参観・評価 (ピアレビュー) を定期的に行い、その結果は、FDにおいて報告され、カリキュラム編成や授業方法の改善に活用され、中期目標の実現に向けた教育課程の改善が図られている《資料10》。さらに、毎年度、評価報告書を作成し、独自に外部評価を受けて、FDの達成点と改善点を的確に把握し、それを教員・職員間で共有している《資料11》。



こうした活動が個々の科目の授業内容に反映されることはもちろん、カリキュラム構成や授業方法等の改善も頻繁に行っており、たとえば、人文学に必須の古典力を強化することやグローバル人材を育成することなどを目的として、前期課程の研究科共通科目の充実を行った《資料12》。

《資料10：平成26～30年度のFD実施状況》

開催日	テーマ	参加者数
平成26年6月25日	FD懇談会「「ミッションの再定義」をどう読むか」	45
平成26年7月23日	FD講演会「LMSの紹介—ICTを用いた授業の支援」	45
平成26年11月26日	グローバルFD講演会「Facts and Fictions: On New Education in Poland」	46
平成27年2月18日	FD講演会「本学の教育改革について」	53
平成27年3月6日	FD講演会「平成26年度ピアレビュー結果の検討」	44
平成27年7月22日	神戸大学学修管理システム(BEEF)について	54
平成27年9月2日	初年次セミナー・アクティブラーニングに関するFD	47
平成28年1月13日	教員評価について	41
平成28年1月27日	グローバルFD講演会「This, That, or the Other? On Japanese Studies in Romania」	49
平成28年2月2日	グローバルFD講演会「ヤケヴォ大学における国際化戦略」	41
平成28年2月17日	障害者差別解消法と来年度からの神戸大学の体制について	46
平成28年3月7日	平成27年度ピアレビュー結果の検討及び授業評価アンケート結果について	53
平成28年6月8日	入試改革について	55
平成29年2月15日	Horizon 2020 セミナー	51
平成29年3月19日	“The Globalizing Strategy in the Education of the University of Hawai” (「ハワイ大学における教育のグローバル化戦略」)	46
平成29年5月24日	「中国における日本語教育と北京日本学研究中心・ 神戸大学間のダブルディグリープログラムについて」	50
平成29年6月14日	「アカデミック・ライティング指導の意義 —早稲田大学の取り組みから—」	51
平成29年7月12日	「中東欧と日本：国際交流基金ブダペスト日本文化センターの活動報告」	45
平成29年9月6日	文部科学省事業「地(知)の拠点大学による地方創成推進事業(COC+)」 について	41
平成29年12月20日	平成29年度ピアレビュー結果の検討について	48
平成30年7月25日	オックスフォード大学日本学における“神戸オックスフォード日本語プログラム”の役割と意義	43
平成30年9月19日	科学研究費助成事業説明会	46
平成30年9月28日	人文学研究科向け科研費若手研究への申請のポイント	32
平成30年11月14日	留学生に対する日本語アカデミックライティング支援	54
平成30年11月14日	今後の入試のあり方について	50
平成30年12月19日	ピアレビュー、学修の記録及び振り返りアンケートの実施結果及び今後の 検討について	53
平成31年3月6日	神戸大学出版会について	50

《資料11：平成23～30年の外部評価実施状況》

実施日	外部評価委員
平成23年5月18日	小田部胤久（東京大学教授）
平成24年4月27日	山田弘明（名古屋文理大学教授・名古屋大学名誉教授、元名古屋大学文学研究科長）
平成25年7月6日	三角洋一（大正大学特任教授・東京大学名誉教授）
平成26年6月28日 平成27年6月27日	深澤克巳（東京大学教授） 立花政夫（東京大学名誉教授、元東京大学人文社会系研究科長）
平成28年7月3日	中島道男（奈良女子大学教授・奈良女子大学大学院人間文化研究科長） BONAVENTURA RUPERTI（ヴェネツィア大学教授・国際日本文化研究センター外国人研究員）
平成29年6月26日	中畑正志（京都大学大学院文学研究科・教授）
平成30年6月10日	佐々木徹（京都大学大学院文学研究科・教授）

《資料12：平成22年度と平成30年度の人文学研究科博士課程前期課程研究科共通科目の比較》

平成22年度 研究科共通科目	平成30年度 研究科共通科目
海港都市研究交流演習	古典力基盤研究 (a) (b) 海港都市研究交流演習 (a) (b)
海港都市研究	海港都市研究 (a) (b)
地域歴史遺産活用演習	地域歴史遺産活用演習 (a) (b)
地域歴史遺産活用研究	地域歴史遺産活用研究 (a) (b)
倫理創成論研究	倫理創成論研究 (a) (b)
倫理創成論演習	倫理創成論演習 (a) (b)
日本語日本文化教育演習	日本語日本文化教育演習 (a) (b)
多文化理解演習	多文化理解演習 (a) (b)
日本語教育研究Ⅰ・Ⅱ	日本語教育研究Ⅰ (a) (b)・Ⅱ (a) (b)
日本語教育内容論Ⅰ・Ⅱ	日本語教育内容論Ⅰ (a) (b)・Ⅱ (a) (b)
日本語教育方法論Ⅰ・Ⅱ	日本語教育方法論Ⅰ (a) (b)・Ⅱ (a) (b)・Ⅲ (a) (b)
日本語研究	日本語研究 (a) (b)
日本社会文化演習Ⅰ・Ⅱ	日本社会文化演習Ⅰ (a) (b)・Ⅱ (a) (b)
	グローバル人文学特殊研究 (a) (b)
	比較現代日本論特殊研究 (a) (b)
	比較日本文化産業論特殊研究 (a) (b)
	グローバル対話力演習Ⅰ (a) (b)・Ⅱ (a) (b)
	アカデミック・ライティングⅠ (a) (b)・Ⅱ (a) (b)
	オックスフォード夏季プログラム

## II-3. 教育内容・方法

### II-3-1. 教育課程の編成

前期課程の教育課程は、「研究科共通科目」「専門科目」及び「修士論文指導演習」、後期課程の教育課程は、「研究科共通科目」及び「博士論文指導演習」から構成されている。

前期課程・後期課程の研究科共通科目として、古典力・海港都市・地域歴史遺産・倫理創成・日本語日本文化教育等に関わる授業科目を設け、個別の研究や学域を越えた幅広い視野のもとに自らの研究の社会的意義を自覚させるように配慮している。なお、平成24年度の文部科学省グローバル人材育成推進事業への採択を受け、翌年度から実践的な英語能力の育成を目的とする科目を加えた《資料12》。

前期課程の「専門科目」は、演習と講義形式による特殊研究からなる。科目数は演習科目（「修士論文指導演習」を含む）と特殊研究科目がほぼ同数となっている。人文学における研究の根幹をなす文献読解能力、資料調査分析能力、表現力の養成には演習がふさわしく、前期課程に多くの演習科目が開講されているのはそのためである。修士論文の作成は、これらの演習を受講することで初めて可能となる。後期課程の授業形態は、研究科共通科目・博士論文指導演習ともに演習が基本となる。「修士論文指導演習」および「博士論文指導演習」は、学位論文の作成に特化した演習であり、指導教員3名が、学修カルテ《資料13》を参照しながら、連携して指導に当たる。

《資料13：学修カルテ（博士課程前期課程）》

人文学研究科大学院生学修カルテ【博士課程前期課程】			
学籍番号		氏名	
専攻		教育研究分野	
指導教員	主)	副)	副)
博士前期 1年次 4月20日 <u>前期課程指導教員・研究テーマ届提出</u> 5月20日 <u>修士論文研究計画書提出</u> 2年次 4月10日 <u>修士準備論文を1部提出</u> 6月第3水曜日   前期課程公開研究報告会 6月第4金曜日   主指導教員は前期課程公開研究報告会 終了報告書を提出 11月16日まで <u>修士論文題目を提出</u> 1月16日まで <u>修士論文を1部提出</u> 2月中旬          最終試験 3月上旬          博士課程前期課程修了判定 3月下旬          学位記授与式			実施状況チェック

○このカードは個人情報保護の観点から取扱に注意が必要です。

具体的な研究・研究論文テーマ 関心のある関連領域
将来の希望・就職
修学上の留意点
単位取得状況 共通科目  専門科目

○このカードは個人情報保護の観点から取扱に注意が必要です。

**指導履歴**

年月日	指導内容

○このカードは個人情報保護の観点から取扱に注意が必要です。

**発表論文など**

年月日	論文名	学会名、雑誌名など
記入例① (学術雑誌等での論文発表) 2016年6月	論文名、著者名 (共著の場合には、学生本人に下線を付けてください。) を記入してください。	掲載誌名、発行所等、巻 (号)、最初と最後の頁、査読の有無
記入例② (学会等での論文発表) 2017年8月	論文名、発表者名 (共同発表の場合には、学生本人に下線を付けてください。) を記入してください。	学会名、開催場所
記入例③ (研究費獲得の場合)	研究費獲得：科研 (特別研究員奨励費)、平成26年度 50万円、平成23年度 70万円	
記入例④ (受賞歴、新聞記事掲載等) 2017年5月	学会賞等受賞名や新聞雑誌等掲載事項	

○ このカードは個人情報保護の観点から取扱に注意が必要です。

○ 発表論文等の記載内容は、人文学研究科における、大型補助金獲得や年次報告書作成時に利用することがありますので、以下の点を明記願います。

- ※ 学術雑誌等への発表論文は、査読の有無を記入のこと
- ※ 学会、シンポジウム等での発表論文は開催場所を記入のこと。

## II-3-2. 学生や社会からの要請への対応

人文学研究科では、グローバル化が進む現代社会における諸問題に対応し、また社会からの要請に応えるため、教育課程の編成やそれらに配慮した取組みを以下のとおり実践している。

### 1. 他研究科の授業科目の履修

本研究科では、他研究科の授業科目を本研究科での専門科目と同等に扱い、修了に必要な単位として認めている。

### 2. 他大学との単位互換

本研究科は、国内では奈良女子大学大学院人間文化研究科、大阪大学大学院文学研究科、神戸松蔭女子学院大学大学院文学研究科、神戸市外国語大学大学院外国語学研究科と交流協定を締結しており、これらの授業科目中10単位を上限として修了に必要な単位として認めている。

海外では、全学協定及び部局間協定に基づき、単位互換協定を締結している《資料14》。

#### 《資料14：単位互換協定を締結している海外の大学 平成31年3月現在》

協定校	国名	大学間協定	部局間協定
木浦大学校	大韓民国	○	
成均館大学校	大韓民国	○	
韓国海洋大学校	大韓民国	○	
ソウル国立大学校	大韓民国	○	
高麗大学校	大韓民国	○	
国立群山大学校	大韓民国	○	
木浦海洋大学校	大韓民国	○	
韓国外国語大学校	大韓民国		○
山東大学	中華人民共和国	○	
華東師範大学思勉人文高等研究院	中華人民共和国	○	
中山大学	中華人民共和国	○	
南京大学	中華人民共和国	○	
中国海洋大学	中華人民共和国	○	
復旦大学	中華人民共和国	○	
北京外国語大学	中華人民共和国	○	
武漢大学	中華人民共和国	○	
上海交通大学	中華人民共和国	○	
清華大学	中華人民共和国	○	
上海海事大学	中華人民共和国	○	
大連海事大学	中華人民共和国	○	
江南大学	中華人民共和国		○
鄭州大学	中華人民共和国		○
浙江大学	中華人民共和国		○
香港大学	中華人民共和国		○

東北大学	中華人民共和国		○
国立台湾大学	台湾	○	
国立政治大学	台湾	○	
国立台湾海洋大学	台湾	○	
スラバヤ工科大学	インドネシア	○	
南洋理工大學	シンガポール	○	
モンゴル国立大学	モンゴル	○	
イスタンブール工科大学	トルコ	○	
クイーンズランド大学	オーストラリア	○	
西オーストラリア大学	オーストラリア	○	
ウーロンゴン大学	オーストラリア	○	
オーストラリア商船大学	オーストラリア	○	
ピッツバーグ大学	アメリカ	○	
オタワ大学	カナダ	○	
グラーツ大学	オーストリア	○	
インスブルック大学	オーストリア		○
カレル大学	チェコ	○	
パリ第2大学	フランス	○	
パリ第7大学	フランス	○	
パリ第10大学	フランス	○	
リヨン高等師範学校	フランス	○	
リール大学	フランス	○	
バルセロナ大学	スペイン	○	
バーゼル大学	スイス	○	
バーミンガム大学	イギリス	○	
SOAS ロンドン大学東洋アフリカ研究学院	イギリス	○	
オックスフォード大学	イギリス	○	
エセックス大学	イギリス	○	
ライデン大学	オランダ	○	
ソフィア大学	ブルガリア	○	
ブリュッセル自由大学	ベルギー	○	
ヴェネツィア大学	イタリア	○	
ボローニャ大学	イタリア	○	
トリノ大学	イタリア	○	
ヤゲウォ大学	ポーランド		○
ニコラウス・コペルニクス大学	ポーランド	○	

キール大学	ドイツ	○	
マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテ	ドイツ	○	
トリーア大学	ドイツ	○	
ハンブルク大学	ドイツ	○	
ダルムシュタット工科大学	ドイツ	○	
ブカレスト大学	ルーマニア	○	
ディミトリエ・カンテミルキリスト教大学	ルーマニア		○
サンクトペテルブルグ大学	ロシア	○	
エトヴェシュ・ローランド大学	ハンガリー	○	

この制度に基づき、平成24年度から平成30年度の7年間に、協定校との間で受け入れ48名、派遣24名の留学生交換実績がある。交換留学生（受け入れ）実績は《資料15》、交換留学生（派遣）実績は《資料16》のとおりである。

《資料15：交換留学生（受入）実績》

年 度	所属大学名	出身国	奨学金	期 間
平成 24年度	グラーツ大学	オーストリア		24年4月1日～24年9月30日
	北京外国語大学	中国		24年4月1日～25年3月31日
平成 25年度	国立台湾大学	台湾	交流協会	25年4月1日～25年9月30日
	北京外国語大学	中国		25年4月1日～25年9月30日
	中山大学	中国	HUMAP	25年10月1日～26年9月30日
	パリ第7大学	フランス	JASSO	25年10月1日～26年9月30日
平成 26年度	北京外国語大学	中国		26年4月1日～26年9月30日
	中山大学	中国	HUMAP	26年10月1日～27年9月30日
	ヴェネツィア大学	イタリア	JASSO	26年10月1日～27年9月30日
	ヴェネツィア大学	イタリア	JASSO	26年10月1日～27年9月30日
	パリ第7大学	フランス	JASSO	26年10月1日～27年9月30日
平成 27年度	ヤゲヴォ大学	ポーランド	JASSO	26年10月1日～27年9月30日
	北京外国語大学	中国	神戸大学基金	27年4月1日～27年9月30日
	北京外国語大学	中国	神戸大学基金	27年4月1日～27年9月30日
	山東大学	中国	神戸大学基金	27年10月1日～28年9月30日
平成 28年度	北京外国語大学	中国	神戸大学基金	28年4月1日～28年9月30日
	ライデン大学	オランダ		28年4月1日～28年3月31日
	リヨン高等師範学校	フランス		28年4月1日～29年9月30日
	ヤゲヴォ大学	ポーランド		28年4月1日～28年9月30日
	ヴェネツィア大学	イタリア		28年10月1日～29年9月30日
	ヴェネツィア大学	イタリア		28年10月1日～29年9月30日
	キール大学	ドイツ		28年10月1日～29年9月30日
	山東大学	中国	神戸大学基金	28年10月1日～29年9月30日
	復旦大学	中国	神戸大学基金	28年10月1日～29年3月31日
平成 29年度	北京外国語大学	中国	JASSO	29年4月1日～29年9月30日
	中国海洋大学	中国	JASSO	29年4月1日～29年9月30日



	中国海洋大学	中国	JASSO	29年4月1日～29年9月30日
	中国海洋大学	中国	JASSO	29年4月1日～29年9月30日
	山東大学	中国	JASSO	29年10月1日～30年9月30日
	キール大学	ドイツ	JASSO	29年4月1日～29年9月30日
	キール大学	オーストリア	JASSO	29年10月1日～30年3月31日
	ヤゲウォ大学	ポーランド	JASSO	29年4月1日～29年9月30日
	パリ第7大学	フランス	JASSO	29年10月1日～30年9月30日
	パリ第7大学	フランス	JASSO	29年10月1日～30年9月30日
平成 30年度	北京外国語大学	中国	JASSO	30年4月1日～31年3月31日
	中国海洋大学	中国	JASSO	30年4月1日～30年9月30日
	中国海洋大学	中国	JASSO	30年4月1日～30年9月30日
	中国海洋大学	中国	JASSO	30年4月1日～30年9月30日
	カレル大学	チェコ	JASSO	30年4月1日～30年9月30日
	南京大学	中国	JASSO	30年10月1日～31年3月31日
	南京大学	中国	JASSO	30年10月1日～31年3月31日
	カレル大学	チェコ	JASSO	30年10月1日～31年9月30日
	トリーア大学	ドイツ	JASSO	30年10月1日～31年9月30日
	リール大学	フランス		30年10月1日～31年9月30日
	パリ第7大学	フランス		30年10月1日～31年9月30日
	パリ第10大学	フランス	JASSO	30年10月1日～31年9月30日
	ブリュッセル自由大学 (蘭語系)	ベルギー		30年10月1日～31年3月31日
	サンクトペテルブルク 大学	ロシア	JASSO	30年10月1日～31年3月31日

※HUMAP：兵庫・アジア太平洋大学間交流ネットワーク、JASSO：日本学生支援機構

《資料16：交換留学（派遣）実績》

	派遣大学名	派遣国	奨学金	期 間
平成 24年度	ヴェネツィア大学	イタリア		24年9月1日～25年6月15日
平成 25年度	グラーツ大学	オーストリア	JASSO	25年8月30日～26年7月15日
	ヴェネツィア大学	イタリア		25年9月～26年6月7日
	オックスフォード大学	英国	神戸大学基金	25年10月～25年12月
平成 26年度	オックスフォード大学	英国	JASSO	26年10月6日～27年3月14日
	グラーツ大学	オーストリア	JASSO	26年10月1日～27年7月3日
	SOAS	英国	JASSO	26年7月28日～27年6月20日
	国立台湾大学	台湾	JASSO	26年9月1日～27年1月31日
	パリディドロ第7大学	フランス	JASSO	26年9月1日～27年6月30日
平成 27年度	バーミンガム大学	英国		27年9月21日～28年6月17日
	中山大學	中国		27年9月20日～28年1月23日
平成 28年度	ヤゲヴォ大学	ポーランド		28年10月1日～29年2月24日
	復旦大学	中国	JASSO	28年4月1日～29年7月31日

	ボローニャ大学	イタリア		29年1月1日～30年2月2日
平成 29年度	パリ第7大学	フランス	JASSO	29年9月1日～30年6月30日
	パリ第10大学	フランス	JASSO	29年9月4日～30年6月30日
	パリ第10大学	フランス	JASSO	29年9月4日～30年6月30日
	ヴェネツィア大学	イタリア	JASSO	30年2月5日～31年1月31日
平成 30年度	国立台湾大学	台湾	JASSO	30年9月1日～令和元年7月31日
	トリーア大学	ドイツ	JASSO	30年10月22日～令和元年7月12日
	バーミンガム大学	イギリス	JASSO	30年9月1日～令和元年6月30日
	パリ第7大学	フランス	JASSO	30年9月1日～令和元年6月30日
	高麗大学校	韓国	JASSO	30年9月1日～令和元年8月31日
	高麗大学校	韓国	JASSO	31年3月1日～令和2年2月29日

### 3. ダブルディグリー・プログラム

平成27年度より、北京外国語大学北京日本学研究中心との間でダブルディグリー・プログラムを実施している。これは、博士前期課程の学生が、本研究科在籍中に派遣先大学に最低1年間留学し、所定の単位を修得し、派遣先大学と本研究科にそれぞれ修士論文を提出することによって、最短2年間で2つの学位を取得できるプログラムである。平成27～28年度に各1名を派遣しており、平成28年度には2名を受け入れている。

### 4. 連携講座

本研究科では、博士後期課程社会動態専攻に文化資源論講座を置いて、奈良国立博物館及び大和文華館と連携し、文化財学、文化資源学に関する教育を行い、博物館、美術館及び自治体において、文化財保全、文化財行政を担当できる高度な知識を持った人材を養成している。

### 5. 日本語日本文化教育の取組

本研究科では、学生が専攻する専門分野の特性を活かしながら、非日本語母語話者に対する日本語日本文化教育を行うための知識と能力を身につけることを目指す「日本語日本文化教育プログラム」《資料17》を平成20年度から博士課程前期課程の教育課程に組み入れて実施している。平成22年度以降毎年度、主にこのプログラムの修了者を対象にして、海外の大学での日本語日本文化教育インターンシップを実施している《資料18》。

#### 《資料17：日本語日本文化教育プログラム授業科目》

別表 授業科目および必要修得単位数

	授業科目	単位数		合計単位数
必修	日本語日本文化教育演習	2		
I群	多文化理解演習(a)(b)	4	2	
	日本語教育研究Ⅰ(a)(b)			
	日本語教育研究Ⅱ(a)(b)			

	日本語教育内容論Ⅰ(a)(b)		
	日本語教育内容論Ⅱ(a)(b)		
	日本語教育方法論Ⅰ(a)(b)		
	日本語教育方法論Ⅱ(a)(b)		
	日本語教育方法論Ⅲ(a)(b)		
Ⅱ群	日本語研究(a)(b)	2	12
	国語学特殊研究Ⅰ(a)(b)		
	国語学特殊研究Ⅱ(a)(b)		
	国語学特殊研究Ⅲ(a)(b)		
	国語学特殊研究Ⅳ(a)(b)		
	国語学特殊研究Ⅴ(a)(b)		
	日本語学特殊研究(a)(b)		
	応用言語学特殊研究(a)(b)		
	認知言語学特殊研究Ⅰ(a)(b)		
	認知言語学特殊研究Ⅱ(a)(b)		
	音声学特殊研究Ⅰ(a)(b)		
	音声学特殊研究Ⅱ(a)(b)		
Ⅲ群	日本社会文化演習Ⅰ(a)(b)	2	
	日本社会文化演習Ⅱ(a)(b)		
	国文学特殊研究Ⅰ(a)(b)		
	国文学特殊研究Ⅱ(a)(b)		
	国文学特殊研究Ⅲ(a)(b)		
	国文学特殊研究Ⅳ(a)(b)		
	国文学特殊研究Ⅴ(a)(b)		
	国文学特殊研究Ⅵ(a)(b)		
	日本古代中世史特殊研究Ⅰ(a)(b)		
	日本古代中世史特殊研究Ⅱ(a)(b)		
	日本中世史特殊研究Ⅰ(a)(b)		
	日本中世史特殊研究Ⅱ(a)(b)		
	日本近代史特殊研究Ⅰ(a)(b)		
	日本近代史特殊研究Ⅱ(a)(b)		
日本現代史特殊研究Ⅰ(a)(b)			
日本現代史特殊研究Ⅱ(a)(b)			
Ⅳ群 (国際文化研究 化学研究 科科目)	日本語教育内容論特殊講義	2	
	日本語教育方法論特殊講義		
	言語コミュニケーション論演習 [齊藤・川上] ※		

※言語コミュニケーション論演習は齊藤・川上担当のものに限る。

[日本語日本文化教育演習]を2単位、Ⅰ群から4単位、Ⅱ群・Ⅲ群から各2単位、及びⅠ群・Ⅱ群・Ⅲ群・Ⅳ群のいずれかから2単位、合計12単位を必要修得単位数とする。

《資料18：日本語日本文化教育インターンシップ派遣実績》

年度	派遣先機関	派遣国	期 間
平成24年度	ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日文学科	ドイツ	24年10月15日～25年12月13日
平成25年度	ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日文学科	ドイツ	26年3月26日～27年3月25日
平成26年度	ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日文学科	ドイツ	27年3月15日～28年3月7日
平成27年度	トリーア大学日文学科	ドイツ	28年1月23日～28年2月7日
	オックスフォード大学東洋学部日文学科	連合王国	28年2月20日～28年3月20日
	北京外国語大学日本語学科	中国	28年2月28日～28年3月26日
平成28年度	トリーア大学日文学科	ドイツ	28年9月29日～29年7月22日
	ディミトリエ・カンテミル大学日本語学科	ルーマニア	28年10月31日～28年12月2日
	ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日文学科	ドイツ	28年8月28日～29年3月2日
	北京外国語大学日本語学科	中国	29年2月26日～29年3月20日
平成29年度	ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日文学科	ドイツ	29年10月1日～30年3月1日
	オックスフォード大学東洋学部日文学科	連合王国	30年2月17日～30年3月11日
	北京外国語大学日本語学科	中国	30年3月8日～30年3月30日
	トリーア大学日文学科	ドイツ	29年11月3日～29年11月28日
平成30年度	オックスフォード大学東洋学部日文学科	連合王国	31年2月18日～31年3月8日
	ディミトリエ・カンテミル大学日本語学科	ルーマニア	30年11月1日～30年11月10日
	トリーア大学日文学科	ドイツ	30年11月5日～30年11月23日
	ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日文学科	ドイツ	30年10月1日～31年2月28日
	北京外国語大学日本語学科	中国	31年3月6日～31年3月26日

## 6. グローバル教育への取組

人文学研究科では、文部科学省、日本学術振興会によって採択された教育研究プログラムを通じて、国際的な場で活躍できる学生の育成をはかってきた。この目的を達成するため、研究科共通科目にグローバル教育のための科目を新たに設置するなど、教育課程を充実させてきた。平成24年度に文部科学省グローバル人材育成推進事業等に採択された「問題発見型リーダーシップを發揮できるグローバル人材の育成」プログラムに基づき、人文学研究科博士課程前期課程では、高度な国際感覚を育成するための外国語授業科目群（グローバル人文学科目群）と、「アカデミック・ライティング」など優れた外国語能力とコミュニケーション能力を育成するための授業科目群（グローバル対話力育成科目群）とからなる、「グローバル人文学プログラム」を実施している。このプログラムは、すべて外国語で授業が行われており、所定の単位を取得し、「外国語カスタンダード」（TOEFL等の外国語資格試験等における所定のスコア）を達成した者には、修了時に「グローバル人文学プログラム修了証」を授与している。

その結果、本プログラムが目的として掲げる「人文学的課題をグローバルな視点から考察し、日本文化の深い理解を基に異文化との対話を重ねながら、現代社会における諸問題を解決に導いていくリーダーシップとコミュニケーション能力を持った人材」が育ちつつある。（「グローバル人文学プログラム」については、「第2部 1-1. グローバル人材育成推進事業」79-83頁を参照。）

## II-4. 教育方法

### II-4-1. 授業形態の組合せと学習指導法上の工夫

教育を展開する上での指導法の工夫として、例えば景観文化財の現地保存について北野の伝建地区に赴くなど、フィールド型授業も重要視している《資料19》。

#### 《資料19：「歴史地理学特殊研究 I (a)」シラバス》

開講科目名	歴史地理学特殊研究 I (a)				
担当教員	菊地 真		開講区分	単位数	
			第3クォーター	1.0単位	
ナンバリングコード		曜日・時限	月3	時間割コード	3L510
<b>授業のテーマ</b>					
景観および文化資源の保存活用					
<b>授業の到達目標</b>					
目標は、受講生が自ら現地を訪れ、文化財に関して考察する基礎的知識を身につけること、自ら調べ考える好奇心を持つことである。					
<b>授業の概要と計画</b>					
都市の町並みや景観を構成する建造物・歴史資料など、多様な文化財の現地保存について、実際に調べ、考える。授業はグループワーク、演習形式で進める。学部生と共に実践的作業を進め、グループを進んで牽引する役割を期待したい。詳細は神戸大学 LMS (学修管理システム BEEF) 「景観文化財学」で確認すること。					
<b>成績評価方法</b>					
平常点による。課題レポート、調査、討論や発表など授業への参加取り組み度合いから、総合的に評価する。					
<b>成績評価基準</b>					
秀、優、良、可、不可に基づく。					
<b>履修上の注意 (関連科目情報)</b>					
専門的知識より、文化財や歴史資料等の保存活用に興味があることを重視します。30・40を連続受講のこと。					
<b>事前・事後学修</b>					
法制度や理論は参考文献を読み、各自で文化財保存の実態や課題等を学ぶこと。自分たちで積極的に資料調査をし学習すると良い。グループワークである点に留意。					
<b>オフィスアワー・連絡先</b>					
人文学研究科C棟5階 C566室 火曜日12:30-13:00					
<b>学生へのメッセージ</b>					
この講義では実際に野外を歩き調査することを通じて、調査法を学ぶと共に、文化資源について考えていきたい。					
<b>今年度の工夫</b>					
視聴覚教材を使って内容の理解を図る。学修支援システムBEEFで授業内容を案内する。参考図書を附属図書館資料ガイド" KULIP" で紹介している。					
<b>教科書</b>					
テキストは使用しない。プリントを配布する。以下はテーマに関する基本的図書である。 文化的景観：生活となりわいの物語 / 金田章裕：日本経済新聞出版社，2012，ISBN： 歴史的遺産の保存・活用とまちづくり / 大河直躬，三輪康道編著：学芸出版社，2006，ISBN： 遺跡保存の事典 新版 / 文化財保存全国協議会：平凡社，2006，ISBN:9784582120110					
<b>参考書・参考資料等</b>					
景観文化財、文化財に関する参考図書を体系的にまとめ、人文学図書館KULIPコーナーで紹介している。下記はやや専門的だが、文化財保存・活用の重要な参考図書である。 現代の建築保存論 / 鈴木博之：王国社，2001，ISBN： 歴史的遺産の保護 / 加藤一郎 野村好弘：信山社出版，1997，ISBN:4797250127 遺跡と観光：市民の考古学シリーズ / 澤村明：同成社，2011，ISBN:9784886215642					
<b>授業における使用言語</b>					
日本語					

また実社会に応用できる能力を身につけることを目的として、実習型の授業も重視している。例えば、日本語教育に関連する基礎的知識を習得した上で、3週間にわたって実施される「神戸大学夏期日本語日本文化研修プログラム」等において実習を行うことで、異文化交流と日本語教育の実体験ができる授業を行っている《資料20》。

《資料20：「日本語日本文化教育演習」シラバス》

開講科目名	日本語日本文化教育演習		
担当教員	實平 雅夫	開講区分	単位数
		前期	2.0単位
ナンバリングコード	曜日・時限	月5	時間割コード 1L523
授業のテーマ			
日本語日本文化教育と異文化理解			
授業の到達目標			
<p>1) 日本語日本文化教育に関する基礎的知識の習得 日本語日本文化教育に関する講義（オムニバス形式・国際教育総合センター留学生教育部門教員が担当）と日本語の模擬授業を通して、日本語教授法、日本語学、日本文化・日本事情、異文化交流などの基礎的知識を習得する。</p> <p>2) 日本語教育の基礎的な教授スキルの習得 国際教育総合センター留学生教育部門で開講されている留学生対象とした日本語日本文化の授業の観察、及び本授業における日本語の模擬授業を通して、日本語日本文化教育のティーチングアシスタントや教授を担う際に必要となる基礎的な教授スキルを身につける。</p>			
授業の概要と計画			
<p>本授業では、日本語日本文化教育に関する講義（オムニバス形式・国際教育総合センター留学生教育部門教員が担当）と日本語の模擬授業を通して、日本語・日本文化教育に必要な力は何かを考える。授業のスケジュールは以下のとおり。全15回（30時間）。定員は12名程度。受講希望者が多い場合は、受講動機のレポートを渡し、その評価により受講者を決定する。</p> <p>第1回目（4/10）オリエンテーション（授業の概要、スケジュール、評価について）  第2回目（4/17）講義①「外から見た日本語」（朴秀娟）  第3回目（4/24）講義②「日本語教授法1」（齊藤）  第4回目（5/1）講義③「日本語教授法2」（實平）  第5回目（5/8）講義④「日本語教授法2」（川上）  第6回目（5/22）講義⑤「やさしい日本語」（ハリソン・黒田）  第7回目（5/29）講義⑥「異文化コミュニケーション」（黒田）  第8回目（6/12）講義⑦「外から見た日本」（ハリソン）  第9回目（6/19）ニーズ調査、レディネス調査、教材分析・選定（『みんなの日本語』）  第10回目（6/26）教案作成・検討①  第11回目（7/3）教案作成・検討②  第12回目（7/10）模擬授業・検討①  第13回目（7/24）模擬授業・検討②  第14回目（7/31）模擬授業・検討  第15回目（8/7）模擬授業の振り返り・フィードバック</p>			
成績評価方法			
<p>本授業は、授業（講義）への参画、模擬授業への参加と模擬授業の振り返りシートの提出、期末レポートの3点で評価する。なお、講義全7回のうち5回以上、模擬授業全3回のうち2回以上出席していること、さらに最終レポートを提出していることが、成績評価の前提条件となる。すなわち、このいずれかの条件を満たさない場合、不可となる。</p>			
成績評価基準			
<p>1) 授業（講義）への参画：40%</p> <p>2) 模擬授業への参加と模擬授業の振り返りシートの提出（3回）：40% 日本語・日本文化教育の模擬授業の実施を通して日本語・日本文化教育に必要な力とは何かを考え、記録する。</p>			
履修上の注意（関連科目情報）			
<p>本授業は、セメスター開講科目（前期15回の授業）である。クォーターごとの履修は不可能であるので、注意すること。  関連科目情報：人文学研究科の日本語日本文化教育プログラム、国際文化学研究科の日本語教師養成サブコースの開講科目を履修することが望ましい。</p>			
事前・事後学修			
<p>国際教育総合センター留学生教育部門が2017年度前期に実施するオープンセンターウィークにおいて日本語及び日本事情科目の公開授業を観察して参観レポートを提出する。また、模擬授業終了後、振り返りシートを提出すること。</p>			

学生に対する指導体制は、前期課程、後期課程ともに入学時から主指導教員が履修状況をチェックし、個別に指導を行う一方、他専攻の教員1名を含む副指導教員2名を置き、あわせて3名の指導教員が協力して指導に当たっている。学生は『学生便覧』に明記されている学修プロセスに従って修士論文研究計画書、博士論文作成計画書などを提出する《資料21》。また、正副研究科長、正副大学院委員と各教育研究分野の代表で構成される学修プロセス委員会は、学位論文作成に向けて指導が適切に行われているかを検証するとともに、学修プロセスの見直しを行っている。

平成30年度も、学修プロセスにしたがって前期課程公開研究報告会（前期課程2年次）、後期課程公開研究報告会（後期課程2年次）、博士予備論文公開審査（後期課程3年次）が実施され、該当する学生のその時点における研究成果を踏まえて指導が行われた。

《資料21：学修プロセスフロー》

人文学研究科学生の学修プロセスフロー図		
年次	時期	事項
<b>【博士課程前期課程】</b>		
1年次	4月20日	■「 <u>前期課程指導教員・研究テーマ届</u> 」提出
	5月20日	■「 <u>修士論文研究計画書</u> 」提出
2年次	4月10日	■ <u>修士準備論文を1部提出</u>
	6月第3水曜日	前期課程公開研究報告会
	前期課程公開研究報告会の翌週の金曜日	■主指導教員は「前期課程公開研究報告会終了報告書」を提出
	11月16日まで	■「 <u>修士論文題目</u> 」提出
	1月16日まで	■ <u>修士論文を1部提出</u>
	2月中旬	最終試験
	3月上旬	博士課程前期課程修了判定
3月下旬	学位記授与式	
<b>【博士課程後期課程】</b>		
1年次	4月20日	■「 <u>後期課程指導教員・研究テーマ届</u> 」提出
	5月31日	■「 <u>博士論文作成計画書</u> 」提出
2年次	7月1日	■主指導教員は指導学生の後期課程公開研究報告会発表題目を提出
	9月30日	後期課程公開研究報告会
	10月10日	■主指導教員は「後期課程公開研究報告会終了報告書」を提出
	3年次	5月31日
3年次	6月最終水曜日または7月第1水曜日	博士予備論文公開審査
	博士予備論文公開審査の翌週の金曜日	■主指導教員は「博士予備論文公開審査報告書」を提出
	12月1日～12月10日	■ <u>博士論文を5部提出</u>
	1月～2月	最終試験
	3月上旬	博士課程後期課程修了者（学位授与）認定
3月下旬	博士学位授与	
備考：_____は、学生が提出するもの。 ■は教務学生係に提出するもの。 博士課程前期課程9月修了者の修士論文題目は5月15日まで、修士論文提出は7月15日まで。 博士課程後期課程9月修了者の博士論文提出は、7月1日から7月10日まで。 (注) 時期が休日にあたる時は、その前日とします。ただし、修士論文提出については、その翌日とします。各年度の時期については、前年度の12月に掲示により通知します。		

学位論文の提出条件、作成要領は、人文学研究科博士課程後期課程の一期生が学位論文を提出するのに合わせて、平成21年度に「学位論文受理条件（申し合わせ）」および「学位論文等作成要領」を作成して明文化し、学生に周知した《資料22》《資料23》。

《資料22：学位論文受理条件（申し合わせ）》

論文博士 [2009年11月より適用]

原則として、出版されている研究書あるいは出版が内約されている研究書であること。出版が予定されていない場合には、2本以上の査読誌掲載論文を含んでいること。その場合、学位取得後1年以内に電子媒体サービス等を利用して刊行すること。

課程博士 [2010年4月入学者より適用]

- (1) 学位論文の内容を、査読誌ないしはそれに準ずる研究誌に刊行していること（採択済みも含む）、なお、教員が所属している教育研究分野でしかるべき規定を設けている場合には、この規定に加えて、当該教育研究分野の規定を尊重する。
- (2) 特段の理由がない限り、電子媒体サービス等を利用して、学位論文を学位取得後1年以内に刊行すること。

《資料23：学位論文等作成要領》

学位論文等作成要領

学位論文の審査を願い出る者は、この作成要領に従って書類を整備すること。

1 申請書類について

次に掲げる書類等を主指導教員を経て研究科長に提出するものとする。ただし、提出にあたっては、必ず主指導教員及び教務学生係の点検を受けること。

- |                              |      |
|------------------------------|------|
| (1) 学位論文審査願                  | 1部   |
| (2) 学位論文提出承認書                | 1通   |
| (3) 論文目録                     | 1部   |
| (4) 学位論文                     | 1編5部 |
| (5) 論文内容の要旨（4,000字程度、日本語による） | 7部   |
| (6) 履歴書                      | 1部   |
| (7) 参考論文                     | 1部   |

2 学位論文について

- ・ 永久保存に耐え得るタイプ印刷とし、製本すること。
- ・ 規格は自由であるが、なるべくA4版が望ましい。
- ・ 表紙には、提出日、論文題目等を明記すること。（別紙見本Aを参照）
- ・ 提出後は、訂正、差し替えができないので、誤字、脱字等がないように注意すること。
- ・ 外国語による論文の場合は、提出論文の扉に、論文題目とその和訳（括弧書き）を併記すること。
- ・ 共著論文のうち、次の条件を満たしているものは、学位論文として受理することができる。
  - ①論文提出者が研究及び論文作成の主動者であること。
  - ②学位論文の共著者から、当該論文を論文提出者の学位論文とすることについての承諾書が得られること。（別紙承諾書添付）

3 論文目録について

(1) 題目について

- ①題目（副題を含む）は、提出論文のとおり記載すること。
- ②外国語の場合は、題目の下にその和訳（括弧書き）を併記すること。

(2) 印刷公表の方法及び時期について

- ①公表は、単行の書籍又は学術雑誌等の公刊物（以下「公表誌」という。）に登載して行うものであること。
- ②論文全編をまとめて公表したものについては、その公表年月、公表誌名、（雑誌の場合は、巻・号）又は発行書名等を記載すること。また、論文を編・章等の区分により公表したものについては、それぞれの区分ごとに公表の方法・時期を記載すること。



③	学位論文（編・章）について、別の題目で公表した論文をもって公表したものとする場合は、その題目（公表題目）を（ ）を付して併記すること。
④	未公表のものについては、次の記載例を参照の上、その公表の方法、時期の予定を記載すること。 （記載例）
イ	すでに出版社等に提出し、出版が内約されている場合。 題目 ○○○○○○○○○ ○○○出版社から平成○○年○○月 刊行予定
ロ	すでに投稿し、学会等において、掲載期日が決定しているが、申請手続の時点において、印刷公表されていない場合。 題目 ○○○○○○○○○ ○○○学会誌○巻○号 平成○○年○○月○○日 掲載予定
ハ	現在投稿中の場合。 題目 ○○○○○○○○○ ○○○学会誌 投稿中 平成○○年○○月○○日 投稿済み
ニ	近く投稿する予定の場合。 題目 ○○○○○○○○○ ○○○学会誌平成○○年○○月投稿予定
⑤	共著の場合は必ず共著者名を付記すること。
(3)	冊数について 学位論文1通についての冊数を記載すること。
(4)	参考論文について すでに学会誌等に発表した論文題目を記載し、その論文を添付すること。
4	履歴書について（別紙見本Bを参照）
(1)	氏名について 戸籍のとおり記載し、通称・雅号等は一切用いないこと。
(2)	学歴について ①高等学校卒業後の学歴について年次を追って記載すること。 ②在籍中における学校の名称等の変更についても記載すること。
(3)	職歴・研究歴について 原則として常勤の職について、機関等の名称、職名等を正確に年次を追って記載すること。ただし、学歴と職歴に空白となる期間があり、非常勤等の職歴がある場合はこれを記入し、職歴等に不明な期間がないように記載すること。
(4)	賞罰について 特記すべきものと思われるものを記載すること。
5	論文内容の要旨について 記載方法については、（別紙見本C）を参照。 以 上

ティーチングアシスタント（TA）は、授業の必要性に応じて適宜配置している《資料24》。TA採用者に対しては「TAハンドブック」を配布するとともに、授業担当者からのガイダンスを行っている。

《資料24：TAの人文科学研究科への配置実績（平成27～30年度、単位：人）

	講義科目	演習・実習科目等
平成27年度	2	15
平成28年度	1	10
平成29年度	2	15
平成30年度	4	9

シラバスは、すべてウェブサイト上に公開しており、担当教員名、講義目的、授業内容、成績評価・基準、準備学習等についての具体的な指示、教科書・参考文献、履修条件等の履修情報を掲載し、学習の便宜を図っている。履修科目登録時には、指導教員が点検し、学生の意欲や関心に合った履修を促している。シラバスに参考文献や授業の履修条件を適宜示すことにより、学生の主体的

学修を促している。また、オフィスアワーが各教員のシラバスに記載され、授業時間外に学修・学生生活に関する質問・相談に応じている《49頁の資料19、50頁の資料20》。

## II-4-2. 主体的な学習を促す取組

履修科目登録にあたって指導教員が点検し、学生の意欲や関心に合った履修を促している。シラバスに参考文献や授業の履修条件を適宜示すことにより、学生の主体的学修を促している。

大学院生の学習意欲を高めるために、海外で研究発表を行う機会や調査・実験を行う機会を提供している。特に後期課程の大学院生の、海外で開催される学会への参加に対して、大学院学生海外派遣援助事業などを活用して支援してきた《資料25》《資料26》。また、海港都市研究センターは、台湾・大韓民国・中華人民共和国の大学と連携して、大学院生の研究発表を中心とする国際シンポジウム（海港都市国際シンポジウム）を継続的に開催してきた。平成29年度は提携校と連携して国際シンポジウムを開催し、大学院生の海外派遣を行っている。

### 《資料25：平成24年度から30年度までの、大学からの資金援助を得た海外派遣件数》

	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度
件数	8	7	4	14	13	12	18

※平成26年度までは、神戸大学基金による海外派遣件数である。

### 《資料26：平成30年度における大学からの資金援助を得た海外派遣》

教育研究分野	派遣先	派遣目的	発表論文名
日本史学	中国 北京外国語大学	研究発表	近世書物史について
社会学	中国 北京外国語大学	研究発表	相互行為論から見る日本の SNS：『SNS の使い分け』に着目して
国文学	ドイツ ハンブルク大学	平成30年度日本語 日本文化教育インターンシップ活動	
心理学	中国 ウェスティン天津	国際シンポジウムへの参加	
中国・韓国文学	中国 北京大学	研究発表	「揺れ動く」妾像 — 琦君文学における妾描写を中心に
日本史学	中国 北京大学	研究発表	近代日本の政軍関係と統帥権 — 紹介と展望
倫理学	China National Convention Center	研究発表	Two Senses of Radical
倫理学	China National Convention Center	研究発表	日本の批評と哲学における近代 — 小林秀雄と京都学派を再考する
倫理学	China National Convention Center	研究発表	Public Emotion — Martha C. Nussbaum's Perspective of Disgust
倫理学	China National Convention Center	研究発表	Timothy Morton's Dark Ecology Thought : Beyond the Boundary Between the Human and the Nonhuman
中国・韓国文学	中国 温州大学	研究発表	琦君文学における妾のイメージについて
心理学	イギリス オックスフォード大学	平成30年度日本語 日本文化教育インターンシップ活動	

芸術学	フランス パリ第10大学	研究発表	What's tourism? – the perspective of the tourist's experience –
倫理学	フランス パリ第10大学	研究発表	Imagination as Production of Materialized Forms of Action : Exploring MIKI Kiyoshi's Thought on Imagination
社会学	フランス パリ第10大学	研究発表	The difficulty for the change of identity – The construction of generalized theory of integration-oriented mentality –
芸術学	フランス パリ第10大学	国際シンポジウムへの参加	
芸術学	中国 厦門大学	研究発表	Media as Oceans : The Archaeology of Oceans in Cinema
芸術学	中国 厦門大学	研究発表	The Representation of Port in Movies : Port as Contact Zone

環境面では、平成19年度の学舎改修に際して学生用スペースを拡張したが、平成22年度以降にはラーニング commons の設置、情報処理室の拡充などを行うことで、《資料27》のように主体的な学修を促す環境を整備している。

#### 《資料27：主体的な学習を促す環境の整備項目》

施設等	概要
図書館(日本文化資料コーナー)	本学部の人文科学図書館は書籍約30万冊を有し、毎年確実に蔵書数を増やしている。授業期間中は、平日(8時45分～20時)および土曜日(10～18時)、試験期間中は、平日の夜間(21時まで)および日祝日も開館している(10～18時)。 「日本文化資料コーナー」を設けて資史料、貴重図書、レファランス類を集中的に配架し、複数の辞書類・資料を同時に縦覧する必要がある歴史・文学系等の学生の利便を図っている。
学生用共同研究室	学生が個人あるいはグループで調査・研究するために使用できる「共同研究室」を教育研究分野ごとに設置し、学生の自主学習へ配慮している。
コモンルーム	学生がグループ学習や研究会などのために自由に使用することのできる「コモンルーム」を3カ所設置し、学生の自主学習へ配慮している。
共同談話室	教員と学生が共同研究、読書会など行うために使用することができる「共同談話室」を5カ所設置し、自由な共同学習や演習等の授業に活用している。可能な限り具体的な活用状況を入れる。
情報機器	学生が利用できるパーソナル・コンピューターを「情報処理室」(平成22年度 B 棟に移転・拡充)に48台、人文科学図書館に18台を設置するとともに、各専修の共同研究室や実験室などにも適宜配置している。
教育機器	視聴覚機材を平成21～23年度 B 棟に、平成24年度 C 棟に設置し、ほとんどの教室で視聴覚機材(プロジェクター、スクリーン、DVD など)を使った授業ができるようになった。
ラーニング commons	自由に机と椅子を組み合わせ、図書館資料を自由に使用し、グループで話し合いながら学習を進めることができるスペースとして、「ラーニング commons」が人文科学図書館に設置された。平成25年度から運用が始まり、自主学習や演習等の授業に活用されている。

## II-5. 学業の成果

### II-5-1. 学生が身に付けた学力や資質・能力

本研究科博士課程前期課程の学位取得等の状況は、《資料28》のとおりである。ここ数年、人文学研究科博士課程前期課程の入学者の標準修業年限（2年）内修了者の比率は、平均約77%となっている。本研究科博士課程後期課程の学位取得状況は《資料29》のとおりである。平成19年度の人文学研究科への改組以後は、修業年限（3年）内の学位取得者の比率は平均約27%となっている。修士学位論文の題目は《資料30》、博士学位論文の題目は《資料31》のとおりである。また、専修教育職員免許状の取得状況は《資料32》のとおりである。

多数の学生が国際学会や全国規模の学会等で研究成果を発表し、優秀論文賞を受賞するなど、在学生の研究成果が各種学会等において高く評価されている《資料33》。

《資料28：人文学研究科（博士課程前期課程）の修士学位取得状況一覧 平成30年3月現在》

入学年度 (標準修業年度)	入学者総数 (a)	既修了者数 (b)	既修了率 (b/a)	標準年限内修了者数 (c)	標準年限内修了率 (c/a)
平成22年 (平成23年)	43	38	88.4%	32	74.4%
平成23年 (平成24年)	51	48	94.1%	40	78.4%
平成24年 (平成25年)	48	45	93.8%	39	81.3%
平成25年 (平成26年)	44	42	95.5%	35	79.5%
平成26年 (平成27年)	41	31	75.6%	31	75.6%
平成27年 (平成28年)	61	59	96.7%	50	82.0%
平成28年 (平成29年)	63	51	81.0%	43	68.3%
平成29年 (平成30年)	48	45	93.8%	36	75.0%

《資料29：人文学研究科（博士課程後期課程）の博士学位取得状況一覧 平成30年3月現在》

入学年度 (標準修業年度)	入学者総数 (a)	既修了者数 (b)	既修了率 (b/a)	標準年限内修了者数 (c)	標準年限内修了率 (c/a)
平成22年 (平成24年)	26	22	84.6%	10	38.5%
平成23年 (平成25年)	21	13	61.9%	8	38.1%
平成24年 (平成26年)	11	8	72.7%	3	27.3%
平成25年 (平成27年)	19	9	47.4%	1	5.3%
平成26年 (平成28年)	23	11	47.8%	7	30.4%
平成27年 (平成29年)	25	6	24.0%	5	20.0%
平成28年 (平成30年)	16	2	12.5%	2	12.5%

《資料30：平成30年度人文学研究科博士課程前期課程修了者の修士論文題目》

専攻	教育研究分野	論文題目
文化構造専攻	哲学	反实在論的科学像における因果理解の検討
	哲学	『論理学研究』以前のフッサールの普遍概念について — フッサリアーナ 41巻『本質論と形相的変更の方法について』を手がかりに —
	倫理学	小林秀雄の知識人像の考察 — 政治と文学の間
	倫理学	公共空間再考 — ハンナ・アーレントの「仕事」概念を手がかりに

	倫理学	言語・想像力・希望 — 「ロマン主義者としてのリチャード・ローティ」論 —
	倫理学	On Some Philosophical Problems concerning Integration in Japan
	国文学	富岡多恵子論 — 初期・中期作品における「女」と「言葉」の問題
	国文学	豊島与志雄研究 — 「近代説話」を中心に —
	国文学	遠藤周作研究 — 作品構造と「裏切り」の主題
	国文学	御家人三浦氏の歴史叙述に関する研究 — 『承久記』・『吾妻鏡』を中心に —
	国文学	上田秋成の古典学 — 古典注釈と実作との関係をめぐって
	国文学	格助詞カラのとりたて詞的用法 — とりたて詞マデとの比較から —
	国文学	『源氏物語』研究 — 家繁栄の諸相 —
	国文学	台湾人日本語学習者に対する取り立て助詞「だけ」の指導について — 述語接続の「だけだ」をめぐって —
	中国・韓国文学	漢魏六朝の書簡文について
	中国・韓国文学	韓・中近代都市文学「川辺の風景」と「子夜」に関する比較研究 — 女性像を中心に —
	中国・韓国文学	中国 1920 年代における女性の恋愛結婚観 — 凌叔華の文学作品から
	ドイツ文学	『白雲母』から『晩夏』へ — シュティフター文学における環境のあり方
	ドイツ文学	分離と結合の詩学 ノヴァーリス『青い花』を中心に
社会 動 態 専 攻	日本史学	中世における「非人」認識 — 非人身分成立への一試論として —
	日本史学	明治後期における町村是作成運動の一考察
	日本史学	律令制下の地方行政機構と地域社会に関する基礎的考察 — 出挙制の展開を中心に —
	日本史学	『日本書紀』編纂過程の基礎的考察 — 考徳紀の朝鮮関係記事をめぐって
	日本史学	寛政期朝幕関係の基礎構造 — 天明大火にともなう旧儀復古を事例に —
	西洋史学	中世都市の公共空間「道路と広場」と市民意識 — イタリア北・中部を中心として —
	西洋史学	宮廷貴族がみた 18 世紀ウィーン宮廷儀礼をめぐる論争 — 侍従長ケーフェンヒューラー＝メチェ侯爵の視点から —
	西洋史学	ローマ共和政後期のイタリアにおける土地分配事業とその社会的背景 — スッラ以降の土地分配をめぐる議論の分析から
	心理学	読書が共感に及ぼす影響について
	心理学	表情と語調の感情判断におけるニート・ひきこもり傾向の影響：脳波測定による検討
	言語学	On the Syntactic Structure of Deictic There-Constructions
	言語学	Suffixes and Accentuation of English Loanwords in Japanese : Word Formation and Phonological Structure
	言語学	空項の解釈に関する考察
芸術学	内なる他者の身体表象 — 鳥居龍蔵の千島アイヌ調査写真をめぐって	

芸術学	観光経験の感性論的考察 — ジョン・アーリのポスト・ツーリスト論を中心に —
社会学	地方移住者の選択・適応過程 — 岡山県小田郡矢掛町を事例として —
社会学	見田社会学の内在的・総体的理解をめざして — 〈過渡期〉における価値論の検討を中心に
社会学	日本の公・私立学校に在籍する在日華僑生徒の諸相 — 生徒・親・教員の三者の視点から
社会学	子育てから見る中国一人っ子夫婦の家庭形態 — 共働き家庭の世代比較を中心に —
美術史学	「平家納経」見返絵の和装化について — 「扇面法華経」と「源氏物語絵巻」との関係から —
美術史学	伊藤若冲の作画技法について — 同時代画論書との比較を中心に —
美術史学	グエルチーノ《受胎告知》とエスコラピオス修道会
美術史学	春日宮曼荼羅の成立
美術史学	フランチェスコ・アイエツ研究
地理学	法人サービス業の供給者特性に関する地理学的研究 — 愛知県名古屋市における会計事務所A社の顧客ネットワークと専門家ネットワークの形成と活用に着目して —
地理学	商店街における場所アイデンティティの形成 — 兵庫県尼崎市尼崎中央商店街とその周辺地区を事例に —

《資料31：平成30年度人文学研究科博士課程後期課程修了者の博士論文題目》

専攻	教育研究分野	博士論文題目
文化構造	国文学	帰結用法を持つ形式名詞由来の文末形式ワケダ・ハズダ・コトニナルについて — 日本語教育への貢献を目指して
	中国・韓国文学	日中韓近代初期文学の関連様相研究 — 明治小説の伝播と受容を中心に — 韓国近代小説文体の成立過程に関する研究
社会動態	日本史学	姫路藩の河川交通支配と大庄屋阿江家
		日本中世後期における地域社会の宗教秩序 — 越前国を事例に —
		中世地方寺院の経済構造 — 「勝尾寺文書」の分析を通じて —
		南北朝期室町幕府官制の研究
	心理学	規範違反行為に対する道徳感情についての研究
	美術史学	神坂雪佳研究
神聖ローマ皇帝ルドルフ2世治世下のプラハにおける絵画の自由学芸化 アルトドルファーと人文主義 — 聖母像と風景画を中心に		
文化資源論	蓮華王院宝蔵絵巻の研究 — 「六道絵」「八幡縁起絵巻」を中心に —	

《資料32：教育職員免許（専修免許状）取得状況》

	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度
取得者数	20	19	6	13	14	9	8

《資料33：平成23～30年度学生受賞者一覧》

氏名	所属（受賞時）	成績功績等の概要
李瑩瑩	人文学研究科 博士課程後期課程	論文「上代漢字文献における「矣」の用法」が、平成23年度漢検漢字文化研究奨励賞・佳作（財団法人 日本漢字能力検定協会）を受賞した（平成23年度）。
八木彩乃	人文学研究科 博士課程前期課程	グローバルCOE「心の社会性に関する教育研究拠点」総括シンポジウム「心はなぜ、どのように社会的か？～フロンティアとアジェンダ～」(2012.3.17開催)で若手ポスターアワードを受賞した（平成23年度）。
大杉千尋	人文学研究科 博士課程後期課程	論文「イーゼンハイム祭壇画《キリスト復活》に関する一考察—「オランズ型」キリストの機能をめぐって」により、第12回美術史論文賞を受賞した（平成26年度）。
Charis Eisen	人文学研究科 博士課程後期課程	選択がないような状況における人々の行動の文化差および自己観による影響を検討した研究内容が独創性や発展性の面で高く評価され、日本社会心理学会の若手研究者奨励賞を受賞した。（平成27年度）
竇新光	人文学研究科 博士課程後期課程	中国国家優秀自費留学生賞を受賞した（平成28年度）。
王輝皓	人文学研究科 博士課程後期課程	中国国家優秀自費留学生賞を受賞した（平成28年度）。
Charis Eisen	人文学研究科 博士課程後期課程	学術研究活動において、国際的規模又は全国的規模の学会から賞を受けたものとして本学の学生表彰を受けた（平成28年度）。
田中大貴	人文学研究科 博士課程後期課程	日本人間行動進化学会第9回大会（2016年12月10日-11日）で行ったポスター発表に対して若手奨励賞を受けた（平成28年度）
川上恵理	人文学研究科 博士課程後期課程	美術史の分野では新人の登竜門である鹿島美術財団の優秀賞を受賞した（平成29年度）。
佐々木純哉	人文学研究科 博士課程前期課程	権威のあるグレンツェンピアノコンクール第9回全国大会の大学・一般コースにおいて、金賞(最高位)を獲得したことにより本学の学生表彰を受けた（平成29年度）。

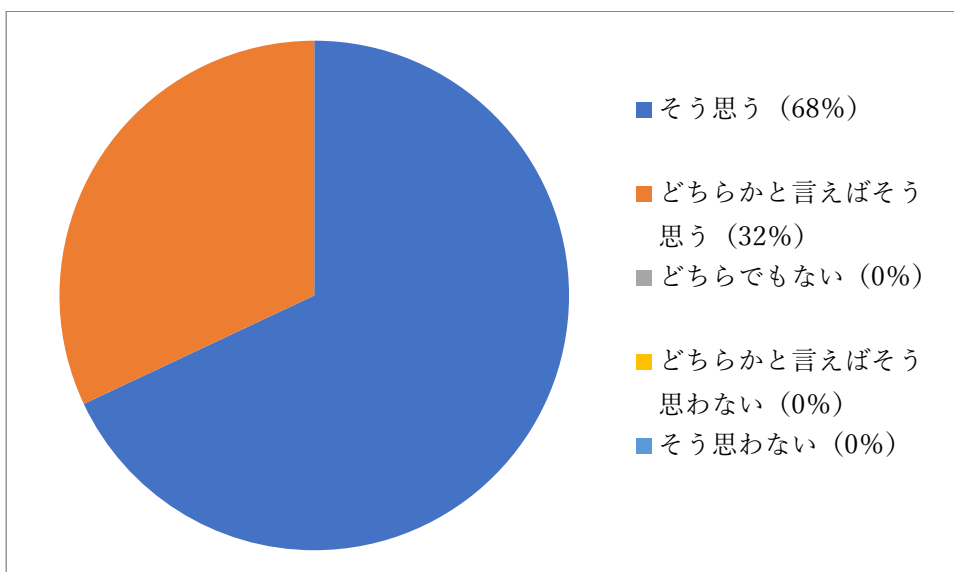
## II-5-2. 学業の成果に関する学生の評価

「授業振り返りアンケート」平成30年度後期の結果では、教育の成果や効果に関する質問項目の「この授業の内容はよく理解できましたか。」「シラバスに書かれている到達目標をあなたはどの程度達成できたと思いますか。」のうち、前者については最上点と次点の回答者の合計が100%、後者については最上点と次点の回答者の合計が97%といずれも良好な結果が得られており、いずれも極めて高いレベルを維持している《資料34》。

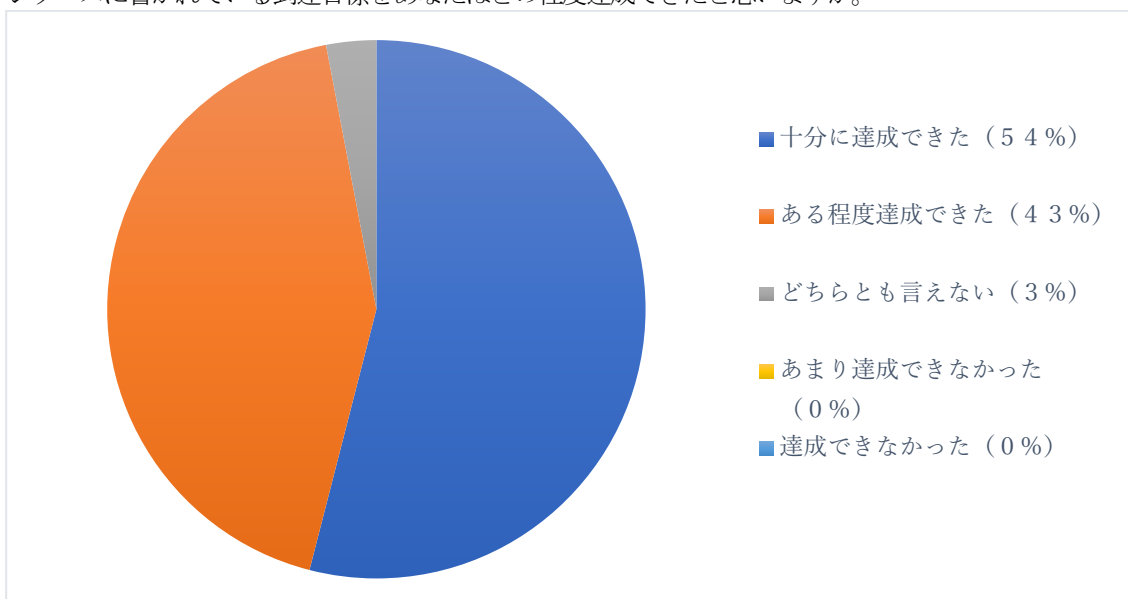
また、平成28年度の修了時アンケートでは、「深い学識」と「高度の専門的知識」について、身についたという回答が多く得られた。また、「課題を設定して解決する能力」も身につけていることが確認された《資料35》。

《資料34：「平成30年度1Q, 2Q, 3Q, 4Q 授業評価アンケート」結果（抜粋）》

この授業の内容はよく理解できましたか。



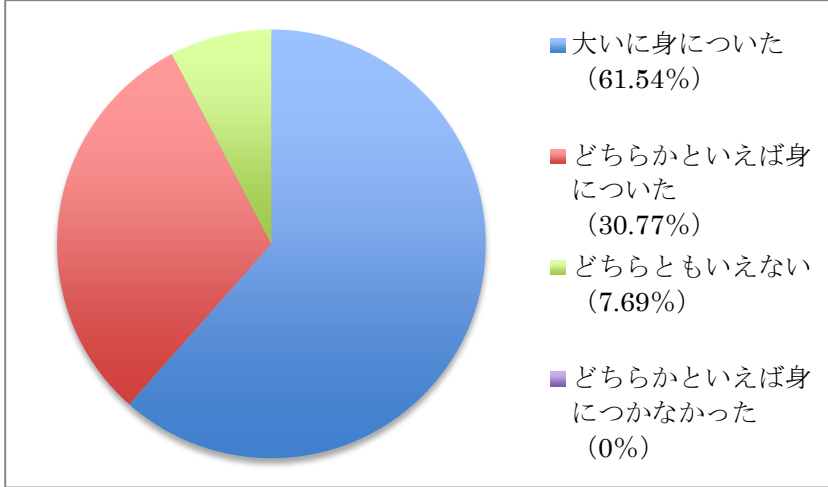
シラバスに書かれている到達目標をあなたはどの程度達成できたと思いますか。



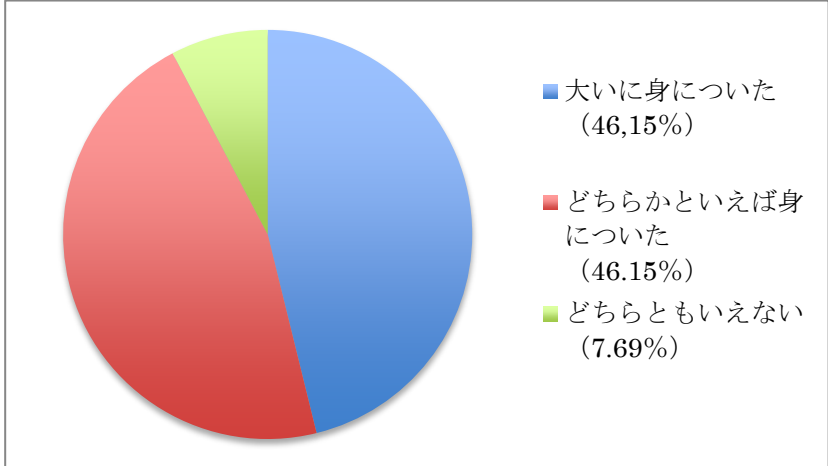


《資料35：「平成28年度人文学研究科修了時アンケート」結果（抜粋）》

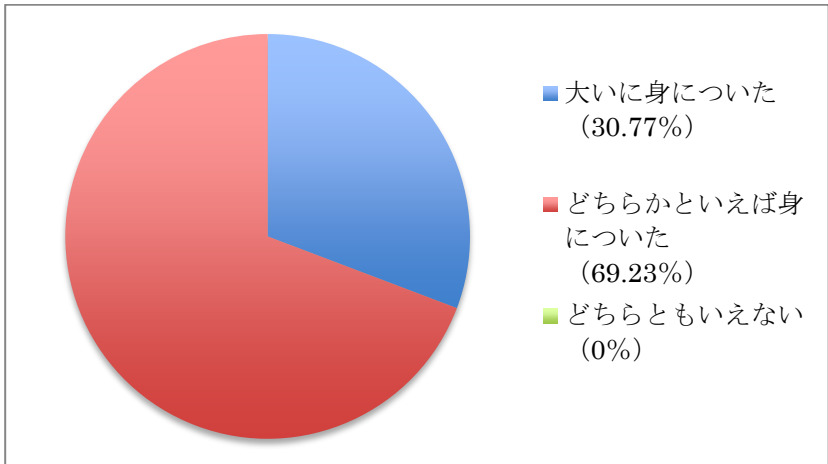
「深い学識」について、あなたは2年間の博士課程前期課程において、どの程度身についたと思いますか。



「高度の専門知識」について、あなたは2年間の士課程前期課程において、どの程度身についたと思いますか。



「課題を設定し解決していく能力」について、あなたは2年間の博士課程前期課程において、どの程度身についたと思いますか。



## II-6. 進路・就職の状況

### II-6-1. 修了後の進路の状況

人文学研究科博士課程前期課程の就職率及び進学率は《資料36》、進路状況は《資料37》の通りである。進路就職先としては教育・研究関係や公務員など、本研究科の教育成果が活かされる職種に就く者もいるが、近年は一般企業に就職する者が増える傾向にある。

《資料36：人文学研究科（博士課程前期課程）修了者の就職率及び進学率》

修了年度	修了者数	進学者	就職者	就職希望者	進学率	就職希望者の就職率
平成24年度	47	12	17	35	25.5%	68.0%
平成25年度	51	17	20	34	33.3%	60.6%
平成26年度	39	13	14	26	35.3%	53.8%
平成27年度	41	11	18	30	26.8%	60.0%
平成28年度	60	20	26	40	33.3%	65.0%
平成29年度	51	14	19	37	27.5%	51.4%

《資料37：人文学研究科修了生（博士課程前期課程）の進路状況》

卒業年度	一般企業	学校教育・ その他教育	国家公務員・ 地方公務員	進学者
平成24年度	10	6	1	12
平成25年度	9	9	2	17
平成26年度	12	1	1	13
平成27年度	9	6	3	11
平成28年度	17	3	6	20
平成29年度	13	5	1	19

人文学研究科博士課程後期課程の修了者の就職先（常勤職）は、《資料38》のようになっている。常勤研究・教育職への就職は昨今の日本において極めて厳しいのが現実であるが、国内外の大学の教員、各種研究機関の研究員、博物館等の学芸員など、相当数の者が専門を生かした職業に就いている。また、《資料39》に示すように日本学術振興会特別研究員（PD）に採用された者も少なくない。また本研究科は、《資料40》のように、各種研究プロジェクトに優秀な大学院生を一定数リサーチアシスタントとして採用しているほか、《資料41》のように、就職難の状況において若手研究者を支援する目的で、標準修業年限内に修了した学生を人文学研究科や文学部の非常勤講師として2年間を限度に採用している。さらに、日本学術振興会の教育改革支援プログラムなどの経費によって学位取得者を学術推進研究員として採用している。このような形で、若手研究者の大学院修了後の研究を支援している。

《資料38：人文学研究科（博士課程後期課程）修了者の進路（常勤職のみ）》

修了年度	大学 教員	各種研究 機関研究 員	博物館・ 美術館等 学芸員	中学校・ 高等学校 教員	日本学術 振興会特 別研究員	本研究科 研究員	その他
平成24年度	6	2	2	1	2	1	5
平成25年度	2	2	0	0	1	3	9
平成26年度	2	1	0	0	1	4	0
平成27年度	0	0	1	0	0	3	0
平成28年度	1	0	0	0	1	3	7
平成28年度	1	0	0	0	1	3	7
平成29年度	1	0	0	0	0	3	8

《資料39：日本学術振興会特別研究員採用数》

年度	PD	DC
平成24年度	3	6
平成25年度	2	6
平成26年度	1	8
平成27年度	3	11
平成28年度	1	10
平成29年度	4	6

《資料40：リサーチアシスタント採用者数》

年度	採用者数	備考
平成24年度	5	本部からの配分のみ
平成25年度	4	本部からの配分のみ
平成26年度	4	本部からの配分のみ
平成27年度	6	本部からの配分のみ
平成28年度	5	本部からの配分のみ
平成29年度	4	本部からの配分のみ

《資料41：標準修業年限内学位論文提出者への支援（新規採用）》

論文提出年度	教育研究分野	職名
平成24年度	言語学 社会学 社会学 地理学	学術推進研究員、非常勤講師 学術推進研究員、非常勤講師 学術推進研究員、非常勤講師 学術推進研究員
平成25年度	言語学 社会学 社会学	学術推進研究員、非常勤講師 学術推進研究員、非常勤講師 学術推進研究員
平成26年度	国文学 日本史	学術研究員、非常勤講師 学術研究員
平成27年度	哲学 哲学 社会学 ヨーロッパ文学 国文学 社会学	非常勤講師 非常勤講師 非常勤講師 非常勤講師 非常勤講師 学術研究員、非常勤講師
平成28年度	社会学 国文学	非常勤講師 学術研究員、非常勤講師
平成29年度	国文学 心理学 社会学 国文学 社会学	非常勤講師 学術研究員 学術研究員 学術研究員、非常勤講師 学術研究員、非常勤講師

## Ⅲ. 研究（文学部・人文学研究科）

### Ⅲ-1. 文学部・人文学研究科の研究目的と特徴

文学部・人文学研究科は、人文学すなわち人間と文化に関わる学問を扱い、哲学・文学・史学・言語学・行動科学などの人文系諸科学を包括している。以下に文学部・人文学研究科の研究目的、組織構成、研究上の特徴について述べる。

#### Ⅲ-1-1. 研究目的

- 1 文学部・人文学研究科は、人類がこれまで蓄積してきた人間・文化及び社会に関する古典的な文献の原理的研究並びにフィールドワークを重視した社会文化の動態的分析を通じ、新たな社会的規範及び文化の形成に寄与する研究を行うという目的を掲げている。
- 2 この研究目的を達成するため、現行の中期目標に「卓越した研究成果を世界に発信するとともに、現代社会が抱える様々な課題にも取り組む」ことを定めている。
- 3 また「既存の学術分野の深化・発展と学際的な分野融合領域の開拓だけではなく、未来社会を見据えた重点分野における先端研究を展開し、さらに、将来これらの研究を担う、優れた若手研究者の養成・輩出に努める。」という中期目標に沿って複数の専門分野から成る教育研究組織を活用した共同研究を行うと共に、「多様で広範なレベルで国際・地域社会との連携を強め、教育研究活動の成果を広く社会に還元する。」という中期目標に沿って専門分野の業績を一般向けに解説した著書等で研究成果を広く社会へ発信する。
- 4 以上をとおして、当該分野での国内外の研究水準を引き上げ、さらに人文学のみならず他の専門分野の研究にも貢献することを目指す。

#### Ⅲ-1-2. 組織構成

これらの目的を実現するため、人文学研究科では《資料1》のような組織構成をとっている。

##### 《資料1：組織構成》

専攻	講座	教育研究分野
文化構造	哲学	哲学、倫理学
	文学	国文学（国語学を含む）、中国・韓国文学、英米文学、ヨーロッパ文学
社会動態	史学	日本史学、東洋史学、西洋史学
	知識システム論	心理学、言語学（英語学を含む）、芸術学
	社会文化論	社会学、美術史学、地理学、文化資源論（連携講座：後期課程のみ）

#### Ⅲ-1-3. 研究上の特徴

- 1 文学部・人文学研究科の研究上の特徴は、人文学の専門分野の諸研究をたえず深化させる一方、その多様な研究方法と研究成果を地域社会の文脈に定位しながら現代日本の諸問題にも適用し、学際的かつ国際的に展開される人文学を構築してきた点にある。
- 2 文学部・人文学研究科は「地域連携センター」「海港都市研究センター」「倫理創成研究プロジェクト」「日本文化社会インスティテュート」の4共同研究組織を設置し、様々な共同教育研究プロジェクトを異なる分野の教員が協力して実施することをとおして、単独の分野のみでは不可能な幅広い視野から人文学の研究を推し進めている。
- 3 平成15年度に「地域連携センター」を設置し、日本史学、美術史学、地理学、社会学等の地域連携に関係する諸分野が協力しながら運営している。同センターの設置目的は、地域の歴史文化に関する研究成果を当該地域社会に還元し、地域の歴史的環境を生かした街づくり、里づくりを支援していくことである。

- 4 海港都市研究、国境を越える人の移動、異文化との交流による社会と文化の変容について研究するための国際的ネットワークを構築するために、平成 17 年に「海港都市研究センター」を設置した。同センターでは、東アジアを中心とした人と文化の接触および新しい文化創造の可能性を検討し、国という分断的な壁を乗り越えて、緩やかな公共空間を構築するための条件とプロセスを解明することを目的としている。
- 5 倫理創成研究プロジェクトを推進して、現代日本で求められている、新しい倫理システムの創成に関する研究を行っている。具体的には「リスク社会の倫理システムの構築」と「多文化共生の倫理システムの構築」の研究をとおして、現代社会の倫理システムを人文学の多様な観点から分析し、科学技術のグローバル化によって特徴づけられる時代に対応した新しい倫理システムの創成を目指している。
- 6 平成 26 年度に共同研究組織を再編し、平成 20 年度に設置された「日本語日本文化教育インスティテュート」を吸収して「日本文化社会インスティテュート」を設置した。日本文化社会インスティテュートは、日本文化、社会に関する教育・研究、および日本における人文学の教育・研究を、国際交流を通じて深化・発展させることを目的とし、人文学研究科のみならず、法学研究科、EU 教育府の先生方の協力を得て、運営されている。日本文化社会インスティテュートは、これまで頭脳循環プロジェクト、日本語日本文化教育プログラム、KOJSP、グローバル人材育成などの関連諸事業を総括するとともに、上記の目的を実現するための、国際的なシンポジウムの企画、新たなプロジェクトなどを実施している。

#### Ⅲ-1-4. 研究をサポートする体制

文学部・人文学研究科は、平成 19 年度に特別研究制度（サバティカル制度）を創設し《資料 2》、教育上・学内行政上、著しい貢献が認められ、当該年度に要職を免れた教員に、半年間、教育・学内行政に関する業務を免除し、研究に専念することを認めている。平成 24 年度から平成 29 年度までの間にこの制度を利用した教員の数《資料 3》のとおりである。

##### 《資料 2：「特別研究制度に関する申合せ」平成 19 年 6 月 13 日制定》

人文学研究科に勤務する教員の資質向上と学部・大学院教育の発展を図るため、研究に専念する機会を与え、今後の教育研究活動に資する基盤を提供する。この機会を与えられた者は、授業及び教授会、各種委員会等の仕事を免除され、前期（4月～9月）もしくは後期（8月～1月）の半年間、国内外において研究に専念する。

##### <申請資格>

次の条件をすべて満たしていること。

1. 申請時において神戸大学大学院人文学研究科に3年以上在勤の者。
2. 過去5年間において、夏期休業期間（8月、9月）と土曜日・日曜日・祝日を除き同一年度で通算40日以上（海外出張、研修（ただし、集中講義は除く。）、休暇をとっていない者。ただし、病気休暇・産前休暇・産後休暇・忌引は上記の期間（40日）に含めないものとする。勤務年数が5年に満たない者は、神戸大学大学院人文学研究科着任以降の期間を対象とする。
3. 所属専修及び所属教育研究分野から教育上支障ないと承認を受けた者。
4. 特別研究期間開始時に定年まで1年以上の在職期間を残す者。

##### <選考規程>

1. 年度ごとに若干名とする。
2. 教育上及び行政事務上の支障がないものと認定された者に限る。
3. 選考委員会において次の条件を記載順に考慮し候補者を選定する。
  - (ア) 優れた研究計画を有する者。
  - (イ) 行政事務において貢献度の高い者。
  - (ウ) 「申請資格」2項の条件を長期間満たしている者。

4. 選考委員会は研究科長，副研究科長及び各講座から1名ずつの委員，教務委員（副），以上9名により構成される。
5. 選考委員会は特別研究期間の前年7月31日に申し込みを締め切り，9月30日までに選考を行った後，その結果を10月1回目の教授会に諮る。

<附則>

1. 特別研究制度を利用しても，その後の授業負担は増えないものとする。
2. この制度が円滑に実施できるよう，必要に応じ，所属専修及び所属教育研究分野に対し非常勤講師枠配分等の措置を講ずるものとする。
3. 特別研究期間中の当該研究者の行政事務（委員会委員等の職務）は他の教員が代替する。
4. 特別研究期間中は国内外での非常勤講師等を禁止する。ただし，選考委員会がやむをえない事情があると認めた場合には，これを許可することがある。
5. 特別研究期間の制度を利用した者は，研究期間終了後直ちに研究報告書を教授会へ提出する。

附 則

この申合せは，平成19年6月13日から施行する。

附 則

この申合せは，平成27年4月22日から施行する。

《資料3：制度を利用した教員数》

平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度
3人	2人	2人	1人	2人	1人

文学部・人文学研究科は人文学の横断的共同研究の活性化のため、平成18年度から「グローバル化時代における価値規範のあり方」を研究主題に、30代の若手教員（15名程度）を中心に、グローバル化時代における価値規範のあり方について、人文学の諸領域を横断する共同研究を継続的に進めている。なお、平成22年度には、このプログラムに対して、昭和報公会からも50万円の奨学寄付金が寄せられている。この取り組みに対して、平成18年度から継続して部局による支援が行われている。平成26年度からは、部局長裁量経費の共同研究組織支援の一環として支援するようになった。以上の施策により、科学研究費研究成果公開促進費に若手研究者が採択されたほか、第11回日本学術振興会賞受賞等、若手教員から数名の受賞者を出している。

## Ⅲ-2. 研究活動の状況

文学部・人文学研究科の教育研究の性格を反映して、研究活動は論文・著書の執筆および研究発表に集中している。また、研究活動にあたっては、科学研究費補助金のみならず、各種の外部資金を積極的に獲得して、研究の水準を向上させている。

### Ⅲ-2-1. 研究実績の状況

本研究科の平成25年度から平成30年度の論文、著書、研究発表の総数は年間平均253.1件である《資料4》。研究業績は多言語で行われ、これは本研究科の特色および研究目的に合致する。研究業績の学術的意義の高さを示すものとして、《資料5》に平成25年度以降の各種学会賞等の受賞者をあげる。

《資料4：研究活動実施状況（平成25～30年度）》

	平成 25年度	平成 26年度	平成 27年度	平成 28年度	平成 29年度	平成 30年度	平均
論文数	93	94	108	109	94	69	94.5
著書数	30	36	51	36	32	52	39.5
研究発表	84	152	120	133	106	120	119.1

《資料5：平成25年度以降の受賞》

年度	受賞者	賞の名称
平成25年度	石井敬子 濱田麻矢 濱田麻矢	第31回村尾育英学術奨励賞 第10回太田勝洪記念中国学術研究賞 2013年度日本中国学会賞
平成26年度	石井敬子 原口剛	第11回日本学術振興会賞 2013年度日本地理学会賞（優秀論文部門）
平成27年度	大塚淳 大坪庸介 大坪庸介 石井敬子	Marjorie Grene Prize (International Society for History, Philosophy, and Social Studies of Biology) 日本社会心理学会・優秀論文賞 神戸大学優秀若手研究賞 平成27年度神戸大学学長表彰
平成28年度	石井敬子	平成28年度日本心理学会国際賞（奨励賞）
平成29年度	野口泰基	科学研究費補助金審査委員表彰 神戸大学優秀若手研究賞
平成30年度	喜多伸一	特別研究員等審査会専門委員（書面担当）表彰

研究活動は国際的な場でも積極的に行われている。平成30年度において、論文は4割以上が海外で発表され、海外で出版された著書が8件、研究発表でも国際会議での発表が4割以上を占める《資料6》。国際会議での基調講演・招待講演の件数も平成30年度に20件あり、国際的な活躍が増加しつつある《資料7》。

《資料6：平成27～30年度研究活動内訳》

年度		平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度
論文数	国内	60	63	51	48
	海外	48	46	43	21
著書数	国内	43	32	28	44
	海外	8	4	4	8
研究発表	国内	75	83	59	64
	海外	45	50	47	56

《資料7：国際会議での招待講演・基調講演件数の推移（平成25～30年度）》

年度	平成 25年度	平成 26年度	平成 27年度	平成 28年度	平成 29年度	平成 30年度
件数	11	47	16	21	19	20



### Ⅲ-2-2. 学内共同研究組織における研究活動

神戸大学では、平成28年4月に文系・理系という枠にとらわれない先端研究・文理融合研究を推進し、新たな学術領域を開拓・展開するために「先端融合研究環」が設置された。人文学研究科の教員も、同研究環の「人文・社会科学系融合研究領域」に配置され、先端的・学際的な文理融合研究を推進しつつある。同研究領域で実施されている9の研究プロジェクトの内、「メタ科学技術研究プロジェクト：方法・倫理・政策の総合的研究」では、松田毅教授がプロジェクトリーダーを務め、他に5名の教員が研究分担者・研究参画者となっており、「人文情報の文理融合研究と地域学創出」では、奥村弘教授がプロジェクトリーダーを務め、他に4名の教員が研究分担者・研究参画者となっている。この他、「現代中国研究拠点」では1名が研究分担者として、「移住・多文化・福祉政策に関する国際的研究拠点の形成」では2名が研究参画者として、研究に携わっている。

#### メタ科学技術研究プロジェクト：方法・倫理・政策の総合的研究

「メタ科学技術研究プロジェクト：方法・倫理・政策の総合的研究」は、知識基盤社会の土台となる、科学技術を焦点に、探究方法と価値規範、政治経済の相互に関連する不可欠の三つの観点、広義の「科学方法論」「科学技術倫理」「科学技術政治経済学」を統合し、科学技術に関する、人文社会科学の共同研究のスタイルを開発・確立することを志している。人文学研究科、法学研究科、経済学研究科、人間発達環境学研究科、国際文化学研究科の教員有志で立ち上げ、開始したが、29年10月からは、これに連動させ、農学研究科、工学研究科、海事科学研究科の教員、京都大学、北海道大学、東京工業大学などの他機関の研究者、熟議による次世代エネルギーに関するワークショップの実践者などを加え、「日本学術振興会：課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業（領域開拓プログラム（研究テーマ公募型））」「責任ある研究とイノベーション」の概念と「社会にとっての科学」の理論的実践的深化」として、「生命・環境技術の社会実装に関する先端融合研究-21世紀型参加のビジョンと試行-」を行っている。平成30年度末までに、3度の国際ワークショップを含む、30回を超えるワークショップを開催した（各回の内容については、第2部Ⅱ-3倫理創成プロジェクトの[6]93～94頁を参照。）特に、国際ワークショップでは、イギリス、ドイツ、カナダ、中国から第一線の研究者を招聘し、先端的な環境・生命技術の社会実装に関する「公共政策を焦点とした人文社会科学の融合研究」を実践した。その成果は、オクスフォード大学ブラバトニック公共政策大学院教授のウルフ教授を編者に加え、神戸大学 social science research series (Springer)の英文論文集として2019年度中に出版予定である。

#### 人文情報の文理融合研究と地域学創出

日本社会の国際化と地域課題の深刻化に対応する人文学の全国的な知の共有のための研究とそれに基づく社会連携は、現在重要な課題となっている。「人文情報の文理融合研究と地域学創出」では、この課題を深め、新たな人文学のあり方を模索するために、阪神・淡路大震災以来、この課題に対して持続的な研究を進める人文学研究科を拠点として、大学共同利用機関法人人間文化研究機構と協力し、人文系学術情報の全国的な共有化モデル形成とそれを基礎とした地域学の創出を研究目的とする。そのため人文学研究科は、2016年度に国立歴史民俗博物館と「総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築」を相互に協力して推進することで合意し協定を結んだ。

上記の協定を発展させる形で、2018年1月に、神戸大学と東北大学と人間文化研究機構（基盤機関：国立歴史民俗博物館）との三者で、「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」（略称：歴史資料保全NW事業）についての連携協定が締結された。この事業は、歴史文化資料保全およびそのための全国的な相互支援体制の構築や、資料保全を担う人材の育成・教育プログラムの研究、地域の歴史文化の継承にかかわる大学の機能強化を主な目的としている。本センターは、中心拠点の一つである神戸大学大学院人文学研究科が行う事業の主導機関である。

本年度は、全国的な広域ネットワーク形成にかかわる協議会・シンポジウム等を以下の通り行った。

- ① 9月24日 歴史文化資料保全西日本大学協議会 於：新大阪丸ビル新館（主催：神戸大学大学院人文学研究科、人間文化研究機構、協力：科学研究費基盤研究（S）「災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立—東日本大震災を踏まえて—」（研究代表者：奥村弘）研究グループ）
- ② 大阪北部地震・西日本豪雨の対応・現状および南海トラフ地震への対応・広域支援において西日本の各大学関係者と協議を行った。参加者 18 機関 25 人。
- ③ 12月9日 地域歴史文化大学フォーラム 於：神戸大学瀧川記念学術交流会館（主催：人間文化研究機構（基盤機関：国立歴史民俗博物館）、神戸大学大学院人文学研究科、東北大学災害科学国際研究所、共催：科学研究費基盤研究S「災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立—東日本大震災を踏まえて—」研究グループ（研究代表者・奥村弘）、神戸大学地域連携推進室、国立歴史民俗博物館メタ資料学研究センター）。本フォーラムでは、歴史資料保全NW事業における各大学の目的や課題を共有し、ネットワークのあり方について議論した。また、奥村弘が報告「西日本を中心とする神戸大学の本年度の活動と今後の展望」を行い、本センターの地域連携事業をふまえた広域ネットワーク形成について述べた。参加者 26 機関 49 人。

またNW事業として、2月3日に開催された神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター主催の第17回地域連携協議会「地域歴史遺産の活用を問い直す—地域資料館の可能性」に共催した。

資料保全を担う人材の育成については、神戸大学文学部古文書合宿（9月13～15日：於神戸大学篠山フィールドステーション、2月17～18日：於三木市旧玉置家住宅）において、学生への指導および古文書整理作業を行った。

### Ⅲ-3. 競争的外部資金の獲得状況

競争的外部資金の獲得状況を《資料8》に示す。平成30年度には122,472千円を獲得している。

《資料8：競争的外部資金の獲得状況(平成24～30年度)》

年度	科研費	共同研究	受託研究	寄附金	その他 競争的資金	合計
平成24年度	72,337	43,633	8,884	7,340	1,479	133,673
平成25年度	67,700	24,111	8,884	2,850	1,200	104,745
平成26年度	76,200	24,111	16,992	1,500	16,298	135,101
平成27年度	84,390	8,088	16,033	19,640	31,700	159,851
平成28年度	86,635	7,160	18,016	2,800	23,878	138,489
平成29年度	84,218	7,054	22,673	3,045	7,189	124,179
平成30年度	80,463	7,931	11,769	944	21,365	122,472

金額（千円）

#### Ⅲ-3-1. 科学研究費助成事業

科学研究費助成事業の申請件数が年間平均46.8件である。平成24年度から平成30年度までの獲得件数は平均47.7件(新規14.6件)で獲得額は平均78,849千円である。申請件数は平成24年度の34件に比べ平成25年度以降50件近くを維持しており、科研費獲得に積極的になったと言える《資料9》。また平成26年度には基盤研究（S）が1件新規採択された。

《資料9：科学研究費助成事業への申請・獲得件数、獲得額に関するデータ》

年度	平成 24年度	平成 25年度	平成 26年度	平成 27年度	平成 28年度	平成 29年度	平成 30年度	平均
申請件数	34	56	53	49	49	40	47	46.8
獲得件数 (新規)	49 (12)	45 (13)	43 (17)	51 (19)	50 (14)	49 (16)	47 (11)	47.7 (14.6)
金額(千円)	72,337	67,700	76,200	84,390	86,635	84,218	80,464	78,849

Ⅲ-3-2. 共同研究、受託研究費の状況

平成24年度から平成30年度の共同研究、受託研究の推移を《資料10》に示す。

《資料10：共同研究、受託研究の実施件数及び金額》

年度	平成 24年度	平成 25年度	平成 26年度	平成 27年度	平成 28年度	平成 29年度	平成 30年度
共同研究件数	6	2	2	3	1	3	7
金額(千円)	43,633	24,111	24,111	8,088	7,160	7,054	7,931
受託研究件数	7	7	9	6	11	15	8
金額(千円)	8,884	8,884	16,992	16,033	18,016	22,673	11,769

共同研究、その他競争的資金として学術機関や省庁からの研究費は主に日本学術振興会から受入れている。東日本大震災を契機に設立された東北大学災害科学国際研究所や国立国語研究所等からの受入れ実績もある。《資料11》《資料12》。

《資料11：文部科学省・日本学術振興会等からの大学改革等補助金（共同研究）》

相手方	期 間	題 目	金額 (千円)	
			上段直接経費	下段間接経費
文部科学省	平成20～ 22年度	大学院教育改革プログラム (古典力と対話力を核とする人文学教育—学域横断的教育システムに基づくフュージョンプログラムの開発)	77,871	5,316
	平成22～ 24年度	国際共同に基づく日本研究推進事業 (日本サブカルチャー研究の世界的展開)	17,986	4,269
	平成24～ 27年度	国際化拠点整備事業費補助金 (グローバル人材育成推進事業)	31,710	0 (文学部分)
	平成28～ 29年度	国立大学改革強化推進補助金	14,000	0
	平成 30年度	大学改革推進等補助金	5,500	0

日本学術振興会	平成20～24年度	若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム[ITP] (東アジアの共生社会構築のための多極的教育研究プログラム)	68,775 0
	平成21～24年度	若手研究者海外派遣事業・組織的な若手研究者等海外派遣プログラム (国際連携プラットフォームによる東アジアの未来を担う若手人文研究者等の育成)	46,200 0
	平成25～27年度	若手研究者戦略的海外派遣事業補助金 (頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム事業)	55,212 0
	平成27年度	JSPS サマー・プログラム	159 0
	平成30年度	JSPS サマー・プログラム	159 0
国際交流基金	平成24年度	国際交流基金・知的交流会議助成プログラム 「世界マンガ・アニメネットワーク国際会議」	2,140 0
	平成29年度	海外日本語教育インターン (大学連携日本語パートナーズ) 派遣プログラム	55 0
	平成30年度	海外日本語教育インターン (大学連携日本語パートナーズ) 派遣プログラム	109 0
神戸市	平成24年度	中国人材育成事業研修生受入 「古代日本における仏教と神道の展開についての諸問題」 (方海燕)	600 0
直接経費合計			320,476
間接経費合計			9,585

《資料12：学術機関・省庁からの受入実績（その他競争的外部資金）》

相手方	期 間	題 目	金額 (千円)	
			上段直接経費	下段間接経費
日本学術振興会	平成21～23年度	社会学理論分野に関する学術動向の調査研究	5,991	185
	平成20～22年度	平成20年度二国間交流事業共同研究・セミナー「日仏二社会の珪肺・アスベスト疾患—空間的マッピングと人文学的研究」	6,000	0
	平成26～30年度	社会心理学・神経科学・内分泌学の連携による文化差の遺伝的基盤の解明	13,850	0
	平成29～32年度	生命・環境技術の社会実装に関する先端融合研究 —21世紀型参加のビジョンと試行—	3,655	680
	平成30年度	平成30年度学術研究動向調査研究	1,200	360
科学技術振興機構	平成26～29年度	多世代視覚障害者移動支援システムにおけるAR・VR技術の社会実装	15,275	4,583
海南大学日本語学部	平成24年度	中国人材育成事業研修生受入 「古代日本における仏教と神道の展開についての諸問題」 (方海燕)	279	0

東北大学災害科学国際研究所	平成 24～25 年度	東日本大震災の震災資料の所在調査および収集・保存の手法等に関する検討—宮城県岩沼市をフィールドとして—	2,400 0
大学共同利用機関法人人間文化研究機構	平成 30 年度	歴史文化資料保全の大学・共同利用期間ネットワーク事業	11,000 0
国立国語研究所	平成 26～30 年度	統辞・意味解析情報の付与	2,497 0
津田塾大学	平成 26 年度	研修員受入	229 0
大阪経済大学	平成 27 年度	研修員受入	115 0
立命館大学	平成 27 年度	研修員受入	57 0
九州産業大学	平成 28 年度	研修員受入	115 0
大谷大学	平成 30 年度	研修員受入	115 0
直接経費合計			62,778
間接経費合計			5,808

平成 18 年度以降に地方自治体・民間企業との間で実施した受託研究は《資料 13》のとおりである。特に日本史学教育研究分野で自治体からの研究費等の受入れが顕著である。

《資料 13：地方自治体・民間からの受入実績（受託研究）》

相手方	期 間	題 目	金額（千円）	
			上段直接経費	下段間接経費
自治体関係	三田市	平成 26 年度	旧三田藩主九鬼家資料の総合調査	230 1
	(財)神戸都市問題研究所 (神戸市文書館)	平成 18～29 年度	歴史資料の公開に関する研究	16,765 1,677
	丹波市	平成 22 年度	丹波市内古文書等歴史資料調査	7,523 0
	加西市	平成 20～22 年度	鶴野飛行場関係歴史遺産基礎調査	1,535 0
	福崎町	平成 22～23 年度	①福崎町の地域歴史遺産掘り起こし ②大庄屋三木家住宅の活用案および改修	2,850 150
	小野市	平成 22～26 年度	小野市下東条地区地域歴史調査	1,500 0
	養父市	平成 22 年度	大規模史料群（明延鉦山資料）の詳細調査	496 0

明石市	平成23年度	明石藩家老関係資料目録作成業務委託	1,400 0
朝来市	平成22～23年度	石見銀山と生野銀山との共同研究に関する中近世史の調査研究および歴史資料の保存活用についての研究	600 0
灘区役所	平成23年度	「麻耶道のとおる村の歴史」関係資料調査および講演会開催事業	600 0
朝来市	平成24～26年度	朝来市枚田家文書を中心とした史料調査研究	1,500 0
明石市	平成24～25年度	明石藩士黒田家関連資料調査・補修	3,100 0
明石市	平成26～30年度	明石藩関連資料調査・公開業務	7,900 0
明石市	平成26～30年度	明石市における地域史料の調査研究業務委託	7,600 0
明石市	平成29～30年度	横河家関連資料調査・公開業務委託	2,000 0
福崎町	平成24～30年度	福崎町の地域歴史遺産掘り起こしおよび大庄屋三木家住宅活用案の作成等	10,500 0
福崎町	平成29～30年度	三木家住宅民俗資料調査	2,450 0
丹波市	平成24～30年度	兵庫県丹波市における地域資源としての歴史文化遺産（古文書等）の調査および成果の刊行	13,230 0
三木市	平成26～30年度	三木市史編さん事業	39,100 0
小野市	平成27～28年度	小野市市場地区地域歴史調査及び地域新聞「新東播」データベース化の研究	600 0
小野市	平成29～30年度	小野市小野地区の歴史調査及び伊藤家文書を活用した小野市の幕末から明治期の歴史の調査研究	600 0
朝来市	平成27～30年度	朝来市石川家文書の史料調査研究並びに山田家文書調査に係る指導助言	2,000 0
西脇市	平成27年度	西脇小学校校舎改修基本計画・基本設計等業	6,514 240
加西市	平成27年度	青野原俘虜収容所調査委託	1,204 0
神戸市	平成27～30年度	神戸村文書の解読（翻刻）に関する研究	2,439 243
三田市	平成27～30年度	旧三田藩主九鬼家資料の総合調査	810 81
福崎町	平成27年度	辻川界限ジオラマ模型制作	100 0
加西市	平成28年度	冊子『加西に捕虜がいた頃』ドイツ語翻訳委託	691 0
加西市	平成29～30年度	青野原俘虜収容所調査委託	3,114 0

	加西市	平成29年度	小谷区の文化遺産調査研究委託	1,086 0
	神戸市	平成30年度	歴史資料の公開に関する研究	1,494 149
その他	日本電信電話株式会社コミュニケーション科学基礎研究所	平成26年度	視線一致知覚範囲に関する個体密度および文化差の基礎検討	180 20
	International Visegrad Fund	平成29～30年度	Visegrad University Studies Grant	1,494 0
直接経費合計				143,205
間接経費合計				2,562

### Ⅲ-3-3. 奨学寄附金の受け入れ

人文学研究科・文学部が財団・団体からの受け入れた奨学寄附金に関する平成24年度から平成29年度の金額・内容は《資料14》のとおりであり、平成24年度から平成29年度の受け入れの推移は、《資料15》のとおりである。

《資料14：財団・団体からの奨学寄付金・助成金の受入件数及び金額》

年度	助成団体名等	寄付金名称	寄附目的	寄附金額
平成24年度	公益財団法人稲盛財団	稲盛財団研究助成金	ポスト・モンゴル期西アジアの国際関係に関する基礎的研究：マムルーク朝・ティムール朝関係を中心に	1,000,000
	(財)三菱財団	三菱財団助成金	コータン仏教史の好古・美術史学的研究に対する研究助成	350,000
	日本心理学会	日本心理学会「国際学会シンポジウム企画補助金」	第30回国際心理学会議において、シンポジウム“Cultural/linguistic specifications of cognitive functions for communication”を開催するため	720,000
	(財)三菱財団	三菱財団助成金	「鉱山地域社会史確立のための基礎的研究—生野銀山石川家の分析を中心に—」に対する研究助成	800,000
	公益財団法人JFE21世紀財団	JFE21世紀財団アジア歴史研究助成	「近世ユーラシア大陸の威信言語研究にもとづく、「東洋学」の再構築」に関する研究助成	2,140,000
	公益財団法人俱進会	科学技術社会論・柿内賢信記念賞研究助成	放射性廃棄物の軍事利用である劣化ウラン弾を巡る科学的・政治的・法的問題の再検討	400,000
	特例民法法人上廣倫理財団	上廣倫理財団研究助成金	学術研究のため	600,000
	公益財団法人 中山隼雄科学技術文化財団	中山財団研究助成金	触地雷上の宝探しゲームによる中途失明者の自律移動支援用具に対する親和性の向上	1,330,000

平成 25 年度	公益財団法人村田学術振興財団	村田学術振興財団研究助成金	集団間葛藤から和解へ：謝罪と許しの心理メカリズムに関する実証研究に対する研究助成	1,200,000
	メトロポリタン東洋美術研究センター	メトロポリタン東洋美術研究センター助成金	「江戸時代後期から明治時代初期の光琳蒔絵に関する考察」研究にかかる研究助成	250,000
	公益財団法人上廣倫理財団	上廣倫理財団研究助成金	学術研究のため	600,000
	公益財団法人中山隼雄科学技術文化財団	中山財団研究助成金	人文学研究に対する助成	800,000
平成 26 年度	クリタ水・環境科学振興財団	クリタ水・環境科学振興財団助成金	研究への助成	600,000
	株式会社ユーハイム 有限会社ジャマンホーム カーエッチポイントグループ 株式会社ケーニヒス クローネ	「第一次世界大戦開戦 100年と青野原捕虜収 容所」奨学寄附金	「第一次世界大戦開戦100年と青野原捕虜収容所」に対する研究助成	300,000
	一般財団法人地域地盤環境研究所	遺跡分布情報の整理	先史時代の遺跡分布情報への助成	300,000
	出光文化福祉財団調査研究事業助成	出光文化福祉財団調査研究事業助成	後白河院政期における天平絵画及び唐宋絵画の受容に関する調査研究に対する研究助成	300,000
平成 27 年度	マイアミ大学教授 Michael McCullough	ヒトと救しの進化心理学に関する研究助成	マイアミ大学の研究責任者 Michael McCullough からの研究分担のため	17,440,164
	公益財団法人鹿島美術財団	鹿島美術財団美術に関する調査研究の助成	後白河院政期における天平絵画及び唐宋絵画の受容に関する調査研究に対する研究助成	540,000
	公益財団法人村田学術振興財団	公益財団法人村田学術振興財団 助成金	カリフ制の歴史と歴史叙述：マムルーク朝時代を中心に	1,110,000
	出光文化福祉財団調査研究事業助成	出光文化福祉財団調査研究事業助成	「地獄草子並びに関連諸作品の調査・研究」に対する研究助成	550,000
平成 28 年度	公益財団法人仏教美術研究上野記念財団	公益財団法人仏教美術研究上野記念財団若手研究者研究奨励金	研究助成	100,000
	公益財団法人三菱財団	公益財団法人三菱財団助成金	ムガル帝国時代南アジア社会の歴史文献学的研究：『アーイーニ・アクバリ』を中心として	1,900,000
	公益財団法人出光文化福祉財団	公益財団法人出光文化福祉財団調査研究事業助成	「第二次世界大戦前後の欧米における東洋美術展覧会に関する研究－中国と日本を中心に」に対する研究助成	400,000
	一般社団法人信託協会	一般社団法人信託協会助成金	東アラブ圏におけるワクフ（財産信託）制度史の古文書学的研究	400,000
平成 29 年	一般社団法人信託協会	一般社団法人信託協会助成金	東アラブ圏におけるワクフ（財産信託）制度史の古文書学的研究【追加配分】	250,000
	三井住友信託銀行	公益信託 福原心理教育研究振興基金	研究助成のため	600,000



度	公益財団法人 JFE21 世紀財団	公益財団法人 JFE21 世紀財団アジア歴史研究助成	ポスト・モンゴル期アラビア語歴史叙述の地域性と普遍性	1,500,000
	国立歴史民俗博物館	国立歴史民俗博物館総合資料学奨励研究（公募型）	1689年「堺大絵図」に盛られた土地区画と戦前の比較 —空中写真を検討材料にして—	695,000
平成30年度	国立歴史民俗博物館	国立歴史民俗博物館総合資料学奨励研究（公募型）	1689年『堺大絵図』に関する空間情報の総合化への試み —近世絵図、近代地籍図・空中写真を中心に—	698,000
	室戸ユネスコ世界ジオパーク室戸ジオパーク推進協議会	2018年度室戸ユネスコ世界ジオパーク学術研究助成金	室戸ジオパークにおける集落立地から探る人々の地震への対応—特に戦国末期の「長宗我部地検帳」に注目して—	245,873

《資料15：奨学寄付金・助成金の推移》

	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度
件数	8	4	4	4	4	4	2
金額（千円）	7,340	2,850	1,500	19,640	2,800	3,045	944

## 第2部

### I. 外部資金による教育研究プログラム等の活動

#### I-1. 運営費交付金機能強化経費：実践型グローバル人材育成事業

##### 「日本語教育・日本研究を中心とした実践型グローバル人材育成事業」

#### [1]本事業について

平成 29 年度概算要求において、機能強化経費（機能強化促進分）として文学部・人文学研究科にも予算が配分され、平成 29 年度から 33 年度まで「日本語教育・日本研究を中心とした実践型グローバル人材育成事業」を実施することになった。「グローバル人材育成」は神戸大学の機能強化の柱のひとつであるが、文学部・人文学研究科は、「神戸オックスフォード日本学プログラム(KOJSP)」（オックスフォード大学東洋学部日本語専攻の2年生全員が文学部で1年間学ぶ、ユニット受け入れ型のプログラム）や、日本学術振興会「頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム」（以下、「頭脳循環プログラム」と略記する）に採択された「国際共同による日本研究の革新—海外の日本研究機関との連携による若手研究者養成」事業（25年度～27年度）などによって挙げた成果をもとに、日本語教育と日本研究に関わる部分で大学の機能強化に貢献することが求められている。

#### [2]平成 30 年度の取り組み

##### (1)日本語教育

##### ①「神戸オックスフォード日本学プログラム(KOJSP)」の充実

- ・KOJSP 生（第 6 期生が平成 30 年 8 月に修了、10 月に第 7 期生が来日）に対してきめ細かいケアを行うため、専任の助教を 1 名雇用した。
- ・平成 31 年 3 月に KOJSP アドバイザリーボード委員の教員 2 名がオックスフォード大学東洋学部を訪問し、教育内容について意見交換を行い、さらに 31 年 10 月から受け入れ予定の第 8 期生について情報を得た。
- ・平成 30 年 7 月 25 日にオックスフォード大学東洋学部の萩原順子上級日本語講師を招聘し、「オックスフォード大学日本学における“神戸オックスフォード日本学プログラム”の役割と意義」を講演内容とする FD を実施した。

##### ②留学生向けアカデミック・ライティング授業の開設・運営

- ・留学生向け日本語アカデミック・ライティングの授業と、チュートリアル形式で日本語論文・レポート作成の支援が行えるような日本人学生を養成するための授業として平成 29 年度に新設した下記の科目を平成 30 年度も引き続き開講した。いずれも正式には大学院博士課程前期課程の学生を対象とした授業だが、実際には学部生や博士課程後期課程の学生、研究生等も多数参加した。

授業科目	単位数
日本語アカデミック・ライティング	2 単位
日本語学術文章の作成と指導	2 単位

##### ③「日本語日本文化教育プログラム」（主に博士課程前期課程の学生を対象として、海外の教育機関等で日本語日本文化教育を担う人材を養成するための教育プログラム）の充実

- ・平成 29 年度に追加開講した下記の 2 科目を平成 30 年度も引き続き開講し、プログラムの充実を図った。

授業科目	単位数
日本語教育学	2 単位
日本語教育内容論	2 単位

- ・平成 30 年度に「日本語日本文化教育プログラム」の必要単位を満たし、修了の認定を受けたものは、人文学研究科博士課程前期課程の学生 6 名であった。

#### ④日本語日本文化教育に関する海外インターンシップの実施

- 人文学研究科では「日本語日本文化教育プログラム」修了者（あるいは修了見込み者）に海外教育機関でのインターンシップの機会を与え、真に国際通用性のあるグローバル人材を養成することを目標として、平成22年度以降、日本学術振興会「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」と「頭脳循環プログラム」によって中・長期（約2ヵ月～1年）に渡って毎年1名の大学院生もしくはPDをハンブルク大学（ドイツ）に送り出してきた。27年度以降は学内予算を得て、オックスフォード大学（イギリス）、トリーア大学（ドイツ）、ディミトリア・カンテミル・キリスト教大学（ルーマニア）、北京外国語大学（中国）にも各1名、短期間（2週間～1ヵ月）ないし長期（1 Semester）派遣することが可能になり、毎年4～5名の大学院生がインターンシップを行っている。
- 平成30年度は学内予算、国際交流基金からの補助と機能強化経費を組み合わせ、以下のような形で大学院生4名、学部学生1名を海外大学に派遣した。なお、ハンブルク大学及びディミトリア・カンテミル・キリスト教大学でのインターンシップに関しては、両受け入れ大学が寮費を全額負担してくれている。

派遣期間	派遣者	派遣先
平成30年10月1日～ 平成31年3月1日	人文学研究科博士課程後期課程1年	ハンブルク大学
平成30年11月2日～ 平成30年11月27日	国際文化学研究所博士課程前期課程1年	トリーア大学
平成30年11月3日～ 平成30年11月28日	文学部3年	ディミトリア・カンテミル・キリスト教大学
平成31年2月17日～ 平成31年3月9日	人文学研究科博士課程前期課程2年	オックスフォード大学
平成31年3月5日～ 平成31年3月27日	国際文化学研究所博士課程前期課程1年	北京外国語大学

#### ⑤「現代日本プログラム」（協定校からの交換留学生を対象として、英語で行われる日本の文化・社会・科学技術に関する全学的な教育プログラム）の充実

- さまざまな形で来日中の海外大学の研究者に、文学部・人文学研究科が提供している科目のうち、オムニバス授業になっているものに参加してもらう形で、「現代日本プログラム」の充実を図った。多様性に富む授業となり、履修生には非常に好評だった。30年度にオムニバス授業を担当した海外の研究者（機能強化経費が財源となっているものに限る）は以下のとおり。

氏名	所属
Johanna Hueck 助教	ニコラウス・クザーヌス大学（ドイツ）
Hsiung Tsunghuei 准教授	国立台湾大学（台湾）
Sauvagnargues Anne 教授	パリ第10大学（フランス）
Lyle de Souza	京都大学（日本）
Zdzislaw Mach 教授	ヤゲヴォ大学（ポーランド）

- 「グローバル人文学プログラム」（文科省「グローバル人材育成推進事業」（平成24年採択）により文学部・人文学研究科で展開している教育プログラム）の科目として、以下の2科目を機能強化経費により開講した。

授業科目	単位数
グローバル・アクティブ・ラーニング in 広島	1単位

- 「グローバル・アクティブ・ラーニング in 広島」は従来「神戸オックスフォード日本学プログラム」の一環としても開講されてきたもので、本年度は平成30年11月9日（金）-11日（日）に実施した。この授業には、オックスフォード大生10名を含む世界各国からの留学生27名に加え、日本人学生6名の計33名が参加した。

## (2) 日本研究

### ① 「頭脳循環プログラム」型（海外の研究者と共同研究を行いながら、その中で大学院生を含む若手研究者を育てていく方式）の国際的・学際的な日本研究の推進

- 平成30年4月2日・3日にトリーア大学(ドイツ)、クザーヌス大学(ドイツ)、オルデンブルク大学(ドイツ)、フリブール大学(スイス)、国立台湾大学(台湾)から研究者8名を招聘し、国際ワークショップ「Humanities in a Changing World: New Ways, Globalization, Responsibility」を開催した。このワークショップに人文学研究科からは教員3名及び大学院生を含む若手研究者2名が参加し、研究報告を行った。
- 平成30年7月7日に北京外国語大学で開催された「第3回北京外国語大学・神戸大学国際共同研究拠点シンポジウム」に人文学研究科から教員3名、博士課程後期課程学生2名、博士課程前期課程学生1名が参加した。このシンポジウムは「『一帯一路』構築と日中大学間協力」をテーマで開かれたもので、大学院生3名は学生セッションにおいて、主に日本学の観点から研究発表を行った。
- 平成30年11月9日・10日、北京大学において神戸大学・北京大学・復旦大学の三大学共同人文フォーラム「文学・言語・歴史」を開催した。このフォーラムでは、中国と日本の文学、言語学、歴史に関する7つのセッションで22の報告が行われた。神戸大学からは教員5名と博士課程後期課程の大学院生3名が参加し、研究発表を行った。
- 平成30年10月24日に開催された「神戸大学ブリュッセルオフィス第9回シンポジウム」"Smart Cities, Secure Societies: Breakthroughs in EU and Japan Research Cooperation"に人文学研究科から5名の教員が参加し、「頭脳循環プログラム」で共同研究・教育を行ったヴェネチア大学(イタリア)のToshio Miyake教授、人文学研究科と協定を結び研究・教育で連携のあるトリーア大学(ドイツ)のAndreas Regelsberger教授、パリ第10大学(フランス)のAnne Sauvagnargues教授らと同一のセッションで研究発表を行い、研究交流を進めた。
- 平成31年3月2日・3日に神戸大学出光佐三記念六甲台講堂及び大学院人文学研究科において神戸大学文学部・大学院人文学研究科創立70周年記念事業キックオフシンポジウムとして、国際シンポジウム「『MANGA』—人文学研究の新展開—」を開催した。このシンポジウムは、今や日本文化の最も重要なコンテンツの一つであり、大きな国際的な影響力を持つものではあるが、研究対象として扱うことが難しいマンガを、美術史、哲学、文学、映像学など人文学研究の多様な視点から捉え直そうとするものである。プログラムを次に示す。

2019年3月2日(土)14:00~17:00 神戸大学出光佐三記念六甲台講堂

基調講演 青木保(国立新美術館館長・元文化庁長官)

竹宮恵子(京都精華大学元学長・国際マンガ研究センター長)

講演 王向華(香港大学現代言語文化部准教授)

油井清光(神戸大学大学院人文学研究科教授)

パネルディスカッション 青木保/竹宮恵子/王向華/油井清光

司会：前川修(神戸大学大学院人文学研究科教授)

2019年3月3日(日)10:00~16:30 神戸大学大学院人文学研究科A棟1階

#### 【午前の部】

セッション1「日本美術史の中のマンガ・アニメ」

セッション2「戦後日本のマンガ・アニメにおけるアジア表象」

#### 【午後の部】

セッション3「マンガとしての映像/映像としてのマンガ」

セッション4「機能マンガの可能性：日本とイタリアのアスベストマンガから考える」

このシンポジウムでは、人文学研究科博士課程後期課程、前期課程の大学院生、日本学術振興会PDあわせて5名の若手研究者が研究発表を行った。なお、令和2年3月に神戸大学出版会からこのシンポジウムの内容を発展させた論文集を刊行するべく企画が進行している。

- 平成31年3月16日に神戸大学人文学研究科で北京外国語大学北京日本学研究センターと神戸大学大学院人文学研究科の合同ワークショップ「日本文学と日本語・日本語教育」を開催した。本ワークショップは、北京外国語大学・神戸大学国際共同研究拠点シンポジウムの開催や日本語教育インターンシップの実施等で研究・教育の強力な連携が進められている北京外国語大学と共同研究を行い、若手研究者を育成することを目指したものである。このワークショップでは、人文学研究科の博士課程後期課程、前期課程の学生及び研究生のあわせて6名が研究発表を行った。

### ②ユニット交流(海外の大学との、専修等ユニット単位での学生・教員の学術交流)の促進、海外大学の日本学科との学術交流

- 平成31年3月5日パリ第10大学ナンテール(フランス)において、ワークショップ「日本とフランスにおける現代理論：ナンテール・神戸・大阪」を開催し、パリ第10大学ナンテールの教員・学生と研究教育交流を行った。開催にあたってはアンヌ・ソヴァニャルグ教授(美学・芸術哲学)とエリー・デューリング准教授(哲学・美学)の協力を得て、大橋完太郎准教授(芸術学)と嘉指信雄教授(倫理学)、白鳥義彦教授(社会学)が企画・運営にあたった。ワークショップでは、人文学研究科博士後期課程の学生2名、博士前期課程の学生1名、学部学生1名の計4名が、それぞれ日本における芸術文化の状況、日本の科学哲学、および日本の社会理論を題材とした研究発表を行い、パリ第10大学ナンテールの教員から直接研究指導を受ける教育的機会を得た。パリ第10大学からは博士後期課程学生2名が研究発表を行い、他にも同校の学生3名がディスカッサントとして参加し、双方の研究発表について学生同士で議論する機会をもった。

### (3)人文学研究科内公募事業

- 平成30年度の新たな試みとして、本機能強化経費による事業の公募を人文学研究科の教員を対象に行い、厳正な審査の結果4件の事業が採択された。その実施結果の詳細は次のとおりである。
- 「近代日本思想を基軸とした比較研究の推進—東アジア応用倫理会議及び世界哲学会議を中心とした研究交流プロジェクト—」  
平成30年8月13日～20日に北京において開催された「第24回世界哲学会議」に博士課程後期課程の大学院生6名と教員1名が参加し、日本思想を中心テーマとする次の2つの共同パネル発表を英語で行った。  
パネル1：Philosophy for Literary Criticism, Education, and Environment: Reconsideration at the Crossroads of Japanese, Chinese and Western Thought(文芸批評、教育、環境の哲学日本・中国・西洋思想の交差点での再検討)  
パネル2：Transformation of Public Space in Contemporary World(現代世界における「公的空間」の変容)
- 「視覚障害者の化粧行動に関する研究交流による実践的グローバル人材育成—神戸市と天津市—」  
視覚障害者が自分の手で行うブラインドメイクという化粧技法に関し、一般社団法人日本ケアメイク協会が平成30年10月10日に中国天津市で講演会に神戸市・神戸市立盲学校・中国国立天津市視力障害学校と協力し、日本と中国の視覚障害者の交流会を行った。この講演会と交流会には人文学研究科博士課程前期課程の学生も参加し日本語と中国語で講演を行った。この講演会・交流会に参加した大連学国語大学の邴勝教授とその指導学生を神戸大学に招聘し、平成31年2月18日開催の心理学分野の卒業論文・修士論文最終試験に陪席していただいた。これらの活動により日本と中国の交流を深めるとともに、両国の学生に対して実践的な人材育成教育を行った。
- 「現代日本プログラムと留学生・日本人学生混合クラスの充実によるグローバル人材の育成」

ヤゲウォ大学（ポーランド）国際関係論・政治学部の学部長である Z・マッハ教授を招へいし、人文学研究科で開講する「現代日本プログラム」で講義しその充実を図ると共に、人文学研究科において留学生と日本人学生とが混合で受講するクラスで講義を行った。

・「海港都市における映像文化の現在」シンポジウム

平成 31 年 3 月 30 日・31 日に厦門大学で開かれた第 9 回世界海洋文化研究所協議会（WCMCI）において、東アジア海港都市の歴史と記憶が、映像によってどのように表現され、受容されているのかを中心テーマにしたセッションを設け、北京大学・韓国海洋大学（釜山）・中央研究院（台北）・上海社会科学院・長崎大学・中国海洋大学（青島）・木浦大学からの教員及び学生と共に、「映像文化における他者の表象」を中心に研究交流を行った。人文学研究科からは濱田麻矢教授と 2 名の博士課程後期課程の学生が発表を行った。

## I-2. 科学研究費補助金基盤研究（S）（研究代表者：奥村弘、課題番号：26220403） 「災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立—東日本大震災を踏まえて—」

2014 年度からスタートした上記テーマの新規科学研究は、2013 年度までの科学研究「大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした地域歴史資料学の構築」の成果を踏まえ、東日本大震災後の新たな課題（津波、放射能被害など）及び海溝型地震への対応をさらに進め、「災害文化」形成に資する地域歴史資料学を確立することを目的としている。

2017 年 12 月には日本学術振興会の研究進捗評価（中間評価）をうけ、人文科学系の 7 件の評価対象中、唯一 A+ 評価を受けるなど、着実に研究成果を積み重ねてきた。

最終年度となる 2018 年度は、2019 年 2 月 4 日に第 14 回地域歴史資料学研究会（第 8 回被災地区図書館との震災資料情報交換会、於神戸大学社会系図書館）を開催した。また、2018 年 4 月 8 日に科研グループ研究会（於神戸大学文学部）、12 月 8 日に科研グループ総括研究会（於三宮研修センター）を開催した。

また、本年度は本科研グループとして次のシンポジウム等に共催した。共催としては、①ふくしま史料ネットシンポジウム「ふくしまの未来へつなぐ、伝えるⅡ」（4 月 21 日、於郡山市民プラザ）、②フォーラム「福島震災遺産と震災アーカイブズの構築」（4 月 30 日、於筑波大学東京キャンパス文京校舎）、③歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業「歴史文化資料保全西日本大学協議会」（9 月 24 日、新大阪丸ビル新館）、④第 5 回全国史料ネット研究交流集会（11 月 17～18 日、於新潟大学中央図書館ライブラリーホール）、⑤地域歴史文化大学フォーラム「大学間連携の展望—歴史文化資料保全 NW 事業の役割—」（12 月 9 日、於神戸大学瀧川記念学術交流会館）、⑥第 17 回歴史文化をめぐる地域連携協議会（2 月 3 日、於神戸大学瀧川記念学術交流会館）。

被災資料・歴史資料の調査保全としては、歴史資料ネットワークなどと協力し、西日本豪雨災害の被災資料保全に対応したほか、大阪北部地震及び台風 21 号被害の情報収集と調査保全をおこなった。また、東日本大震災で津波被害をうけた岩手県大船渡市 S 家資料の整理作業に協力した。前年度より愛媛資料ネットと協力して進めている伊方原発関係資料の保存・整理作業については、本年度は人間文化研究機構の歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業とも共同して実施した。

平成 31 年度からは、本科研の事業・研究成果をまとめた書籍を刊行すべく、準備作業を進めている。

また、2009 年度からの基盤研究（S）「大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした地域歴史資料学の構築」（研究代表者：奥村弘、課題番号 21222002）、および 2014 年度からの本科研での成果が高く評価され、2019 年度には科学研究費事業特別推進研究「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」（研究代表者：奥村弘）が採択された。

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	26220403	研究期間	平成26年度～平成30年度
研究課題名	災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立—東日本大震災を踏まえて—	研究代表者 (所属・職) (平成29年3月現在)	奥村 弘（神戸大学・大学院人文学研究科・教授）

【平成29年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準
○	A+ 当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
	A 当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	A- 当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B 当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C 当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である
<p>(意見等)</p> <p>本研究は、近年多発している大規模災害に対する地域歴史資料学の実践的方法論の確立に向け、市民参加型の歴史資料ネットワークの構築と活用という新しい視点から期待以上の大きな成果を上げており、文化財防災体制の構築にも大きな進展をもたらしている。とりわけ2015年の関東・東北豪雨災害（常陸水害）や2016年の熊本地震では、これまでの知見を提供するなど実践的研究の成果が明らかになっている。今後は、地域社会が災害を「記憶」し、災害に対応し得る強い「災害文化」を形成するという方法論の完成をとおして、地域歴史資料学と災害史研究の融合を図り、想定し得る海溝型地震や広域災害等への実践的対応を提示することを期待したい。また、イタリアの文化財防災等から得た知見をもとに、日本からの国際的発信も積極的に行うことが望まれる。</p>	

## II. 部局内センター等の活動

### II-1. 海港都市研究センター

2018年度、海港都市研究センター（以下、海港センターと略）では、大学院人文学研究科における共通科目授業の開講、韓国海洋大学を中心とする WCMCI 開催の世界海事史学会第7回国際大会への参加、ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（先端型）と連携した一連の研究会開催、紀要『海港都市研究』第14号の刊行などを行った。

#### [1] 人文学研究科共通科目の開講

今年度は前期に大学院博士課程前期課程の大学院生向けに「海港都市研究交流演習」、博士課程後期課程の大学院生向けに「海港都市研究企画交流演習」を開講した。

授業は濱田准教授が担当し、受講生が自ら選択したテーマ（翻訳を含む）について研究発表を行い、受講生全員で討議するというスタイルをとった。緩やかなテーマとして「異文化理解」を設定し、それぞれの関心に基づきながら、異なる専門分野の院生にも理解しやすいよう、プレゼンテーションや論の立て方に工夫をしてもらい、聞き手もまた、未知の分野の報告をいかに受け止め、自分の学びとするのかについて考えてもらった。六月には賀桂梅北京大学教授をゲストに迎え、「中国式フェミニスト・丁玲」と題した講演をしていただいた。

#### [2] WCMCI 国際シンポジウム（世界海事史学会国際大会）への参加

海港センターは例年、木浦大学・韓国海洋大学・台湾大学・中山大學・長崎大学等をパートナーとして持ち回りで海港都市国際会議を開催し、若手研究者に国際的な場における研究発表の機会を提供するとともに、韓国海洋大学を中心とする WCMCI（The World Committee of Maritime Cultural Institutes）の枠組みの代表者会議及び国際学術シンポジウムにも参加してきた。

2018年度、3月30日、31日に第8回世界海洋文化研究所協議会（WCMCI）が釜山の韓国海洋大学で行われた。テーマは Retrospect and Prospect of 10year's "Cultural Interaction Studies of Sea Port Cities、五つのセッションで23の学術報告がなされ、神戸大学からは奥村弘（City Formation of Modern Kobe and Citizen's Identity）と高田京比子（A Port-city as a Step to the Sea for Hinterland People）がスピーチした。佐々木衛名誉教授も The Methodology of the "Sea Port Cities Studies" — Rethinking of Sociological Research Method と題した基調講演を行った。海港都市研究センターからは他に樋口大祐、佐々木祐、濱田麻矢が参加した。

この大会は韓国海洋大学の海港都市研究プロジェクトが最終年度の10年目を迎えたという記念的な意味を持つもので、タイトル通り海港都市研究の回顧と展望につき、それぞれの国や地域、ディシプリンから考察したものが多かった。

#### [3] 海港都市研究会

本研究科の博士号取得者や内外の研究者が研究内容を報告して教員や大学院生らと意見交換を行う場として「海港都市研究会」を2011年度より設けたが、今年度も開催に努めた。今年度の開催実績は以下の通りである。

##### 第1回 海港都市研究会

日時：2019年1月28日（月）17:00-18:30

場所：A棟221教室（共同談話室）

発表者と発表題目：張修慎（静宜大学教授）

「戦時下台湾における『郷土意識』と柳宗悦の『民芸思想』」

開催主旨と発表要旨：文部科学省 科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（先端型）」（以下、「ダイバーシティ事業」）の補助金を得て、神戸大学人文学研究科（海港都市研究センター）と男女共同参画推進室の共催で実施された。本事業は、女性研究者の派遣・招聘プログラムを通して、女性研究者の比率を高め、さらに上位職における女性研究者の比率



を高めることを目指したものである。

張教授によるご講演は、『桃山歴史・地理』47号(2012年)に日本語で発表された論文の表題に倣った。具体的には、副題にあるように、「雑誌『民俗台湾』と『月刊民芸・民芸』との比較」を焦点とされている。柳宗悦(1889~1961)は、宗教哲学者、思想家、美学者、文学者そして何よりも「民芸運動の父」であり、戦時下では日本の「植民地」ともされた台湾の文学や民俗(学)などに見える「郷土意識」について、彼との関係で問題にされた。柳の運動を陶芸で支えたのは、バーナード・リーチ以外に、日本人では濱田庄司が代表的、と言える。当日は、彼の孫に当たる濱田琢司・南山大学教授に、文化地理学の立場からコメントも頂戴した。

セミナーでは女性院生からも質問があり、本学教員などとの交流を深めることができた。

## 第2回 海港都市研究会

日時：2019年2月18日(月) 16:10-17:50

場所：A112学生ホール

発表者と発表題目：李光貞(山東師範大学教授)

「日本近代文学における山東の記憶—『武装せる市街』・『台児荘』・『真昼の情熱』を中心として」  
開催主旨と発表要旨：今回も、女性研究者の派遣・招聘プログラムを通して、女性研究者の比率を高め、さらに上位職における女性研究者の比率を高めることを目指す、文部科学省 科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ事業」の補助金を得て、神戸大学人文学研究科(海港都市研究センター)と男女共同参画推進室の共催で実施された。

考察のまとめとして、黒島伝治『武装せる市街』は反戦小説、棟田博『分隊長の手記』は戦争小説、大田洋子『真昼の情熱』は恋愛小説と結論付けられた。三人の作家とも中国、とりわけ山東省に來たことがあり、『武装せる市街』と『分隊長の手記』も自由に読めない時代があったが、現在、『武装せる市街』も『台児荘』も自由に読める。山東省の歴史や文化、風土、生活(習慣)、人々の暮らしをよく知る者(中国人研究者)が、作品の舞台となった山東省(済南や青島、その他各地)とその作品のテーマや内容がいかなる関係にあるのかを考察することは、日本近代文学研究者の中で、日本人研究者や中国の数少ない研究者がこれまで行ってきた研究とは違った側面を提示できたであろう。そして、そこに本研究の意義もあると確信している、と李教授はまとめられた。

その後、中国における餃子食の研究で博士号を取得された于亜氏に文化地理学の立場と餃子食の観点から山東省に特徴的な点と省内における地域差など、コメントも頂戴した。

質疑応答では、海港都市研究センターでも、かつて青島調査を施しており、その担当者の一人から、青島で今も見られるアカシアとサクラ、といった植物のほか、日本人が残した景観と言える青島神社などについてコメントがあった。山東省の代表的な都市の中でも済南/青島とは、特徴的な対比関係があるのでは?という質問もあり、李教授は、両者の違いについて説明され、田舎臭い(泥臭い)/都会的だがずるがしこい、とでも表現し得る、相互不信の面まで言及された。最後に、企画を担った一人の藤田から、地理学研究の新しい傾向について、文学作品をも取り入れようとしている点に言及し、イメージ研究、と総括した。日本と中国、地理学と文学研究と言った、今後のさらなる研究交流の可能性が、示唆された。

## 第3回 海港都市研究会

日時：2019年3月13日(火) 9:30-10:30

場所：A112学生ホール

開催趣旨：国際結婚をテーマに2016年度に博士号を取得し、山東大学に就職された胡源源氏が、大阪府堺市などを中心とした聞き取り調査の結果について報告した。

## 第4回 海港都市研究会

日時：2019年3月19日(火) 10:30-13:00

場所：A棟221教室(共同談話室)

開催趣旨：3月30,31日に予定されている廈門大学主催の第9回WCMCI参加予定者によって研究発表の打ち合わせを行うと同時に、学内関係者に成果を披露した。

発表者と発表題目は以下の通り。

高木久史(安田女子大学)

Reintegration of Bronze Coins during the late 16<sup>th</sup> and the Early 17<sup>th</sup> Century Japan:  
Especially Focused on Transactions between Japan and China  
西橋卓也（神戸大学博士課程後期課程）

The Representation of Port in Movies: Port as Contact Zone  
大崎智史（神戸大学博士課程後期課程）

Media as Oceans: Archaeology of Oceans in Cinema

#### [4] 『海港都市研究』第14号の刊行

2019年3月、当センターの紀要『海港都市研究』第14号を刊行した。

#### [5] 厦門大学「世界海洋文化研究所協議会代表者会議および国際学術大会」への参加

3月30日及び31日に厦門大学で開催された会議では「海港と人文学との遭遇」をテーマにしたシンポジウムが行われた。神戸大学からは濱田麻矢のほか、博士課程後期課程在学中の大崎智史、西橋卓也が学術報告を行った。

## II-2. 地域連携センター

### 地域連携センター活動報告

大学院人文学研究科（文学部）では、平成14年（2002）から、「歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業」を開始した。同年11月には地域連携研究員制度を創設し、翌年1月には、構内に「神戸大学文学部地域連携センター」を設置した（平成19年の改組にもとづき、現在は人文学研究科地域連携センターと改称）。

これは阪神・淡路大震災以来の地域貢献活動を踏まえ、大学が県内各地の歴史資料の保全・活用や歴史遺産を活かしたまちづくりを、自治体や地域住民と連携して取り組んでいくことを目的とした事業である。

現在、連携事業は多岐にわたっているが、おおむね次の四つの分野で事業を進めている。

1. 歴史文化を活かしたまちづくり支援と自治体史の編纂協力
2. 歴史資料・災害資料の保全・活用
3. 地域歴史遺産を活用できる人材の育成
4. 地域の歴史文化をめぐる情報の共有や交流の促進

また、平成26年度から始まった科学研究費補助金基盤研究（S）「災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立—東日本大震災を踏まえて—」（研究代表者・奥村弘）のプロジェクトに加えて、平成27年度より地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）「地域創生に込める実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム」のプロジェクトのうち「歴史と文化」領域に関する事業、平成29年度より大学共同利用機関法人人間文化研究機構による「歴史文化資料保全の大学・共同機関ネットワーク事業」が、当センターを拠点として展開されている。

このほか年報『LINK【地域・大学・文化】』を刊行するなど、研究および研究成果の公表もおこなっている。

以下、個別事業ごとに今年度の活動の概要を報告する。

#### （1）歴史文化を活かしたまちづくり支援と自治体史の編纂協力

##### ①兵庫県との連携事業

##### a 兵庫県文化遺産防災研修会

- ・2019年3月18日、文化財保護法の改正を受けた次年度以降の防災研修会準備のための連絡会

- を開催。
- b 兵庫県地域創生局地域遺産室との連携
- ・2018年8月27日、地域遺産活用方策検討委員会（座長：奥村弘）を開催。2018年7月26日・11月1日・3月5日、県政資料館（仮称）基本計画策定委員会（委員長：奥村弘）
- ②神戸市における連携事業
- a 神戸市教育委員会との連携事業
- ・神戸村文書の研究と成果の公開事業：神戸市立中央図書館所蔵「神戸村文書」の読解、研究
  - ・市民向け古文書講座の開催：2018年11月12日・20日・27日（於こうべまちづくり会館）、12月1日（土）（於神戸市立中央図書館）
- b 住吉歴史資料調査会との連携事業
- ・本住吉神社所蔵文書を中心に翻刻作業および古文書勉強会を実施、併せて西摂の地域史研究を実施
- ③神戸市を中心とする文献資料所在確認調査
- ・神戸大学附属図書館所蔵古文書調査：社会科学系図書館貴重書庫所蔵の雑古文書3箱分および「久宝寺屋文書」の整理完了
- ④協定に基づく小野市との連携事業
- a 小野市小野地区歴史調査。
- 企画展「小野藩陣屋町と村のくらし～小野地区の江戸時代」関連講演会  
11月25日（日）「町年寄勤務記録がかたる小野藩陣屋町」（於コミュニティセンターおの）講師：  
加藤明恵
- b 伊藤家文書を活用した小野市域の幕末・明治期の歴史研究
- c 企画展「明治150年」記念企画展「竹橋事件と小野」（会期2019年4月20日～6月23日）への協力
- ⑤連携協定に基づく朝来市との連携事業
- a 石川家文書整理会の指導・助言（月2回）。蔵書目録の発行
- b 生野書院企画展「石川魚連の挑戦」（10月27日～12月16日）への協力
- c 奥銀谷自治協議会での山田家文書の展示（3月予定）
- d 多々良木地区における区有文書の整理（月1回）
- e その他市内資料の調査
- ⑥丹波市における連携事業
- a 連続講座「丹波の歴史文化を知る・つなぐ」（共催：丹波市教育委員会）：第1回2018年7月21日（土）（於山南住民センター）講師西岡真理、第2回2018年8月18日（土）（於春日住民センター）講師堀尾尚志、第3回2018年9月22日（土）（於ライフピアいちじま）講師山内順子、第4回2018年12月22日（土）（於青垣住民センター）講師出水清之助、第5回2019年2月16日（土）（於柏原住民センター）『ふるさと丹波の歴史を読む』刊行記念シンポジウム
- b 市内古文書等調査
- ・氷上町氷上区有文書を読む会の開催
  - ・春日町棚原区有文書調査、同地区所蔵絵図の修復・調査
  - ・柏原歴史民俗資料館所蔵資料の調査
  - ・石龕寺所蔵資料の調査
- c 『ふるさと丹波の歴史を読む』の刊行
- d 丹波古文書倶楽部の開催支援
- ・月1回の例会実施（第2土曜、講師木村修二）／12月8日フィールドワーク実施
- ⑦連携協定に基づく加西市との事業
- a 青野原俘虜収容所関連の資料収集・成果報告
- b 青野原俘虜収容所についての、中学生向け冊子「青野原捕虜収容所と加西市」の作成
- c 宇仁郷歴史資料館所蔵図書調査の調査・整理協力

- d 加西市北条町小谷地区との連携
- ⑧篠山市との連携事業
- a 「地域資料整理サポーター」活動への協力
- ・丹南町史編纂史料目録作成、資料翻刻（計6回実施）
- b 篠山市立中央公民館主催古文書入門講座（全8回のうち、2回を担当）
- c 部落史研究会ささやま
- ・西誓寺文書ならびに篠山藩政日記（青山家文書）輪読会への参加と助言（計8回実施）
- d 平成30年度篠山市・神戸大学連携推進協議会（2018年10月10日）、第13回篠山市・神戸大学地域連携フォーラム（2019年1月26日）への出席、
- ⑨尼崎市における連携事業
- ・尼崎市立地域研究史料館の専門委員として市沢が同館の運営に協力
- ⑩連携協定に基づく三木市との連携事業
- a 新三木市史編さん事業
- ・「三木市と国立大学法人神戸大学との連携に関する協定書」（平成25年6月締結）に基づく、受託型協力研究（三木市史編さん事業）実施、
  - ・地域編部会（口吉川部会、志染部会・吉川部会・緑が丘部会）活動の助言指導
  - ・『市史研究みき』、『市史編さんだより』編集
- b 三木市立みき歴史資料館事業への協力
- ・2018年11月30日（金）於・みき歴史資料館 資料館運営協議会へ議長として参加（木村）
- c 旧玉置家住宅文書保存活動
- ・市民グループ「旧玉置家文書保存会」に対し整理活動について助言
- ⑪明石市との連携事業
- a 「明石市における地域史料の調査研究業務」
- ・11月24日、大久保町大久保町安藤陽家文書調査・成果報告「古文書からみる大久保町の歴史—安藤家文書調査報告会」於大久保住民センター
  - ・明石市大久保町ト部家文書調査 計4回
  - ・明石市大久保町西島農会文書調査 計4回
- b 「明石藩関連資料調査・公開業務」
- ・明石市立文化博物館企画展「明石藩の世界VI～藩領を行き交う人とモノ～」(会期：9月15日～10月21日)への協力
- c 明石市史編さん関係
- ・二見町福里大西家文書調査： 計4回
- ⑫たつの市に関する連携事業
- ・神戸大学近世地域史研究会：月1回・日曜日開催。平成30年4月22日、5月27日、6月17日、7月15日、9月2日、10月7日、11月4日、12月2日、平成31年1月20日。以降2月17日、3月17日予定。
- ⑬福崎町との連携事業
- a 福崎町立柳田國男・松岡家記念館、および神崎郡歴史民俗資料館の資料調査・展示協力
- ・記念館記念展「松岡静雄展～南洋に魅せられた海軍大佐」(会期：9月15日～11月25日)
  - ・資料館特別展「明治の福崎～福崎の近代化と明治の人々」(会期：10月20日～12月2日)
  - ・松岡家関連資料の目録化作業
- b 『広報ふくさき』紙上での調査・研究成果の還元
- c 大庄屋三木家住宅の資料調査および展示協力
- ・文献資料調査（5月19日、8月18日・19日、9月24日・25日）
  - ・大庄屋三木家住宅特別展「三木家好学の当主 三木通深」(会期：10月6日～12月2日)
- ⑭協定に基づく大分県中津市との連携事業
- ・中津市歴史博物館（仮称）活用推進委員会への協力：委員長に奥村委囑、副委員長に松下正和

(地域連携推進室) 委嘱、近世展示アドバイザーに木村委嘱、2018年5月31日～6月1日に新博物館展示についての打ち合わせ。2019年2月14日委員会開催。

⑮協定に基づく人間文化研究機構および東北大学との連携事業

a 西日本豪雨災害資料の保全作業

- ・広島県立文書館での水損資料保全作業 (12月10日～13日)

b 地域歴史文化大学フォーラムの主催 (12月9日)

(2) 歴史資料・災害資料の保全・活用

①歴史資料ネットワークへの協力・支援

- ・奥平野村古文書勉強会：例会開催 (毎月第2日曜日)、チューター木村修二担当

②石川準吉関係資料の調査

- ・昨年度に引き続き、同資料の調査・研究を継続

③附属図書館震災資料への協力

- ・ハーバード大学ライシャワー日本研究所と附属図書館震災文庫との日本災害DIGITALアーカイブの連携・協力に関する覚書の締結に協力

④人文学研究科古文書室の所蔵文書整理

- ・2018年5月より人文学研究科所蔵御影村文書目録および木村酒造文書目録校正と整備作業を実施 (週2日)

⑤住吉歴史資料館での調査・研究

- ・国立歴史民俗博物館公募型共同研究『『聆涛閣集古帖』の総合資料学的研究』(共同研究員：古市晃)の一環として、住吉歴史資料館寄託資料を調査。

(3) 地域歴史遺産を活用できる人材の育成

①現代GP「地域歴史遺産の活用を図る地域リーダーの養成」事業の成果にもとづいて開講された大学院人文学研究科「共通教育科目」への授業提供

a 地域歴史遺産保全活用基礎論A・B: 地域歴史遺産の保全・活用のための基礎的講義を開講 (リレー形式。第1Q第2Qは木曜1限、第3Q第4Qは金曜1限)

b 地域歴史遺産保全活用演習A・B/第2Q: 古文書を用いた合宿形式の演習(9月13日～9月15日、於篠山市)。第4Q: 市民とともに地域文献史料の活用を図る専門的知識を得るための実践的演習(2月17～18日予定、於三木市)

②教員養成GP「地域文化を担う地歴科高校教員の養成」事業を定着させる活動

- ・「地歴科教育論C」の開講

③平成22年～24年度特別研究「地域歴史遺産保全活用教育研究を基軸とした地域歴史文化育成支援拠点の整備」事業を定着・普及させる活動

a まちづくり地域歴史遺産活用講座の開催

- ・神戸大学文学部公開講座、2018年10月6日(土)・7日(日)、於神戸大学文学部、主催：人文学研究科・地域連携センター、共催：兵庫県教育委員会・COC+ひょうご神戸プラットフォーム協議会、後援：神戸市教育委員会・神戸市灘区

b オプションプログラム古文書解読初級講座の開催(2019年5月22日、6月5日、12日、19日)、於：文学部学生ホール、講師：河島裕子氏、主催：人文学研究科地域連携センター

(4) 地域の歴史文化をめぐる情報の共有や交流の促進

第17回歴史文化をめぐる地域連携協議会

- ・テーマ「地域歴史遺産の〈活用〉を問い直すー地域資料館の可能性ー」(平成31年2月3日(日)、於：瀧川記念学術交流会館、104名参加)

#### (5) 地域連携センターを拠点とするプロジェクト

- ①平成 26 年度～30 年度・科学研究費助成金・基盤研究 (S)「災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立—東日本大震災を踏まえて—」
  - a 第 17 回歴史文化をめぐる地域連携協議会 (平成 31 年 2 月 3 日(日)) を共催
- ②地 (知) の拠点大学による地方創生推進事業 (COC+)「地域創生に応える実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム」
  - a 人文学研究科地域連携センター主催諸イベント (まちづくり地域歴史遺産活用講座、歴史文化をめぐる地域連携協議会等) を共催・後援
- ③人間文化研究機構 (基盤機関: 国立歴史民俗博物館)「歴史文化史料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」
  - a 「地域歴史文化大学フォーラム: 大学間連携の展望—歴史文化資料保全ネットワーク事業の役割—」 (12 月 9 日 (日)) の主催
  - b 第 17 回歴史文化をめぐる地域連携協議会 (平成 31 年 2 月 3 日(日)) を共催

#### (6) 地域連携研究と研究成果の公表

- ①年報『LINK【地域・大学・文化】』10 号の刊行
  - ・平成 30 年 12 月刊行、特集「地域歴史文化をめぐる〈場〉—つながりを生み出す環境づくり—」
- ②地域関連研究
  - a 地域連携センタースタッフによる科学研究費補助金研究: 4 件
  - b 講演、市民講座等への出講多数

以上、活動の詳細は、平成 31 年 3 月末に発行された、当センターの平成 30 年度事業報告書を参照。また、同報告書は、神戸大学学術成果リポジトリ Kernel に公表されている。

### II-3. 倫理創成プロジェクト

#### [1] 目的: 「リスク社会の倫理システム構築」と「多文化共生の倫理システム構築」

このプロジェクトは、平成 19 年度の人文学研究科改組時に、文化科学研究科の旧倫理創成論講座の担当教員が中心に立ち上げた。人文学における先端的学際研究として「知識基盤社会に相応しい大学院教育」を目指して、グローバル化と科学技術時代における新しい倫理規範を研究し、21 世紀の倫理創成の可能性を学際的に探求することを目的にしてきた。哲学、倫理学、社会学、地理学、文学などの教員と大学院生がともにプロジェクトを推進、展開している。

#### [2] 研究プロジェクトと人文学研究科の共通科目の実施とその経過

平成 18 年度に「倫理創成論」の講義を開始し、平成 19 年度から選択必修の研究科共通科目として「倫理創成論研究」と「倫理創成論演習」(博士課程前期課程)、「倫理創成論発展演習」(博士課程後期課程)を開講している。教員の指導のもと院生がアクション・リサーチ、フィールドワークに従事し研究を実施し、成果を様々な機会に発表してきた。神戸大学他部局を始め、国内外の他大学、他機関の研究者、NPO や市民活動家、ジャーナリストなどと文理の枠を超えて連携協力して、教育と研究を推進してきた。

研究活動の面では、国内、アメリカ、フランス、ドイツ、韓国、中国、台湾、カナダ、アイルランド、チリなどの研究者を招聘してシンポジウム等を開催してきた一方、韓国、中国、台湾、香港などの東アジア地域の研究者との交流も行ってきた。平成 22 年度から国立台湾大学、大連理工大学と連携し、持ち回りで毎年一回、英語を発表言語とする、若手研究者の発表を中心にした、Applied Ethics and Applied Philosophy in East Asia を共同開催している。第 1 回を平成 22 年 7 月に神戸大学で、第 2 回 (23 年) 大連理工大学、第 3 回 (24 年) 国立台湾大学で開催し、これに韓国の慶

熙大学校が加わり、第7回（平成29年）を開催した。内容は、東アジアの宗教なども含む、多様な観点から生命医療倫理、工学倫理、環境倫理、研究倫理および政治哲学あるいは応用倫理学・応用哲学の基礎に及ぶ。大学院生レベルから英語で発表する国際会議を継続的に実施する研究交流もプロジェクトのひとつの特色となっている。平成30年9月に第8回の会議（Applied Ethics and Comparative Thought in East Asiaとして）を神戸大学で開催し、その成果を下記の『倫理創成研究』のSpecial Issueとして刊行した。

### [3] 共通科目の実施状況

「倫理創成論演習」「倫理創成論発展演習」は、阪神地区の公害問題（西淀川の大气汚染被害、尼崎・泉南・神戸におけるアスベスト被害など）や地震防災、西宮市の市民による自然保護運動に関する聞き取り調査の記録作成と調査研究から始まった。平成22年度からその成果を土台に京都精華大学大学院マンガ研究科と共同しアスベスト被害に関するマンガ制作のプロジェクトを立ち上げ、大学院も含めた、共同授業の実施などを経て、平成24年に『石の綿 マンガで読むアスベスト問題』（かもがわ出版）を公刊した（永尾俊彦『国家と石綿』現代書館324頁参照）。授業は、この間、平成20年度後期から22年度にかけ、文部科学省大学院教育改革支援プログラム「古典力と対話力を核とする人文学教育一学域横断的教育システムに基づくフュージョンプログラムの開発」と連動して錬成され、現在に至っている。

平成24年から27年度は、震災後のアスベストリスクに関連する活動を授業で行った。この間、神戸大学「東北大学等との連携による震災復興支援・災害科学研究推進活動サポート経費」を受け、関連するNPOと連携して被災地の宮城県石巻市、女川町などで調査を行い、震災時のアスベストリスクに関する、啓発ブックレット『マンガで読む 震災とアスベスト』を作成、これを利用したリスク・コミュニケーション活動を大学院生が行った。ブックレットの制作は地方紙で報道され、その反響を受けて、平成26年度は神戸、東京、岩手のNPO、立命館大学、京都精華大学、神戸新聞、岩手日報と連携し、盛岡市でリスク・コミュニケーション活動（講演会、パネル展示）を行った。さらに、27年度は、より効果的なリスク・コミュニケーション活動を目指し、「倫理創成論」の一環としてNPO、徳島大学等と協力し、「震災とアスベスト」に関するカードゲーム「クロスロード」を制作し、防災活動のモデル校に指定されている、徳島県下の中学校で試行し、28年度にこれまでの成果に立ったアウトリーチ活動を東京大学および東京、山形のNPOと協力して行い、京都精華大学大学院マンガ研究科と協力し、『マンガで読む 震災とアスベスト』英語版（<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/repository/90003876.pdf>）を完成した。

「倫理創成論研究」は、平成19年度に学内外の講師が安全やリスク論に関する講義を行ったことから始まった。パリ第7大学フランス人講師による産業病の社会学講義、若手教員の共同研究の成果「共生の人文学」の講義、「知識基盤社会における倫理創成の現在と課題」のフォーラム、東日本大震災以後は、災害復興、原発事故やエネルギー問題を念頭にした講義などを行い、今年度は、科学技術倫理学、環境倫理学、情報倫理学、生命・医療倫理学、「研究倫理」の代表的な応用倫理学の諸原理と具体的な事例による問題分析を行った。特に、学際的視点を重視するとともに、事例研究の基礎を修得させるように努めている。

また、核兵器廃絶運動や放射能問題に関わってきた教員が、活動の教育への還元として、平成23年度から広島でのアクティブ・ラーニング「Discover Hiroshima」（2泊3日）を企画・実施している。広島平和記念資料館などを訪れた後、現地の大学生やNGO関係者らとともに、核問題を中心とした「戦争と平和」をめぐる諸問題について討議し発表し合う問題発見型プログラムの試みは、参加者からも高い評価を得ており、グローバル人文学科目として実施されている。

回	日程	授業内容
1	10/1	イントロダクション 茶谷直人
2	10/15	インフォームド・コンセントと自律 茶谷直人
3	10/22	インフォームド・コンセントと自律 茶谷直人
4	10/29	インフォームド・コンセントと自律 茶谷直人
5	11/5	「情報倫理学」 加藤憲治
6	11/12	「情報倫理学」 加藤憲治
7	11/19	「情報倫理学」 加藤憲治
8	12/3	科学技術と環境倫理 松田毅
9	12/11	科学技術と環境倫理 松田毅
10	12/18	科学技術と環境倫理 松田毅
11	12/26	工学倫理 藤木篤 (非常勤)
12	1/7	工学倫理 藤木篤 (非常勤)
13	1/21	研究倫理 菅原裕輝 (非常勤)
14	1/28	研究倫理 菅原裕輝 (非常勤)
15	2/4	試験

#### [4] 研究活動とその成果、アウトリーチの現状

これまで自治体や神戸の国連機関などと連携し、「防災文化」に関する公開シンポジウム、NPOと協力したアスベスト問題関連などの企画を行ってきた。倫理創成研究会での研究成果の公開と討議に加え、震災時のアスベスト飛散から身を守るための防塵マスクの普及活動をとおしてリスク・コミュニケーションを行う「マスクプロジェクト」(大島英利『アスベスト 広がる被害』(岩波新書 199 頁参照)を通じたアウトリーチ活動を行った。啓発ビデオ制作、震災時のアスベスト健康リスクに関する、市民向けアンケート調査(3万枚配布、2600ほどの回答、地元NPO、立命館大学に協力)、中皮腫患者の看護ケアを研究・実践している聖路加国際大学の長松康子准教授と協働し、イギリス専門医を招聘した「中皮腫緩和ケア」ワークショップ・講演会(患者の多い尼崎市で開催)、International Ban Asbestos Secretariat の Laurie Kazan-Allen 氏(科学研究費基盤研究(B)16H05579による招聘)による、世界のアスベスト問題の現状に関する講演(東京工業大学での第5回石綿問題総合対策研究会)などを行ってきた。

ブックレット『マンガで読む 震災とアスベスト』は、マスクメーカーの協力もあり増刷を重ね、計13,000冊を印刷した。岩手、宮城、福島沿岸部の公立図書館、被災地の希望者、医療関係者、東海地震・南海トラフ地震による津波被害が想定される徳島、高知、和歌山、静岡の沿岸部および淡路島の学校、公立図書館、自治体関係者と希望者に送付した。新聞報道後、和歌山県環境政策局の依頼で県下の学校と保健所、和歌山市、田辺市、新宮市の県環境管理部門主催の「震災時の廃棄物処理セミナー」で配布された。愛知県庁資源循環推進課の市町村担当者向けセミナーでも使用された。ブックレットは、精華大学関係者が中文版とハングル版を完成させ、インターネットで配信されている。30年度も、和歌山県環境政策局からの依頼でブックレットを送付した。

今年度は、平成24年に刊行の『石の綿 マンガで読むアスベスト問題』が絶版になったなか、今後も続く予想される、アスベスト被害の防止に活用するため、イタリアの例の紹介も付け加えた、改訂新版『石の綿—終わらないアスベスト禍』を京都精華大学と協力・作成し、神戸大学出版会から出版した。関連して2019年3月3日に開催の神戸大学大学院人文学研究科70周年記念事業キックオフシンポジウム「MANGA—人文学研究の新展開」のセッション「機能マンガの可能性：日本とイタリアのアスベストマンガから考える」を企画し、3月1日に神戸大学で第32回



タ科学技術ワークショップ「イタリアから考えるアスベスト被害：カザーレ・モンフェッラートからの報告」を行った。これまで連携してきた関西地区のアスベスト被害者団体・支援者（弁護士、ジャーナリスト、研究者など）も参加し、活発な意見交換の場となった。この様子は、下記のように、カザーレ・モンフェッラート市の新聞でも報道された。

8 **CRONACA**

**Lotta internazionale** Presentato lo scorso 3 marzo a Kobe. Presente delegazione AFEVA

# Un manga contro l'amianto

Narra la storia della strage in Giappone e "della Romana"

Enze  
«C  
VO,  
ch

►► CASALE MONFERRATO  
Un manga che racconta la strage per l'amianto in Giappone ma anche la vicenda di Romana Blasotti Pavese e del processo di Torino, riprendendo episodi e scene del fumetto *Exerit, dissolvenza in bianco* scritto da Assunta Prato e Gea Ferraris e pubblicato nel 2012. L'opera - che si intitola *Ishin-uata* («pietra come cotone») ed è stata scritta dal professor Matsuda - è stata presentata pubblicamente domenica scorsa, 3 marzo, all'università di Kobe, in Giappone, al termine di un convegno che aveva come argomento proprio l'impegno del manga (fumetto) come mezzo per sensibilizzare e coinvolgere la popolazione sui temi sociali.

**I 90 anni "della Romana"**  
E il 3 marzo era anche il 90° compleanno «della Romana», storica presidente di AFEVA (Associazione Familiari e Vittime amianto). Romana, una donna forte, combattiva, icona della lotta all'amianto in tutto il mondo, che ha perso cinque familiari a causa della fibra killer; una determinazione, la sua, che anni fa aveva avuto eco fin nella lontana foresta amazzonica, da dove era giunta una lettera di ammirazione e stima inviata da una donna che era venuta a conoscenza della sua vicenda. Una fermezza diventata esempio di quella che oggi viene definita "resilienza" e che, ieri come oggi, è sempre stata frutto dell'insorferenza per le ingiustizie e i soprusi di chi ha potere. Della forza dei «giusti» non assennari al male.

**L'Afeva in Giappone**  
Al convegno ha preso parte anche una delegazione di Afeva

composta dalla stessa Prato e da Nicola Ponderano. Le associazioni in Giappone, così come quelle di molti altri Paesi in tutto il mondo, sono da molti anni in contatto con AFEVA, l'associazione casalese che ha mosso i primi passi della battaglia all'amianto ormai alcuni decenni fa, per chiedere prima di tutto la messa al bando e poi la bonifica, fondi per la ricerca scientifica e la condanna dei responsabili causata dall'amianto.

**In Giappone la crocidolite fu bandita nel 1974** - spiega Assunta Prato - *l'amianto in generale solo nel 2006, anno in cui venne chiusa l'ultima fabbrica di amianto, a Sennan. Sono stati molti i processi risarcitori, ma non esistono statistiche specifiche.*

Nel pomeriggio del 28, ad

Sopra: Nicola Ponderano e Assunta Prato in Giappone per la presentazione del manga sulla vicenda amianto. Sotto: Bruno Pesce e Giuliana Busto con la presidente storica della AFEVA Romana Blasotti Pavese, il giorno del suo compleanno



►► Sono i loro compagni giornali, i prevedi calendari con gli arrivav, verso e vecchi Oggi, a gli sceni lunga r so, chi gioco, i propri ridotte «Attrai cali, si ne e su quella rimane la per la sua E que Anel una b uscen alle r d'Ital Enzo, ciso d «Io a quinc che st Perla biog prene Cetto «Lare re che go e, lo, con senso ti dell ragge, rto. lo benes: pscio, tati, on a 7/10/2022 10:27:53

**IL FUMETTO**  
Come strumento per sensibilizzare la popolazione sui temi sociali

Amagasaki, dove sorgeva la Kubota, azienda che produceva condotte in cemento amianto, si è tenuto l'incontro con una delegazione di ex lavoratori e familiari, guidati dal presidente dell'associazione delle vittime dell'amianto. Ad Amagasaki si è consumata una strage simile a quella di Casale, con circa 600 morti tra lavoratori e cittadini.

**Italia e Giappone**  
Il giorno successivo, all'Università di Kobe, si è poi svolta una assemblea aperta al pubblico con i vari rappresentanti delle associazioni giapponesi

e i loro legali. Si sono messe a confronto le legislazioni italiana e giapponese in merito alle tutele nei confronti dei cittadini e lavoratori e si sono ricostruite le vicende dei diversi processi.

**La particolarità della situazione giapponese è che l'azione risarcitoria è stata esercitata nei confronti dello Stato**, spiegano Assunta Prato e Nicola Ponderano.

**È stata inoltre seguita con molto interesse la descrizione dell'insorgere delle attività che Afeva ha svolto in questi anni con le scene del territorio, dal Concorso Cavalli all'Anno Amianto presso l'Istituto Balbo. In Giappone l'interesse verso le conseguenze dell'amianto è elevato anche a causa dei frequenti tumori che devastano il territorio e che causano enormi dispersioni nell'aria di polveri sottili e cancerogene»**

Massimiliano Francia

[5] 『21世紀倫理創成研究』 *Journal of Innovative Ethics* 第12号およびSpecial Issueの刊行  
平成14年度から5号が公刊された『倫理創成論講座、ニューズレター』に代わり、平成19年度の人文学研究科改組時に、倫理創成プロジェクトの研究紀要として、院生を含む若手研究者、教員の投稿論文を中心に掲載する雑誌を刊行し始めた。本誌は、神戸大学学術成果リポジトリ Kernel (<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/kernel/seika/NCID=AA12350231.html>)でも公開している。第12号も平成30年度末に刊行した。論文は公募しており、これまで関係教員以外にも他部局、他大学および海外（アメリカ、ドイツ、フランス、香港、ボスニア、チリ、イギリス）の研究者・専門家を始め、助教、ポスドク、院生そして研究者以外からも投稿があり、審査の上、毎号数編を掲載している。10号、11号、12号では、特に下記の「メタ科学技術研究ワークショップ」の成果を紹介している。平成21年4月に始まったリポジトリ Kernelのアクセス統計では本雑誌へのアクセスは、累計で平成31年1月末に約4.5万件あった（11号まで掲載）。同性婚の意味、スポーツ倫理学、クイア・ポリティクス、労働における排除論、被爆者における「生と死」の問題、東日本大震災と心の「復興」、環境リスク論などに関する論文へのアクセスが上位を占め、多いものは、9000件を超えている。

[6] 「メタ科学技術研究プロジェクト：方法・倫理・政策の総合的研究」の推進

平成28年4月発足の神戸大学先端融合研究環、人文・社会科学系先端融合研究領域のプロジェクトとして、本プロジェクト関係の教員に加え、人文学研究科、法学研究科、経済学研究科、国際

文化科学研究科、人間発達環境学研究科の教員を加え、「メタ科学技術研究プロジェクト：方法・倫理・政策の総合的研究」を28年10月より開始した。このプロジェクトは、知識基盤社会の土台となる、科学技術を焦点に、探究方法と価値規範、政治経済の相互に関連する不可欠の三つの観点、広義の「科学方法論」「科学技術倫理」「科学技術政治経済学」を統合し、科学技術に関する、人文社会科学の共同研究のスタイルを開発・確立することを志している。

これと連動し、28年度の「メタ科学技術研究ワークショップ」(WMST)の研究参加者の共同討議を基盤にして、29年度に、学内教員、外部の研究者、NPOの活動家などを交えて計画した外部資金の申請を行い、日本学術振興会の課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業に採択された。同年10月から「領域開拓プログラム」の「生命・環境技術の社会実装に関する先端融合研究－21世紀型参加のビジョンと試行」(29年10月から32年9月まで)を行っている。30年度は、以下のようなワークショップを行った。

第20回「メタ科学技術研究ワークショップ」(以下WMSTと略)5月25日、松田毅・神戸大学人文学研究科教授、茶谷直人・同准教授「生命倫理委員会について討議する(額賀叔郎『生命倫理委員会の合意形成』読書会)」

第21回WMST、5月31日、大島堅一・龍谷大学教授「原子力発電の費用と負担」提題

第22回WMST、6月7日、堀口真司・神戸大学経営学研究科准教授、高橋裕・同法学研究科教授、興津征雄・同法学研究科教授「『法が作られているとき』を読む－法の知の学際的観察」合評会

第23回WMST、6月29日、村山武彦・東京工業大学・環境・社会理工学院教授「リスクアセスメントにおける方法論と課題：環境リスクを中心に」提題

第24回WMST、7月20日、竹内憲司・神戸大学経済学研究科教授「再生可能エネルギーの経済学」提題

第25回WMST、7月26日、丸山英二・慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科特任教授「わが国における医学研究倫理規制」提題

第26回WMST、10月12日一ノ瀬正樹・武蔵野大学グローバル学部教授「『予防原則』と『前進原則』－科学技術に対する規制と推進の対比をめぐって－」提題

第27回WMST、11月1日、吉良貴之・宇都宮共和大学専任講師「長期的因果と責任の世代間分配に関する法哲学的考察」提題

第28回WMST、12月6日、広井良典・京都大学こころの未来研究センター教授「持続可能な医療－科学・ケア・政策の視点から」提題

第29回WMST、12月20日、岡崎敦・九州大学大学院人文科学研究院教授「資料と公共性」－問題の所在と議論の背景」提題

サイエンスカフェ神戸(共催)「いのちをデザインする医療――ゲノム編集とひとの誕生」平成31年1月14日(灘区酒心館ホール)、話題提供：石井哲也・北海道大学安全衛生本部教授、司会：伊藤真之・神戸大学人間発達環境学研究科教授、ファシリテーター：長松康子・聖路加国際大学看護学部准教授

第30回WMST、1月18日、中尾麻伊香・長崎大学原爆後障害医療研究所助教「原爆をめぐる科学言説の生成と変容」提題

第31回WMST、2月15日、黒崎ひろみ・清水建設株式会社土木技術本部バックエンド技術部「国内外の地層処分施設におけるリスクマネジメントの紹介」提題、木村浩(討論者)

第32回WMST、3月1日、Assunta Prato(マンガ*Eternit. Dissolvenza in bianco*. 2012作者) Nicolino Pondrano(AfeVa アスベスト被害者・家族の会)「イタリアから考えるアスベスト被害：カザーレ・モンフェッラートからの報告」、提題(神戸新聞社論説委員加藤正文による導入)

The 2nd International workshop on Meta Science and Technology in Kobe

3月24日（第33回 WMST）

Keynote Speaker: Konrad Ott, Professor of Kiel University (Germany)

“Ten Domains of Climate Ethics: Mitigation, Adaptation, Climate Engineering.”

(Including an outlook on Germany's search for a safe repository for nuclear waste”)

司会：Tsuyoshi MATSUDA, Graduate school of Humanities of Kobe University

Kenji TAKEUCHI, Professor of Kobe University (Environmental Economics):

“Renewable energy development in Japan”

司会：Takashi YANGAWA, Graduate school of Economics of Kobe University

Takayuki KIRA, Assistant Professor of Utsunomiya Kyowa University (Philosophy of Law)

“Normative range problem on intergenerational justice”

司会：Narufumi KADOMATSU, Graduate school of Law of Kobe University

3月25日（第34回 WMST）

Keynote Speaker: Françoise Baylis, Professor of Dalhousie University (Canada)

“Made in China: CRISPR Babies Lulu and Nana”

司会：Togo TSUKAHARA, Graduate school of Intercultural Study of Kobe University

Ping Yan, Assistant Professor of Dalian University of Technology (China)

“Gene Editing Baby in China: From the Perspective of Responsible Research and Innovation.”

司会：Horoshi TAKAHASHI, Graduate school of Law of Kobe University

Atsushi FUJIKI, Associate Professor of Kobe City College of Nursing (Engineering Ethics) “Reconsidering

Precautionary Attitudes and Sin of Omission in Emerging Technology : Focusing on Gene Drive”

司会：Nobuhiko HOSHI, Graduate school of Agriculture of Kobe University

Naoto CHATANI, Associate Professor of Kobe University (Greek Philosophy and Bioethics) “Aristotle and Bioethics”

司会：Mao NAKA, Graduate school of Humanities of Kobe University

上記のワークショップの報告内容に関しては、第19回から第29回までの要約を『倫理創成研究』第12号に掲載している、関連資料、共同討議の記録を「メタ科学技術研究プロジェクト：方法・倫理・政策の総合的研究」のサイト（<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/mst/index.html>）に掲載ないし掲載準備中である。

今年度のプロジェクトの運営にあたり、上記予算以外に、先端融合研究環プロジェクトおよび文部科学省「ダイバーシティ事業 女性研究者派遣・招聘プログラム」の関連支援経費を受けた。この場を借りて感謝したい。

## [7] 今後の課題

平成19年度後期からの文部科学省の資金を受けた現代GPによるESDサブコース、平成20年度後期からの大学院教育改革支援プログラムの実施などで活動が飛躍的に増加した時期を経て、ここ数年、活動は全体として落ち着いた状況にあったが、「メタ科学技術研究プロジェクト」を通して新しい段階に入った。ただ、今後の5年から10年を考えると、新しい担い手と発想も必要であると認識している。この課題についても、プロジェクトの遂行を通じて、対応していきたい。

## II-4. 日本文化社会インスティテュート

### [1] 目的

日本文化社会インスティテュートは、日本語日本文化教育プログラム、KOJSP、グローバル人材育成などの関連事業を総括するため、2014年4月に発足した。日本文化、社会に関する教育・研究および日本における人文学の教育・方法を、国際交流を通じて深化・発展させることを目的としている。

### [2] 活動内容

活動内容については、第2部I-1「外部資金による教育研究プログラム等の活動」「運営費交付金機能強化経費：実践型グローバル人材育成事業「日本語教育・日本研究を中心とした実践型グローバル人材育成事業」(80～83頁)を参照のこと。

### [3] 今後の活動

今までに構築された、主にオックスフォード大学、ヴェネチア大学、ハンブルク大学などの日本研究者との連携を中軸としつつ、新たに、ベオグラード大学などの東欧圏やハワイ大学などの環太平洋地域の研究者も加えたネットワークを発展させ、学際的・境界横断的日本研究を展開させることを目指す。また、全学的教育プログラムである「現代日本プログラム」や、神戸大学「アジア総合学術研究センター」における国際的日本研究プロジェクトなどとも連携しながら、さまざまな教育研究プログラムを実行する予定である。

## II-5. ESD コース（持続可能な開発のための教育コース）

### [1] ESD サブコースの実施

平成19年度に現代GP「環境教育」の部門で、発達科学部および経済学部と連携して採択された「アクション・リサーチ型 ESD の開発と推進」のプログラムとしての神戸大学 ESD（「持続可能な発展のための教育」）サブコースは、平成20年4月に開始した。その目標は、アクション・リサーチの手法で学生が地域から学ぶこと、「持続可能な社会」への人文学的アプローチを試みることで、他分野や実社会の様々な人々との交流を通じて、環境の複雑性を体で感じ、知的共同作業を経験することの三点にまとめられる。

このサブコースは、学内の複数部局が連携し、1年生の「ESD 基礎」から4年生までの授業科目を開設してきた。当初、3学部であったが、平成23年度に農学部、平成24年度に国際文化学部と工学部、平成25年度には医学部保健学科が参加し、それに伴うカリキュラム改訂を行った。また、平成22年度からは学内に ESD 推進検討委員会（WG）が作られ、関係学部選出の委員によって構成されていたが、27年度より委員会は共通教育の専門委員会となった。29年度には全学部が関連授業科目を開講する「全学体制」となった。これにより、規則に定められた14単位以上を修得したものに対して与えられていた「神戸大学 ESD コース修了認定証」も神戸大学長名で発行されることになった。

※「ESD」は、環境・人権・福祉・国際理解・健康などの「持続可能な社会づくり」に関わる諸問題を総合的に捉えるとともに、現場の様々なステークホルダーと連携し、多様な課題解決に様々な観点から参加できる人材の育成を目指すプログラムである。神戸大学では貧困・平和・正義・人権・倫理・健康問題などの幅広い観点を組み込んだ教育カリキュラムを作ってきた。各学部で学外組織とも連携してアクション・リサーチとフィールドワークの機会を用意して、学生が自治体や企業・NPO など地域の様々なフィールドに出て現場の人々とともに課題解決に取り組む活動を支援する。

## [2] ESD サブコースの実施状況

文学部では平成30年度は、ESD 関連の全学共通科目の担当および哲学・社会学・地理学専修が共同して、以下の授業を行った。

### 平成30年度 文学部 ESD コース科目 授業一覧

科目名	学期・時限	担当専修（教員）	備考（読替など）
ESD 論 A と B	(後期)水・5	5学部合同	1年生対象
環境人文学講義 I	(前期)月・2	哲学・社会学・地理学など	2年生以上
環境人文学講義 II	(前期)火・5	松本太（地理学非常勤）	自然地理学
ESD 演習 I	(前期集中)	哲学（松田）	環境 NPO 実践論と共同
ESD 演習 II	(後期)水・2	地理学（藤田）	地理学演習 II

各科目の授業内容は以下のとおりである。

#### ①ESD 基礎 A（持続可能な社会づくり1）、ESD 論 A, B（持続可能な社会づくり2）

これらの授業では、輻輳的な社会問題(環境・資源・食糧・経済・人権・労働・安全・医療等々、多様な社会的課題)から持続可能な社会づくりを考える。多様な講義とフィールドワークを通して、実践・理論の実際を知り、自ら考え他者と共同して行動する態度を学ぶとともに、自らの専門との関係性を考え、大学教育への新たな動機づけを得ることを目指す。

平成30年度「ESD コース」各回の授業内容

#### ESD 基礎 A

回	日程	授業内容
1	6/13	ガイダンス 松岡・清野・鴨谷（人間発達環境学研究科）
2	6/20	ESD とは？清野（人間発達環境学研究科）
3	6/27	ESD とフィールドワーク（ESD スタディツアープログラムの紹介） 松岡・清野・鴨谷（人間発達環境学研究科）
4	7/4	スタディツアー参加期間
5	7/11	スタディツアー参加期間
6	7/19	スタディツアー参加期間
7	7/26	フィールドワーク交流会+リフレクション松岡・清野・鴨谷（人間発達環境学研究科）
8	8/2	総合リフレクション 松岡・清野・鴨谷（人間発達環境学研究科）

#### ESD 論 A

回	日程	授業内容
1	10/3	ガイダンス ESD の枠組み（講義） 清野（人間発達環境学研究科）
2	10/10	SD の多様な課題①科学と ESD 伊藤真之（国際人間研究科）
3	10/17	SD の多様な課題②経済とサステナビリティ 佐藤真行（国際人間科学部）
4	10/24	SD の多様な課題③地域保健と持続可能な開発 小野玲（医学部保健学科）
5	10/31	SD の多様な課題④社会環境と ESD 原口剛（文学部）
6	11/7	SD の多様な課題⑤人権・平和と持続可能な開発 ロニー・アレキサンダー（国際協力研究科）
7	11/14	ESD と SDGs 松岡（人間発達環境学研究科）
8	11/28	リフレクション松岡・清野・鴨谷（人間発達環境学研究科）

## ESD 論 B

回	日程	授業内容
1	12/5	ガイダンス グループ学習ガイダンス (グループ作り) 清野・鴨谷
2	12/12	フィールドワーク準備ワークショップ
3	12/19	フィールドワーク関連講義 篠山農業体験 片山寛則 (農学部)
4	1/9	フィールドワーク参加期間 ESD スタディツアープログラムから選択 ☆南あわじ市かいぼり体験 ☆篠山農業体験
5	1/16	
6	1/23	
7	1/30	グループ学習発表+リフレクション松岡・清野・鴨谷 (人間発達環境学研究科)
8	2/6	グループ学習発表+総合リフレクション松岡・清野・鴨谷 (人間発達環境学研究科)

### ② 環境人文学講義 I

この講義では、哲学、倫理学、社会学、地理学専修、および本学他学部や他大学から各回の講師を選び、それぞれの専門領域の観点から、ESD (Education for Sustainable Development) を主題としたオムニバス形式の講義を行っている。今年度は、「環境と市民社会」の観点から具体的な問題解決と市民参加を視野に、現場を知る専門家、NPO の活動者も外部講師として招聘し、講義を行った。

### 平成 30 年度「環境人文学講義 I」各回の授業内容

回	日程	授業内容
1	4/9	「導入」松田毅 (哲学)
2	4/16	「原発問題再考」白鳥義彦 (社会学)
3	4/23	「『環境』は誰のものか? : 「生活環境主義」と「水戦争」」佐々木祐 (社会学)
4	5/7	「エネルギーの倫理学 1」松田毅 (哲学)
5	5/14	「風力発電」(海事科学部 大澤)
6	5/21	「エネルギーの倫理学 2」松田毅 (哲学)
7	5/28	「アスベスト問題とクロスロード」松田毅 (哲学)
8	6/4	WS 中間総括 第 1Q 終了 松田担当
9	6/11	「人の死に際をめぐる生命倫理的考察」茶谷直人 (哲学)
10	6/18	「釜ヶ崎とはどんなまちか? 1」原口剛 (地理学)
11	6/25	「釜ヶ崎とはどんなまちか? 2」原口剛 (地理学)
12	7/9	「貧困問題」中桐 非常勤講師 NPO 職員)
13	7/23	奥堀亜紀子 (哲学・日本学術振興会特別研究員)
14	7/30	「貧困問題」中桐康介 (非常勤講師)

※地震などの影響があり、日程などに一部変更があった。

### ③ 環境人文学講義 II

この講義は、松本講師が自然地理学の観点から自然災害と環境問題をキーワードに、気候や水文、地形によって形成される自然環境およびこれと関わる人間活動に注目し、地域をフィールドに、様々な事例を取り上げた。自然地理学の基本的知識を習得して現象のメカニズムを理解し、今後の問題解決の方向性について考察する力を養った。

#### ④ ESD 演習 I

前年度に続き、環境NPO 実践論（経済学部）と合同でワークショップ形式の授業を行った。福島  
の原子力発電所の深刻な事故を受けて、国民の意見が大きく割れている我が国の次世代エネルギー  
の問題を取り上げた。この問題に詳しい国（環境省と資源エネルギー庁）の担当者と市民を対象と  
したワークショップの手法に習熟しているNPO の専門家を講師として招へいし、参加者への情報提  
供と円滑な運営に努めた。最終的に30名ほどが、4日間最後まで参加した。以下は、詳細なプログ  
ラムの簡略版として理解いただきたい。

#### 平成30年度「ESD 演習 I」各回の授業内容

回	日程	授業内容
1	8/9	全体オリエンテーション
2	8/9	地球温暖化政策の現状と課題、気候変動問題、エネルギー基本計画講義
3	8/9	グループ作業「質問づくり」と専門家とのQ&Aセッション
4	8/10	講義：未来社会像と視点
5	8/10	アンケートの実施と類似価値観グループの編成
6	8/10	グループ討議：未来社会におけるエネルギー選択
7	8/10	エネルギー・シミュレーションの実施結果の振り返りなど
8	8/11	グループ討議（類似価値観）と異価値観グループの編成
9	8/11	環境倫理に関する講義（松田毅）
10	8/11	グループ討議（異価値観グループ）
11	8/11	最終発表（グループ代表による）と講評
12	8/12	個人による熟慮 プレゼン準備
13	8/12	グループ討議
14	8/12	個人による2050年のエネルギー選択のとりまとめ
15	8/12	個人発表と全体講評

授業は、近未来の電源/エネルギー構成について、受講生が自分の意見を持てることを意図する。  
学生の意見変容を評価するアンケートを実施したほか、授業方法の改善に資するコミュニケーション  
ンペーパーの記入もしてもらった。最終の個人発表時にも、グループのコメントなどのフィードバ  
ックを行った。

#### ⑤ ESD 演習 II

授業は、実際に街や村を歩くことで、フィールドワークに対する理解を深め、「持続可能な開発」  
の観点から考察する際に、現地で観察することの重要性を体得することを目標とする。今年度も引  
き続き、統一テーマとして「災害」を掲げ、主に土日を使って、随時、地理学の観点を重視した巡  
検（excursion）を行う。この授業の参加者はすべての回に参加しなくてはならないし、事前にレジ  
ュメを用意し、担当地でプレゼンを行うものであり、ハードワークではあるが、実際に現場を視察  
し、その場で考え、討論を行うことには大きな意義があると考えられる。

報告者の専門である地理学にとって「持続可能な開発」は重要な視点であり、地理学は、19世紀  
における近代地理学としての確立・発展以来、「環境」に対する考察を深め、人間生活との調和を図  
ろうとしてきた。特に「災害」は、環境に対する過剰な改変によって引き起こされる一面もあり、  
「持続可能な開発」に関して目配せしようとする場合、有効なテーマと考えられることを踏まえて、

地理学専修2年生対象の「地理学実習Ⅱ」を活用した。今年度は、地理学専修以外で受講希望者が1名現れ、昨年度までの本授業で着実に収めてきた成果を活用して、授業展開を狙った。

回	日程	授業内容
1～3	10/4 10/11 10/14	第1回 授業の趣旨の徹底・確認と今後の日程調整 第2回 外国での調査実例として、藤田からスペイン・ビルバオを説明 第3・4回 実地における踏査と説明（テーマ：①「大地震両川口津浪」碑、②安政地震時の道頓堀川周辺における津波被害と現代に考えられる危険性、③大阪府の施設「津波・高潮ステーション」の見学）、後日にレポートを課した。
5～8	11/23 12/1	第5・6回 実地における踏査と説明（テーマ：①兵庫県南部地震時における173号線と新幹線高架の被害、②西宮市仁川百合野町の「地すべり資料館」の見学）、後日にレポートを課した。 第7・8回 実地における踏査と説明（テーマ：①八坂神社（祭礼としての祇園祭の意味+花折断層）、②吉田山周辺における花折断層と吉田神社）、後日にレポートを課した。
9～14	1/17 ・24 1/19 2/2	第9・12回 中国におけるESDに関する以下の論文を受講生に報告してもらい、それを巡って議論した。郭 明「ESDの視点を取り入れた中国の高校地理教科書の分析－人民教育出版社の必修教科書を中心に－」『新地理』63-2、2015 第10・11回 実地における踏査と説明（テーマ：①砲兵工廠の跡（アパッチ族）、②毛馬閘門（淀川の洪水、新淀川、デ・レーケ））、後日にレポートを課した。 第13・14回 実地における踏査と説明（テーマ：①武庫川女子大学附属高校に残された管制塔の建築物と川西航空機の戦災とその後、②武庫川支流としての申川の付け替えと甲子園球場と住宅地区の開発）、後日にレポートを課した。

### 【3】 評価と課題

神戸大学ESDサブコースは30年度に10年目を迎えた。関連科目は文学部の場合、哲学、社会学、地理学の三専修の卒業関連科目であり、受講者数は一定水準を保っている。演習は、専門や学部が異なる学生がフィールドワークを行い、問題に現場で向き合う人々に出会い、考え、討議を重ね、自分の意見を説得的に伝える努力や工夫から、取り組むべき課題を見出すことを目標としてきた。また、コースの授業群は、関連分野の幅広い知識の獲得、豊かな経験の蓄積、専門性を深める端緒といった面での役割も果たしたと思う。今後も、この取組を継続し、神戸大学の教育制度全体のなかで学部教育や大学院の教育研究と有機的に繋げ、維持・発展させることが重要であると認識している。

2011年の東日本大震災、福島第一原発事故以降は、それらを意識した授業を行ってきた。30年度に取り上げたテーマやトピックスも、エネルギー問題や貧困のように、現代社会の動向を反映するものとなった。今後も、大学の教育研究と社会を人文学の見地から架橋する地道な取組を積極的に推進し、その裾野を広げてゆきたい。ただ、月日が経つに連れて、受講者の意識や状況と問題の変化も生じてきており、そのことを踏まえた取組が求められるだろう。学内では当該コースに参加する学部が増え、関係教員の継続的努力もあり、平成29年度から全学化することとなったことは評価されてしかるべきかと思うが、全学的には、コース発足以来の核となっていた教員が定年退職し、抜けていく時期になった。経済学部と文学部の合同授業も、経済学部の教員が退職したため、2019年度は文学部単独で行う。これまでの結果と反省を踏まえて行いたいのが、早晚、文学部でも教員の世代交代が起こることを踏まえた再構築が必要となるだろう。



### Ⅲ. 社会貢献

#### Ⅲ-1. 公開講座

文学部・人文学研究科では、地域の方を対象に毎年度公開講座を実施している。平成30年度には、「『嘘の人文科学』」をテーマとして、次のとおり実施した。

#### 平成30年度公開講座 「嘘」の人文科学

概要	<p>嘘をつくことは、普通よくないこととされています。しかし、人々が楽しむフィクションの世界や政治的な発言の場などで、嘘が効果的に用いられていることも事実です。人はそれを嘘とわかって楽しむこともありますし、嘘に踊らされて思わぬ本心を吐露することもあります。そもそも、人間が言語を用いる生物である以上、誤認や伝達ミス、あるいは送り手と受け手の解釈のズレにもなって、あたかも誰かが嘘をついたかのような出来事がたまたま生じてしまう可能性は常にあります。真実はひょっとすると、嘘の裏側にあるのかもしれませんが。こうした観点から、たとえば人間を「嘘をつく動物」ととらえたとき、文化の営みはどのようなものに見えるでしょうか？</p> <p>もちろんこうした問いかけは、「ポスト・トゥルース」の時代とも言われる現代をよりよく知るための一助ともなります。この講座では、人文学の様々な現場から、「嘘」について改めて考えてみたいと思います。</p>
開講期間	平成29年9月22日（土）・9月29日（土）午後1時30分～午後4時50分
時間数	6時間（1回1時間半の講義を合計4回）
場所	神戸大学瀧川記念学術交流会館大会議室
受講対象者	一般市民、学生
募集人数	100名
受講料	無料

なお、平成25年度から平成29年度までの公開講座のテーマと概要は次のとおりである。

### 平成25～29年度公開講座テーマ

	テーマ	概要
平成25年度	「人と「こころ」の人文学」	本年度の公開講座は、人文学から切っても切り離せない「こころ」が人とどうかかわるかと言う問題を取り上げます。倫理学、社会学、イギリス文学、西洋史学を専門とする四名の教員が担当し、それぞれの専門の視点から「人」と「こころ」の関わりについて、講義を行います。
平成26年度	「翻訳」の人文学	本年度の公開講座は、「『翻訳』の人文学」をテーマに開講いたします。人文学研究にとって「翻訳」という営みは非常に重要な意味を持ってきましたし、今後も不可欠な営みであり続けるでしょう。ただ、日本の人文学研究が外国の人文学研究をモデルにし、外国の文化を「翻訳」し輸入してきたものにすぎないならば、そろそろ「翻訳」を卒業してもよいのかもしれませんが、しかし、テーマとなっている「翻訳」は単に横書のもの（欧文）を縦書（日本語）に変換するという作業を意味しません。そうではなく、「翻訳」とは変換不可能なものを自覚しつつ再創造するという営みにほかなりません。本講座では、哲学、西洋史学、ドイツ文学、美術史学を専門とするそれぞれの立場から、「翻訳」という営みの意義について語ってもらいます。
平成27年度	境界を作る・越える	今年度の公開講座は、「境界を作る・越える」というテーマといたしました。「境界を作る」という行為は、地理的なものであれ、人間集団に関するものであれ、人間の文化的、社会的営みの最たるものと言えるでしょう。しかし、同時にそれは、人やモノ、情報が、「境界」を越えて易々と移動するという、決定的事実の裏返しでもあります。国境を越えた人・モノ・情報の移動が活発に行われ、グローバル化が叫ばれる一方、国境を強く意識するような、ナショナリズム的行動が立ち現れている昨今の情勢などは、まさにそうしたことの具体的な現れと言えるのかも知れません。こうした現象を私たちは、どのように理解し、受け止めていけばよいのでしょうか。本講座では、こうした「境界」をめぐる諸問題に対して、国文学、地理学、社会学、西洋史学、それぞれの立場から光を投げかけ、具体的な事例に即して考えて行きたいと思えます。
平成28年度	人文学と自然科学——学知探求の歴史と現在	ゲーテ作『ファウスト』の主人公、世界を根源まで窮めんとするファウスト博士は、悲劇の幕開け直後、こう嘆きます。「ああ、こうして哲学も、法学も、医学も、忌々しいことには神学までも、胸を焦がし隅から隅まで研究してきた。そのあげくの果てが、ご覧のとおり阿呆なままの私だ。」ここに描かれているように神学を頂点とする四学部の学問体系が中世ヨーロッパの大学システムの根本をなしていました。「人文学」と「自然科学」の区別がうまれたのは近代。世界史的に見れば新しい区分です。それ以降、個々の学問領域が画定されていくなかで、人文学の各分野では自然科学とのさまざまな付き合い方が学知探求の方法論として整備されてきました。そこには、自然科学的世界観への建設的批判、自然科学の言説を成り立たせている論理の研究、自然科学の展開の背景をなす科学史の精査、あるいは自然科学的手法を用いた人文知の探求など、それぞれのディシプリンに応じた多様な関係性が見出されます。本講座では、こうした「人文学と自然科学」の関係をめぐる歴史と現在について、哲学、芸術学、地理学、心理学、それぞれの立場から光を投げかけ、具体的な事例に即して考えたいと思えます。
平成29年度	詩と謡	太古より人は声を発し、うたを謡い、詩を詠じてきました。しかし、印刷文化が発展するなかで、私たちはことばに宿る「声」の要素（オラリティ）よりも、書かれた文字（テキスト）を重視するようになってきました。文字に向き合うことの多い文学部の学びにおいても、ことばの聴覚性、身体性が意識されることは少なくなってきたといえるでしょう。しかし昨年、ボブ・ディランがノーベル文学賞を受賞したことをきっかけに、謡の文学性について改めて注目が集まっています。そこで今年度は、文学、歴史学、言語学の立場から、文字に書かれ視覚を通して認識される詩と、音声として発せられ聴覚を通して認識される謡との関係性に目を配りつつ、詩とは何か、謡とは何かを改めて問い直し、それらの成り立ち、さらに人の思考とのつながりなどについて考えてみたいと思えます。

### Ⅲ-2. 高大連携事業

文学部・人文学研究科では、高大連携事業として出前授業、模擬授業等を行っている。平成30年度に実施された出前授業、模擬授業等の概要は次のとおりである。

#### 平成30年度実施の出前授業・模擬授業等

高校名	実施日	事業内容	
		事業内容	詳細
神戸大学附属中等教育学校	2018/5/22	出前授業	神戸大学 DAY
岡山県立津山高等学校	2018/5/26	出前授業	
夢ナビライブ 2018	2018/6/16	出前授業	
関西大倉高等学校	2018/7/13	出前授業	
大阪府立茨木高等学校	2018/7/14	出前授業	
神戸大学高大連携特別講義(公開授業)	2018/7/27	模擬授業	
西宮市立西宮東高等学校	2018/10/2	出前授業	
和歌山県立田辺高等学校	2018/10/19	出前授業	
兵庫県立加古川西高等学校	2018/10/23	授業見学	人文学基礎・ドイツ文学(a)
〃	〃	授業見学	西洋美術史(a)
〃	〃	施設見学	学部紹介・人文科学図書館見学
兵庫県立星陵高等学校*	2018/10/26	授業見学	景観文化財学
〃	〃	その他	学部紹介・人文科学図書館見学
兵庫県立兵庫高等学校*	2018/11/5	授業見学	人文学基礎・哲学(a)
〃	〃	授業見学	人文学基礎・中国文学(a)
〃	〃	授業見学	東洋史特殊講義(a)
〃	〃	その他	学部紹介
和歌山信愛高等学校*	2018/11/8	模擬授業	
〃	〃	施設見学	人文科学図書館見学
兵庫県立加古川東高等学校	2018/11/8	出前授業	
兵庫県立長田高等学校	2018/11/9	出前授業	
神戸海星女子学院高等学校	2018/11/15	出前授業	
兵庫県立御影高等学校	2018/11/20	出前授業	

神戸龍谷高等学校	2018/11/22	出前授業	
和歌山県立桐蔭高等学校	2019/3/14	出前授業	
兵庫県立御影高等学校	2018 年度前期	その他	前期に、教員免許資格科目である「地歴科教育論C」(担当者:河島真准教授、小山啓子准教授)を、兵庫県立御影高等学校と連携して実施した。

※出前授業：高校等へ本学教員を派遣し、授業を行うもの

模擬授業：「大学体験」として高校生の訪問を受け入れ、高校生向けの授業を行うもの

授業見学：大学で実施される通常授業を高校生が見学するもの

施設見学：研究室見学を含む

その他：上記以外のもの

上掲の表の最下段、兵庫県立御影高校との連携プロジェクトは、平成19年度から継続的に実施されている事業である。このプロジェクトでは、神戸大学文学部が高等学校地理歴史科教員免許取得希望者のために開講している「地歴科教育論」の一環として、兵庫県立御影高校総合人文コースの生徒たちがグループに分かれて「地域」をテーマとする課題研究（探究活動）に参加し、これを支援する取り組み（実習）を行っている。この取り組みは、国立大学の学部（大学院）と県立高校との個別のかつ継続的な連携としては、全国的に見ても貴重な実践例であり、大学生（院生）と大学教員が高校生の学習を支援・指導し、高校教員も教員をめざす大学生を指導するという、相互にメリットがある取り組みとして継続されてきた。

## 第3部

### I. 外部評価

#### I-1. 外部評価委員会

日 時：2019年9月29日（日）14:00～17:15

時：場所：人文学研究科C棟大会議室

外部評価委員：大国正美（神戸新聞社取締役）

栄原永遠男（大阪歴史博物館館長）

人文学研究科：奥村弘（文学部長・人文学研究科長・地域連携センター）、鈴木義和（2018年度評議員）、長坂一郎（2019年度評議員）、白鳥義彦（副研究科長）、宮下規久朗（2018年度評価委員長）、大坪庸介（2019年度評価委員長）、松田浩則（2018年度大学院委員）、樋口大祐（2019年度大学院委員）、濱田麻矢（2018年度教務委員・海港都市研究センター）、小山啓子（2019年度教務委員・海港都市研究センター）、村井恭子（2018年度学生委員）、大橋完太郎（2019年度学生委員）、松田毅（倫理創成プロジェクト）、前川修（日本文化社会インスティテュート）、中村秀幸（事務課長）、西田望智子（総務係長）、阪本祐二（教務学生係長）、徳宮俊貴（大学院生・記録係）、齊藤優（大学院生・記録係）

## I-2. 外部評価報告書

### 神戸大学文学部・大学院人文学研究科 外部評価報告

神戸新聞社取締役 大国正美

#### 1、総括

ポイント制の導入の結果、教授5人・講師1人の教員計6人減少に相当するという厳しい状況には正直驚いた。その中で、教員の退職後、新規採用まで2年半空け採用するという人事の工夫を重ねながら、広範囲で着実な取り組みが行われている。

地域連携センターや海港都市研究センターなど、「神戸大学ならではの」の特色ある四つの共同研究組織が運営され、学生・大学院生に多くの機会が設けられている。また外部資金を使ったチュートリアル形式の人材育成が図られ、市民との協働や高校―大学連携、特に兵庫県立御影高校と連携は長きにわたり成果を挙げているといえよう。

加えて、「表現手段としての漫画」をテーマにした国際シンポジウムや災害文化にかかわる取り組みを進めるなど、古典に限定されない教材を使って、現代社会における人文学の意味を問い直す試みには好感を持った。文学部70周年を記念して、その意義を広く社会に問う新聞連載も予定されており、さらなる成果に期待したい。

#### 2、「教育」と「研究」の報告について

##### 【文学部の教育】

教員の教育方法の向上を図るためにファカルティ・デベロップメントを行い、教員相互の授業参観や学生による評価アンケートなどは、高く評価していただろう。

人文学をグローバルな視点で学ぶことにも力を入れ、留学生との交流を通じてコミュニケーションだけでなく、課題を共有することなども行われ、学ぶところは多いと感じた。

##### 【大学院の教育】

大学院生1人に対し、他専攻の教員1人を含め3人の指導教員チームを編成しているのは、院生にとってより多角的な視点を学べると感じた。履修カルテも工夫が施されている。

北京外国語大学北京日本学研究センターとの間で、ダブルディグリー・プログラムが用意され、留学と単位取得、それぞれ修士論文を提出することで、二つの学位をえられる仕組みは、国際的に活躍する人材育成の方法として有効だろう。今後も継続して派遣を続けて欲しい。

##### 【研究】

地域連携センター・海港都市研究センター・倫理創成研究プロジェクト・日本文化社会インスティテュートの四つの共同研究組織は異なる研究分野の教員や大学院生が集まることで研究の視点や幅を広げている。

文理融合研究の推進にも新しい取り組みの意欲を感じた。競争的外部資金の獲得も安定的に獲得するには書類の作成など、教員の負担が大きいのが大変だろうと思うが、現在の大学の予算の仕組みの中で

はやむを得ない部分もある。教員のプロフィールの年次報告にもその反映が見られる。高い研究水準を維持するためにも継続してほしい。

自治体との連携事業にも多く取り組んでおり、グローバルであると同時にローカルにも力が入っているのは好ましい。グローバルは、外国の大学と何か一緒にやるだけでかなえられるわけではなかろう。地域のことを知り、グローバルな課題を地域の中で発見し、課題解決の実践を試みることで養われる。ローカルの中に普遍性を見つける取り組みを今後も継続してほしい。

### 3、課題

文学部はディプロマポリシーに「古典を通して」、大学院人文学研究科は「人文学の古典的役割」をうたっているが、国際研究の深まりや、例えば漫画を題材にした研究、災害への対処など、すでに神戸大学文学部・大学院人文学研究科では、現代社会への視座をしっかりと持ち、「古典」のフレームを大きく超え、幅を広げている。

既存の価値や目的の限界性を見極め、批判・反省することで新しい価値を創造することが求められているのである。現状を批判し課題解決力を養う—課題を見つける力をどう養うか、神戸大学らしさ、「ならでは」の人文学のありようとは何かに、にさらなる注力を期待する。これが文科系不要論へのアンチテーゼにもなるのではないか。文学部創設70周年を機に始めた新聞連載に期待したい。

なお欲を言えば、統計の評価の視角には工夫ができないかとも思った。たとえばグローバル教育推進のため海外留学が重視されているが、留学すれば4年で卒業する率は下がってくる。長期留学によって4年で卒業しなかった学生は別の統計を取るような改善ができないか。同様のことは人文学研究科博士課程前期課程を2年で修了した者の比率も同様である。

また民間企業は社会人採用や通年採用が強まっている。ミスマッチによる離職率も高まっており、就職率だけでなく離職率も問題である。例えば就職3年後のフォローなど、より多角的な観点から教育効果や学生の育ち方を見ていくことができないかと感じた。

こうした分厚い報告書を作ること自体、大変なご苦勞があったと思う。個人の研究時間やプライベートな時間を割いて、総括したことは容易に推測できる。ただそれが持ち回りで行われ、特定の教員だけに負担が偏らない仕組みになっていると聞いて、少し安堵した。その一方で教育や研究の効果の説明が制度の説明や、事業を実施したとの報告にとどまっている部分もあったのは、やや残念な印象も残った。その効果や学生・院生の受け止めなども知りたいと思う。

## 全体

・教育にかける労力・時間の膨大さに敬意を表したい。それに加えて研究活動も十分に行われている。研究科長は「奮闘」という言葉を使っておられるが、まさにその通り。学部・研究科の教育に対する熱意がひしひしと伝わってくる。また、その成果が着実に上がっている点も高く評価したい。一方で「改革疲れ」がないか心配である。

・人文学の衰退あるいは軽視が進むなか、神戸大学文学部・人文学研究科の取り組みをととても心強く思う。いまや日本の人文学は全体で支えねばならない段階にきていると考えるので、大学間競争を止揚しながら、日本の人文学を支える強力な拠点として一層の活躍を期待したい。

・神戸という国際都市という立地条件を十分に生かした国際的で先端的な教育・研究が意識的に行われている点は高く評価できる。また、阪神淡路大震災で大きな被害をうけた地域に立地する大学として、地域復興・活性化の取り組みが十分に行われており、高く評価できる。

・一部の教員・専修・教育研究分野への活動の偏りが恒常化する兆しが認められるが、負担の公平性を担保し、特定部分のみの疲弊が進行しないような仕組みの導入が必要なのではないかと。

### I 教育（文学部）

・学部教育では少人数教育が強調されているが、全国の国公立大学はほとんどが少人数教育。いかなる特色ある少人数教育を行っているかが問われるのではないかと。対学内向けの場合も同様。

・オックスフォード大学東洋学部日文学科の2年生全員を約1年間受け入れるという制度が学生に好影響を与えているとのことである。負担がかなり大きいと推察するが今後も維持してほしい。

・専修別学生数はバランスがうまく取れているが、人数制限などにより希望の専攻に行けずにモチベーションを失ってしまう学生が存在するはずなので、そのケアに注意してほしい。

・学部・大学院とも海外協定校にアメリカが1校のみと少ない。いろいろと問題はあろうが、学生・院生の留学先あるいは就職の観点から、拡充の方策を検討した方がよいと考える。

・研究不正の防止は、院生・OD・教員についてさらに重要であるが、取り組んでいる場合は記述した方がよい。取り組んでいない場合は取り組むべきである。

### II 教育（人文学研究科）

・後期博士課程の定員充足率が増加している。その対策は極めて難しいが、高年次生に対する精神的・経済的フォローに目配りが必要である。

・外国の協定校が多いことは重要であるが、重点大学を設定してその大学と将来にわたって関係を維持するための方策を立てる必要がある。外国の大学との交流は、特定の教員の人間的信頼関係と献身的な努力によって維持されるのが実情。その教員が定年退職あるいは転職すると、急速に交流の度合いが落ちることに留意した方がよいと考える。

・大学院修了生の非常勤講師採用は、教歴の実績づくりとして有効であるので、1つでも枠が広がることを期待したい。しかしこれを標準修業年限内に修了した院生に限定しているのはなぜか。理系的発想のように見え、人文学の実態に沿っていない。これを強く欲しているのは、むしろ博士課程の高年次生、もしくはいわゆるODであろう。彼らに対して門戸を広げることを希望したい。

### III 研究（文学部・人文学研究科）

・4共同研究組織というものが報告書の記載からは理解しにくい（単なる共同研究との違いなど）。

・サバティカル制度はもっと枠を広げられないか。負担の多い役職を担当した教員に割り当てられているとのことであるが、これは負担の公平の意味からも、ぜひ維持してほしい。

## 第2部

・ESD サブコースは「大学の教育研究と社会を人文学の見地から架橋する」取り組みとして共感する。そのうえで、どの程度の文学部受講生があるのか。受講の実態あるいはその効果を記述してほしい。